

---

# とある右方の異世界目録

零崎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある右方の異世界目録

### 【Nコード】

N4821U

### 【作者名】

零崎

### 【あらすじ】

テンプレな展開でネギまの世界へ。これは魔術を使う転生者のモノガタリ。イレギュラーの存在で世界はどう変わるのか。

注意 この物語は『チート』『最強』等の要素を含んでおります。読む際にはお気を付けください。

## プロローグ（前書き）

前作「聖なる右を持つ者」をお読みの方はお久しぶりです。  
初めての方は始めまして、零崎です。

長い間お待たせしましたが、取りあえず投稿です。

## ブローグ

事故死。それが俺の死亡理由のハズだ

18年とは短いようで長い人生だった、まさか車にひかれて死ぬとは思っていなかった

普通の高校に通う一介の高校生。もうすぐ卒業を控えた身での事故成績だっていい方だったし、友人関係もいい方だった

それ以外は端的に言って普遍だったが

事故と言っても、誰かを庇った訳でも無い。唯、酔っ払いが車を暴走させて俺はそれに巻き込まれた

事故の瞬間「ああ、コレで俺の人生が終わるのか」と、そう悟った次の瞬間には意識を手放していた

すべてが真っ白な部屋、そこに俺はいた

「……知らない天井だ」

目覚めてすぐに、お決まりなセリフを俺は言う

俺は事故って死んだはずなんだがな

「……ずいぶんと余裕なんですね」

「うわっ!」

俺の後ろで気配もなくいきなり話しかけてきた人がいた

すぐに後ろを振り向くと、同年代くらいの女の子がいた

「あ、この姿は仕様なので気にしないでください。こちらのほうが話しやすいでしょう?」

その言葉に疑問を抱く

「仕様?」

「あ、伝えるの忘れてましたけど、あなた死にましたよ。それと、私は神です。」

「は?」

神（自称）は淡々と言い放つ

「自称ではありませんが、まあその辺は置いときましょう  
別に大したことでもないのです」

「ちょっと待て、状況を整理させてくれ」

「構いませんよ、どうせ時間はいくらでもあるわけですから」

約一時間後

…ふう、大分落ち着いた

しかし何故こんなことに？ よくあるテンプレ的展開か？

「まあ、簡単に言うとそうなりますね」

……心読めるの？

「はい、神ですから」

……まあ、その辺はいいや。

「で、なんでその神様がここにいるの？」

「単刀直入に言いますが、あなたは選ばれたのです！」

「世界を救う勇者とかにじゃ無いよな」

「それを望むならそうしてあげてもいいですけど」

「全力で遠慮する」

「つか話が脱線し過ぎじゃね？」

「あなたが脱線させたんでしょ。私も乗りましたけど。

それはともかく、あなたは事故で死に、このまま輪廻に組み込まれる運命でした。ですが、私が偶然にもあなたを選び、転生させてあげる事になりました」

「テンプレ乙」

「自虐乙ですね」

切り返されてしまった

「では、ネギまの世界へ行つて貰うので、いくつか能力を与えたいと思います。では、欲しい能力を言ってください」

能力、ね

死亡フラグ満載のネギまなら戦闘系は必須じゃないか

「まず最初、禁書のフィアンマが使う聖なる右。もちろん完全状態で無制限」

「チートですね、大丈夫ですよ」

正直投影なんかよりずっと強いと思うんだがな、右手を振るだけで勝てるとかチートも甚だしいし。むしろ今まで出なかったのがすご

いと思う

本物の使い手が俺様で小物臭ハンパねえ！　みたいな感じだったからだろうか。俺は好きだったか

「次はインデックスの十万三千冊の魔導書の知識」

「おっけーです。頭の中に記録をしておきますので。ついでに他の魔術の知識を全部入れちゃいましょう」

なんか勝手に魔改造されてんだけど

「忘れないように完全記憶能力まで付けておきました。ちゃんと脳が壊れないようにしておきますね」

なんかおかしな事になっとるし

「次は聖人並みの身体能力で、弱点なしにして。」

「はい、わかりました。ついでに不老にしましたので。まあ、大体こんなものですか？」

「サンキュー神様、オッケーだ」

「送る時間軸は原作のおよそ1000年前です。では、次の人生をお楽しみください」

次の瞬間、足元に穴があき、落ちた

叫ぼうとしても声が出無かった。焦るが、冷静になろうとして気付



いた

落ちているハズなのに浮遊感が無い

浮遊感の無い落下をしながら、俺は意識が薄れ、数秒経ったくらいで意識を無くした

「……精々私を楽しませてくださいね」

その言葉は、俺に届く事は無かった

## プロローグ（後書き）

短いですが、プロローグです。

近いうちに一話も投稿します。

今度は作り直さなくていいように頑張りますので、よろしくお願いします。

## 第一話 陰陽師（あべのせいめい）（前書き）

サブタイはアニメ禁書を意識してやってみた。  
うまく使いきれぬ気はしないですけどね。

第一話 陰陽師（あべのせいめい）

唐突に目が覚める

落ちていた時から浮遊感は無かったが、今は背中に地面の感触を感じる

軽く目を開けると、暗い森が目に入った。

倦怠感などは無く、体の調子は良好と言えるだろう

体の感覚を確かめながら立ち上がり、背中の土を払う

まずは現状確認だな

自分の格好をしてみる

上も下も赤の修道服で、髪も赤い。鏡が無いから顔は分からん

体つきはあまり鍛えているようには見えませんが、筋肉は意外とある。いわゆる細マッチョという奴か

取りあえず見晴らしのいい場所を探し、見渡す。すると、近くに  
あるであろう町から火の手が上がっているのが見える

「ええ……？」

いきなり何？  
何なのこの状況？

でも取りあえず首を突っ込んで見る事にした

聖なる右も使えるみたいだから、俺に敵は無い

「不味いな……オイ、神鳴流の到着はまだか!!」

「まだです！ 今しばらくかかるかと！」

クツ、まさか土蜘蛛が現れるとはな

「オイオイ、もう少し骨のある奴はいねえのかい？ 晴明の野郎とかよお」

土蜘蛛はあくびをしながらこちらを見る

土蜘蛛の周りには、戦って死んだ仲間の陰陽師達の死体がある

奴が来て戦い、爆発の術も多少つかった所為で周りに火の手が上がり、一部は燃え崩れている

行く手を阻む為に壁を張れば、周りに手を伸ばしてガラガラと壁を突き崩していく

奴は急にきたと思えば、「暇なんだよ、相手しろや」と襲ってきた

土蜘蛛は巨体を俊敏に動かして警護についていた陰陽師を瞬く間に倒してしまった

何故急に襲ってきたのか、理由さえ分からない

いや、もとより『理由』なんてモノを持つてる相手でも無い

だが、ここで終わるわけにはいかん

応援の神鳴流、もしくは晴明様の到着まで持ちこたえなくては……

「困っているようだな。手助けが必要か？」

その声に振り向く

其処には、見たことも無い服を着ている男が立っていた

「貴様……何者だ!!」

「そんな悠長な事言ってる暇があるのか？ アレ土蜘蛛だろ。下手したら皆殺しにされるぞ？」

そんな事は分かっている！

だから応援を待っているのだ

土蜘蛛<sup>アレ</sup>はもはや災害とさえ呼べる妖怪だ。我々一介の陰陽術師に  
どうこう出来る存在では無い

だが、清明様さえ来ればこんな奴など……

「あん？ 何だお前？ 見た事ねえモン着てんな」

唐突だが、俺はフィアンマと名乗る事にした

燃える赤の象徴の聖なる右を使うなら『右方のフィアンマ』を名  
乗れるだろうしな

右方を意味する『ラト・ディストロ』も加えて『ラト・ディスト  
ロ・フィアンマ』とでも名乗ろうか

コレだと名前がラトになりそうだが、フィアンマと呼んで欲しい

元の名前？ 忘れた。と言うより消されたと言うべきかな

さて、現実逃避をやめようか

「誰だって聞いてんだろ？ 答えねえならさっさとぶっ殺すぞ？」

土蜘蛛

見た感じ般若の面の様な顔をした四本の腕を持つ大男だ

確か、こいつは強さのあまり天災にさえ例えられたと言われるな  
強さは周りを見れば分かる。陰陽師の死体が転がり、周りの建物  
に火が移り、行く手を阻もうとした壁は容赦なく突き崩される

だが、俺からすれば最初からおもしろい相手が来た、と思える。  
不謹慎だがな

「俺様はフィアンマだ。覚えてるか？」

アレ？ 今自分の事『俺様』って言わなかった？

勝手に変換されてんだけど

「ふい、ふいあ？ 何だその分かりずれえ名前はよ」

ま、横文字には慣れて無いんだろう

「まあいいや。で？ オメエ強いのかい？」

「ああ、強いぜ？」



土蜘蛛は唇を上げ、ゆつくりと体をかがめた

「ならいくぜえ……オラア!!」

轟!! と音を立てながら突進してくる

俺は唯、右手を振るのみ

土蜘蛛は轟音と共に吹き飛ばされ、瓦礫に埋もれた

「な、何だ……? それは……」

後ろに居た陰陽師達が俺の右肩から生えてる(?) 聖なる右を見て驚いている

まあ普通驚くよね

俺も釣られて第三の腕を見る

……アレエ?

何で空中分解しかけてんの?

神上状態なら空中分解なんてする筈が……

『あ、すいません。まだ体が神の右席みたいな状態じゃ無いのと体に馴染んで無いので、使うには制限つきますよ』

なるほど、肉体が人間だから完全には扱えないと? 神の右席は

体の構造が人間より天使に近いらしいし、その辺も関係あるのだろう

馴染ませるには使うのが一番だろうし、戦うってのはうってつけじゃないか

早めに体を天使に近づける魔術を構築しないとな

それでも十万三千冊の魔道書の知識のおかげで完全には空中分解しないみたいだし、問題は無いだろう

そんな事を考えていると、ガラガラツと瓦礫をかき分け、土蜘蛛が現れた

「……やるじゃあねえか。お前の名前は覚えておきてえな。もっかい言ってくれや」

「フィアンマだ。しっかり覚えろ」

「よしよし、しっかり覚えといてやるよ」

その言葉と共に腰を屈め、力を溜める土蜘蛛

「次は全力だ」

またも轟！！と音を鳴らし、爆風を巻き起こしながら突進してくる。

その速度は人間が近くするには早すぎる速度。いくなれば弾丸のような速さ

俺はそれに反応は出来なかった。否、反応する必要が無かったのだ

閃光と共に聖なる右は土蜘蛛を吹き飛ばす

建物を壊しながら貫通し、数百メートルもの距離を飛ばされる

土蜘蛛は瓦礫に埋もれ、動かない

だが、数秒後にガラガラツと音を立てながら瓦礫をかき分け、立ち上がった

吹き飛んだ土蜘蛛は右側の腕を二本無くしていた

「……ハ、ハハハハハ！　やるじゃねえかよ！」

うわあ、バトルマニア戦闘狂だな

だが、力を使うには中々いい。頑丈だしな

しかし、土蜘蛛も腕が無いのに気付いたらしく

「チツ、腕がコレじゃ晴明の野郎に滅されちまう。しょーがねえ。今回は帰るか。次も楽しみにしてるぜ。ふいあんま」

と言って何処かへ行った

あの後、俺は土蜘蛛を倒す為に応援として来た安倍晴明と神鳴流の剣士達と会った

剣士達は警戒しまくってたが、生き残った陰陽師が俺の事を話してくれたらしく、結構簡単に警戒を解いてくれた

一応まだ信用はして無いみたいだがな

なんにせよ、土蜘蛛を追い払ったという事で礼をされた

礼と言っても、酒の席に誘われたただけなのだが

その酒の席で俺と晴明が意気投合し、陰陽術を覚えてくれる事になった

だが、代わりに

「お主のその奇妙な腕を見せて貰えんかのう」

と頼まれた。晴明は俺の聖なる右に興味津津らしい

「構わんよ。晴明の頼みだからな」

「それはありがたいのう」

ジジイ口調だが気にしない

この時代の貴族ってこんな喋り方なのか。どうでもいいことだが「ほう、コレが土蜘蛛を倒した腕か。これはまた奇妙なものじゃのう」

そりゃ俺以外にこれを持ってる奴なんていないだろうよ

そもそもこの世界に魔術って存在するんだろうか

存在しないなら俺が少しずつ広めていくかね

まず手始めに陰陽術に魔術を加えて行こう

俺が晴明に陰陽術を習い始めて二年が経った

え？ 時間が飛んだって？ 気に済んなよ

いわゆるキンクリって奴だ

まず手始めに、『倉庫用』術式を作ったりした

影を使ったものだ。めっちゃ便利

ちなみに俺は寿命じゃ死なないと晴明にだけ教えた

『ぜひその不老になった方法を教えてくれ』と頼まれたが、断った

不老不死を目指すのは人の性<sup>さが</sup>かな

俺はあの神に勝手にされただけだが

「何を現実逃避しておるんじゃ？」

「気にするな。やり過ぎたかなとは思ってるが後悔は無い」

陰陽術に魔術を加える

陰陽術の知識ももちろんあったから、この世界の陰陽術に対して改良に改良を加えて行った

道教のタオは人に『気』を当てる術式なのに対し、これを土地や世界に応用したのが『風水』

科学的に言えばガイア論で、世界を一個の生命とした医学のような物だ

他には式紙を使った術なんかと、いろいろあった

陰陽術はそれら全ての総称と言ったところだろう

最も、魔力の精製方法からして違うから少し手間取ったがな

おかげで陰陽術の中でもいくつか派閥が分かれた

ちなみに宗教防壁についてだが、アレは別に十字教じゃ無くてもいい

別に十字教にこだわる必要も無いし、日本では仏教が主流だったし。他にも宗教は幾らでもあるしな

そんなわけでこの世界における宗教防壁の定義は判明

しかし、晴明は流石天才陰陽師と言われるだけあるね

「まさかここまでやるとは……」

京都にある朝廷に使えている公家だから、守りの為の術式をなんたらかんたらと言いつつ出したので、風水を使った水路などで術式を作る為の知識を教えたらあつという間に習得して強力な防御結界を築きやがった

コレ多分生半可な攻撃じゃ傷一つつかんだらうなあ

試しにルーン文字での火をぶつけてみたら、ある一定ラインから先に攻撃が通らなかつた

一応清明も呪術組織の一員だし、他の奴らも手伝っては居るのだが、何せレベルが違う

清明が作る為の図面を作成し、部下がソレの通りに寸分狂わず作った

「お主のおかげだ。コレで朝廷に尽くす事が出来た。何か礼でもしたいのじゃが」

「いやいや、これはお前の才能さ。礼というなら、刀を貰えないか？」

「刀、とな？ お主剣士じゃ無かるう。刀がいるのか？」

「剣士じゃ無くても日本の刀は価値が高いからな」

例を上げるなら天下五剣と言われた童子切、鬼丸、三日月宗近、大典太、数珠丸 辺りだろう

名高い妖怪を切ったり、將軍が持っていたり、美しいと認められたりとレベルの高いものは相当だ

出来れば一から作りたい。最初から魔術を使う事を前提として使う刀を使いたいしな

「ふむ、ならば名高き刀工を教えよう。わしからの頼みとあれば断らん筈じゃ」

「刀工か、ありがたいな」

「何、それで礼になるというのならこっちもありがたいからの」



そんなわけでやってきました

安綱やすつなと呼ばれる刀工は伯耆国大原（今の鳥取県の辺り）に居るらしく、歩いて移動した

移動方法？ 平地なら一瞬で移動できるけど、山とか間にあるから一日近くかった

「お前が安綱か？」

「そうだが、あんた誰だ？」

「安倍晴明からこれを預かっている」

そう言っ手紙を出す

安綱はそれを読んだ後、俺を見て言った

「……それで、刀を打って欲しいのか？」

「ああ、それと出来れば俺様も刀を打つのに参加したい」

それを言っ途端激昂した

「ふざけてんのか！？ 俺の仕事に手え出す気ならうたねえぞ！！」

「手を出す訳じゃない。特殊な仕掛けをするだけさ」

「仕掛けだと？ どうするつもりだ」

「説明が少々面倒だが、時間はある。ゆっくりと話してやる」

「……なるほど、その魔術ってのを使うのに都合のいい刀が欲しいって訳だ」

「そうだ。だから刀を打つこと自体には手を出さん。が、工房には少々細工をさせて貰う」

とは言っても、道具類に仕込む訳でも無く、打つ前の刀に魔力を注ぎ込み、打っている途中も少し魔力を注ぎ込むだけだ

俺が打っても出来のいい刀が打てる筈も無いので、工房に細工して安綱が打つたびに魔力が刀に流れ込むようにする

それを二本程作って貰うつもりだ

俺が使う機会があるかは分らんが、念のために持っておくのも悪くは無いだろう

誰かに持たせてもいい訳だしな

一年

安綱は一年掛けて二本の刀を打ってくれた

出来は上々、魔術に使うことも出来るだろう

「ありがたいな、こんな名刀を打ってくれるとは」

「やるからには手を抜かない性質でね」

一年かけて作ったとはいえ、工房は俺に細工され、いつも通りとは言えない中打ったんだ。疲労は相当なものだろう

それでこの出来だからな、驚嘆するよ

何せ、鉄を簡単に斬ったからな

礼に魔術での刀の作り方を教え、帰る事にした

コレでまた魔術用の刀が増える事に……なるかなあ

更に数年

魔術も相当使いこなせるようになったから、世界を回ってみようと思う

ついでに言うと、陰陽術のほかに鋼糸ワイヤの技術を練習した

単体で使えるほど慣れてはいないが、術式を構築するのに役立つ

ちなみにこの世界、鋼糸はまだ無いので自分で作った

何故こんなものが作れたかというと、あの神の所為

アフターケア良過ぎないか？ 便利でかなり助かってるけどさ。  
いろいろ知識無駄に入れ過ぎだろ

閑話休題

さて、取りあえず現実逃避をやめて現実を見ようか

「お？ もついいのか？」

何故土蜘蛛がいるのか。何故なら最初に戦ったときに俺の事を気にいったらしい

また戦いたいとやって来た。迷惑過ぎるだろコイツ

結局また叩きつぶし、どっかに行った。追わないよ、面倒な事になりそうだから

まあ、またいつか会う事になりそうだけどな。……余計なフラグ建てたかな

俺は世界に魔術を広めていくつもりだ

今世界がどうなっているか自分の目で確かめる必要がある

いくつか組織があるなら利用したいところなんだがな。多分まだ勢力としての力は無いだろう

「寂しくなるのう」

「まあ、お前が生きてる間にはもう会えないかもな」

「そうじゃの、もし会うとしても子孫とじゃろうな」

そして俺は日本を出て、ユーラシア大陸へと渡った

## 第一話 陰陽師（あべのせいめい）（後書き）

晴明との出会い。陰陽術が魔術寄りに……

少しずつ原作がずれて行く。大丈夫かなあ……

名前の『ラト・ディストロ』ですが、インフル様の提案です。  
ありがとうございます。

感想は常時募集中です。よろしく願います。

## 第二話 聖女（ジャンヌ＝ダルク）（前書き）

今回説明、  
というか地の文多し、です。

## 第二話 聖女（ジャンヌ・ダルク）

1054年 ギリシア・ローマの両教会は完全に分裂したとされる  
だが、偶々近くにいた俺が間に介入し、代表者どうしで話し合いを  
させ代わりとして魔術の情報を提供したところ、俺をトップに一つ  
に纏まった

魔術の情報を簡単に渡していいのかって？ 問題無い

この時代ヨーロッパには魔術は既にあるらしく、原作の段階で魔術  
が無いのは魔法の普及率に負けたからだと予想する

つまり、魔法に負けない程度魔術を知る人物がいればいいわけだ

それに俺はこの時代でヒントを与える程度しかやっていない

……最も、それが的確過ぎると言われ、分裂を止めた事もあってあ  
れよあれよと言う間にトップに上り詰めてしまったのだが

面倒事はしない主義なので、誰かを代理にして十字教を普及させる  
為と理由を付け、世界を回ることにした

というかそれが最初の目的だったんだがな

神父というのは信用されやすらしく、教会のある町や村では歓迎  
された



俺が年を取らないのを不審がる人間も居ない

意外と気付かれないものだよ。最も、神父という立場と数カ月おきに移動しているからだろうけどな

世界中を見て回ると、いつの間にか百年ほど経っていた

移動は徒歩、一つの町や村に数カ月単位で留まるから時間が経つのは速い

もちろん魔術の修行は欠かさなかった。そして、『原罪』を薄め、肉体を天使に近づける事にも成功した

これで聖なる右の力を十全に使えるようになった訳だ。『知恵の実』をある程度残しているから普通の魔術も使えるし

暇だなー、特にやることも無い

十字教の魔術組織には近々接触するつもりだ。いろいろやる事があるからな

だがしかし、今に限っては暇だホントに

そんな感じで数百年

何十年か魔法世界にも行き、教会をたてたり十字教信者を増やしたり、魔術師を増やしたりして時間をつぶした

トレジャーハンターとしていろんなモノを集めて売ったり、賞金首を捕えて賞金を貰ったりして金を相当稼いだ

金は腐るほどある

まあそれは置いておくとしてだ

今現在、魔法使いと魔術師は仲が悪い

理由としては、元老院は魔術師は思い通りにならないから利用しづらい為に批判的

『マジステル・マジ立派な魔法使い』を目指す魔法使いには何故その力を世界、他人の為に使わないのかと魔術師に対して批判的

もちろんそういう事を考える魔術師も居ない訳じゃない。元が宗教の信者だし、貧しい人を救うという考えもある奴もいる

だが、元々魔術師というのはたった一つの叶えたい想い、願いのために魔術を学び、人生を投げ打って生きている者たちだ

多数の魔術師からすれば『え？ 何で態々自分の目的以外の為にそんなことしなくちゃいけないの』という考え方だから、余計に関係が悪い

多数とは言ってもその数は魔法使いからすれば極少ないから、対抗する事も無いけど

MM連合とは犬猿の仲といっても過言ではないが、魔術師はその辺に關してはどうでもよく考えている

そして、一番の理由は魔法使いは必死にその存在を秘匿しようとするのに対し、魔術師は魔術を公言しているからだ

まあ、多少の秘匿意識はあるものの、必死になってまでやる事ではないと認識している

戦術的価値がある以上、魔術の詳細な技術は隠しているものの、魔術そのものは全く隠す気が無い

魔法使いからしてみれば、記憶を消したりと必死に秘匿しているのに何を公言してるんだバカ、といった感じだろう

帝国とは中々良好な関係を築いている

帝国領内に教会をいくつか作り、魔術師も多数いる。

魔術組織もいくつか出来て、魔術師の旧世界においての影響は魔法使いよりずっとある。本当にいくつかという少ない数だけだな

俺はそのほとんどのトップと知り合いだ。おかげで横のつながりが半端じゃ無い

魔術師は基本的に集団行動を嫌う人間が多い。だから、組織に入っている魔術師は少ない

流れの魔術師の方も結構な数がいる

旧世界でとある魔女に会って仲良くなったりしたが、それはまた別の話だ

ちなみに倉庫は食料を入れても腐らなくなった。微妙過ぎるレベルアップである

そして、今は旧世界に居る

フランスのとある村

「神父様！！ 大変です！ ジャンヌがコンピエーニュの戦いで捕虜となり、宗教裁判で異端者とされたそうです！！」

金髪の青年がドアを開け、息を切らしながら報告する

手には恐らくジャンヌの死刑宣告の書かれた紙であろうものを握りしめ、息を整えながら俺へと近づく

「そうか……」

もうそんな時期か、時が経つのは速いものだな

「そうかって、神父様！ 彼女は神の声を聞く事が出来た聖人ですよ！？ 放っておくつもりですか！？」

「そんな訳が無かるう。だが、正面から行ってもまともに取り合っ

てくれんだろうな」

「なら、どうするつもりですか？」

「どうするもこうするも、生き残れるかどうかは神のみぞ知るとい  
うモノだよ」

「……ならば、我々『オルレアン騎士団』はジャンヌを助ける為に  
動きますよ」

『オルレアン騎士団』

フランス最大の魔術結社であり、ジャンヌ＝ダルクの人柄に惹かれ、  
公式の戦力としてではなく陰ながら彼女の歩みを支える為に集まっ  
た有志によって結成された組織

確かにこの組織が動けばジャンヌを助ける事が出来るだろうな

まあ、日にちが分かり、それまでに戦力を整えられれば、の話だが

「好きにするといい。彼女が本当に聖人なら、処刑されることなど  
無い」

その言葉を言った後、男は教会の扉を乱暴に開けて出て行った

「……さて、俺様も動くのでしょうかね」

フランス、ジャンヌの囚われている牢獄

「出る、時間だ」

屈強な肉体の男は男装している女性を連れ、歩きだす

この女性こそ、後に『ダルクの信託』と呼ばれる神の声を聞いたとされるジャンヌ・ダルクだ

ジャンヌはルーアン市内のヴィエ・マルシェ広場へと連れられ、十字架に磔にされる

「あの、最後に十字架を頂けませんか？」

ジャンヌは近くに居た兵士に頼む

兵士は燃やす為の藁を使って十字架を作り、渡した

「最後では無い、君はまだ生きるべきだ」

「え………？」

兵士はそれだけ言い残し、その場を後にした

兵士は赤髪をセミロングにしていたが、帽子をかぶっていた為顔は見えなかった

そして、教会の神父により火がつけられ、パチパチッと音を立てて燃え始める

火は瞬く間に強くなり、あっという間にジャンヌを包み込んだ

（主よ、今あなたの元へ……）

ジャンヌは十字架を持ち、そう思いながら目を瞑る

だが、死ななかった

（熱く、無い……？）

業火の中に居る。それだけで窒息してもおかしくは無い

だが、事実として窒息する事は無く、炎によって燃える事も無かった

そう、まるで炎が殺す事を嫌がっているかのように

数分後、火は突如として消え去った

比喻では無く、実際に突然消えたのだ

当然、其処に居た軍の兵士も神父も民達も困惑する

「あの女だ！ あの女が悪魔の力を使っただんだ！」

誰かがそう叫ぶ

その叫びに連鎖し、次々と罵倒の言葉がジャンヌへと浴びせかけられる

「静まれ」

決して大きくは無い声

だが、その声は何物より響き渡った

「わが名は天使長ミカエル。神の命において、この娘を殺す事は許さぬ」

背中に翼を持ち、その右手には光り輝く剣が握られている

その姿は神々しく、天使という言葉にも偽りが無いように聞こえた

兵士たちは直ぐにジャンヌを磔から離し、ミカエルの方を向く

「彼女は、本当に神の命を?……」

「我が言葉に偽りがあると? 神からの命令は私が与えた。あの娘を殺す事は私を敵に回す事と同義と思え」

「ハッ!」

兵士は頭を下げ、直ぐに立ち去った

そしてミカエルは翼をはためかせ、上空へと飛び上がり、ある程度



の高度で姿を消した

文字通り、消えたのだ

ジャンヌの処刑の一週間後

バン！ と音を立てて教会の扉が開かれた

開けた扉から青年が歩いてくる

「神父様！ ジャンヌの前に天使が現れたそうですよ！！」

やっぱり直ぐに伝わっているな

「ああ、大天使ミカエルが現れたらしいな」

「やはり彼女は選ばれた存在なんですよ！」

「それで、そのジャンヌはどうしたんだ？」

「ああ、今教会の前に居ますよ」

青年の後ろについて行き、教会の外に出ると、其処にジャンヌがいた

「はじめまして、ジャンヌ・ダルク。俺様はフィアンマだ」

「はじめまして、フィアンマ。『オルレアン騎士団』の青年があなたは信用できると言っていましたので、ぜひ会いたいと思っていました」

ジャンヌはまだ騎士の格好をしていたが、それを気にする事もない

「それは光栄だ。『神の声』を聞いたとされる聖女に其処まで期待されるとは」

「そんな事はありません。私自身は何も力を持っていませんから」

「そんな事はない。神の声を聞いたという事は誇ってもいいのだ」

手振り身振りで大袈裟に言う。本当にすごい事だからな

それをしていて、ジャンヌは少し考えるような顔を見せ、一つの疑問をぶつけてきた

「……やはり、あなたが私を救ってくれたのですか？」

「……何故、そう思った？」

「雰囲気とか、ですかね。後は、私が聞いた天使の声はもっと別のモノでしたし。『あの兵士』の声とも似ていますから」

「フフ、やはり聖女には敵わんな」

俺は静かに笑い、ジャンヌを見る

「やはり、あなたは魔術師ですね。私を救ってくれた事にはお礼を言います。出来る事なら、何かお礼を……」

「礼をというのなら、『オルレアン騎士団』と協力関係になりたい」

「協力関係、ですか？」

「俺様も組織をいくつか従えていてね。戦力としても歓迎するし、フランス政府と繋がりがあるなら尚更だ」

「ですが、私は既にフランスから見離されたようなものです。繋がりなど……」

「違うな、見離されてなどいない」

天使が直に目の前に現れて救った。この時代において、それだけでジャンヌの価値は必然的に上がり、フランス政府も無視できなくなる。

天使が現れるという事は魔術師にとって重要な意味を持つ。これは偽の情報だが、映像機器の無いこの時代にそれを証明する方法など無いに等しい

もちろんフランスに他の魔術結社は存在しているが、最も巨大で力を持つのは『オルレアン騎士団』だ

国が戦争で疲弊した今、自国の最大の魔術結社と戦えばただじゃす

まない

更に下手をすれば天使と繋がりを持つ貴重な聖女を殺していたかもしれない、それは天使を研究する魔術師にとって宣戦布告ともれるのだ。

それはフランス政府と他国にある多数の魔術結社との戦争へと繋がる。百年戦争で疲弊したフランス政府がどこぞの多数の魔術結社と戦えば確実と言っていいほどに国が倒れるだろう。

だが、フランス政府のやった事をジャンヌが許し、魔術結社を宥めるという役をすれば、戦争は避けられる可能性がある

宥める役は形式上はジャンヌがやる必要があるが、裏で俺が手を回せば問題ない

フランス政府にとっても得になるし、ジャンヌは汚名を晴らす事が出来るチャンスだ

俺もフランス政府と繋がりを持つ事が出来、尚且つフランスと協力関係にある他国とも関係を作れる

のちの百年戦争と呼ばれるイギリスとフランスの戦争だが、イギリスのカーテナとフランスのデュランダルの影響もあり、魔術師も多数投入された

もちろん中枢とまではいかないが、イギリスにもそれなりの地位に魔術師を潜り込ませる事が出来た

イギリスの王室には貸しが出来たし、フランスの王室にも貸しが出

来た

俺としては万々歳と言ったところだろう

俺の思惑はともかく、ジャンヌにそれを話したら、結構簡単に乗ってくれた

その代わり、困ったらいつでも手を貸すという事になったが、そんな事でいいのかと思ってしまった

俺と協力関係になるという事は俺が手を貸すのは当然だろうに

まあ、別に俺自身が手を貸す必要性も無いのだがな

### 第三話 吸血鬼（エヴァンジェリン）

『イギリス革命』『ブリテン革命』と言うモノを知っているだろうか  
狭義においては1641年から1649年にかけてイングランド・  
スコットランド・アイルランドで起きた内戦・革命であり、広義に  
おいては1638年の主教戦争から1660年の王政復古までを含  
んだ革命の事だ

実は歴史の中でこの時代に『カーテナ・オリジナル』が紛失したら  
しい

そんなわけで早速イギリスへ向かい、王族だけが持つ『カーテナ・  
オリジナル』を見に行くことにした

一か月

一か月だぞ？ 俺がカーテナを見て、紛失したのが、だ

あらかじめ追跡用の魔術を掛けて置いて良かったよ、ホント

そんなわけで、今手元に『カーテナ・オリジナル』がある。わーい

見た目は西洋風の典型的な両刃の剣で、全長は80cm程度。ただし切っ先は無く、刃もついてはいない

霊装としての能力は、『これを持つ英国王室の者は、その国内に限り天使長『神の如き者』<sup>ミカエル</sup>と同質の力を持つ』というもの。

簡単に言えば凄い破格の霊装

実際にはその作成状況から、イングランド・スコットランド・ウェールズ・北部アイルランドの四国で構成される、『全英大陸』でしか使用不能というありえない制限がついてたりするのだが、力を与える筈のカーテナに逆に『神の如き者』<sup>ミカエル</sup>の力を送り込んでやることによって、強大な力を発揮できる

俺の対応する天使が『神の如き者』<sup>ミカエル</sup>でよかったと本当に思う

ちなみに力の移し方が結構難しく、質という点では何とかなったものの、量という点では入れ過ぎると直ぐにでも爆砕してしまうので気をつけなければならない

とっても繊細な作業だ。慣れたけどな

そして『全次元切断術式』を行使した。とても凄かったです。まる

本来地球という惑星から英国領土を切り離し、その内部を制御管理するというカーテナの特性の応用なのだが、術式を無理やり書き換え、地球上のどこでも切断できるようにした

やり過ぎた、と思ったのは初めてではないが、こればかりは本当にやり過ぎた感があったな

なにせ、イギリスを出ても使える上、攻撃を防ぐ壁としても攻撃としての飛び道具になる。素晴らしい位に戦闘に使える。必要性は感じないがな

取りあえず、人に向けて使っちゃいけません。という事を改めて思った。

俺はとある町の教会に居た

「神父様、隣町の広場で魔女狩りをやっているそうですよ。見に行きませんか？」

「魔女狩り？」

そついや最近魔女裁判を行ってると噂が流れてたな

「なんでも、吸血鬼らしいです。まだ小さい子供のように見えますが、実際には数百年生きてるとか」

吸血鬼、ね。興味もあるし、見に行ってみるか



## 町の広場

その中央には十歳くらいの子供が磔にされていた

「この魔女は！ 我等に災厄を振り撒く忌むべき存在だ！」

おそらく教会の神父であろう男が声を張りあげる。

「だが私は皆にこの魔女がどうなるべきか、聞こう！ 火炙りか！  
解放か！」

神父は声を張り上げ、民衆に聞く

「『火炙りだ！ 魔女を殺せ！』」

珍しいことではない、この時代ではよくあることだ。誰でも、何度も見たことがある光景だ

少女は疲弊しており、反応は薄い

（チツ、ドジった……まさか捕まるとはな）

神父は磔にした少女の周りにある槓に火を付ける

それはあつという間に燃え上がり、少女は火に包まれた

従者でもあつた人形は既に破壊され、無残に捨てられている。

最も、修復すればまた動けるようになるのだが。

（……熱い。焼けた後に再生するしかないな）

少女は火を付けた神父を睨み、民衆を見渡した

火が邪魔で所々見えないが、一つだけはっきりと見え、はっきりと分かった事がある

少女の眼に映り、理解できたのは

赤い髪をセミロングにした、鍛えているように見えない体つきの男

そしてその男の人間とは思えない異様な雰囲気だけだった

少女は何故かはわからないが、それだけがはっきりと認識できた。

男は顎に手を当てており、何か面白いものでも見ているような目だった

（聖職者か、なら吸血鬼と呼ばれる私が焼かれているのはさぞ面白い事だろうな）

少女はそこで目を瞑り、ゆっくりと意識を失った

少女が目を開けた時、其処は川の畔だった

「……私は処刑台で燃やされた筈……？」

「起きたか」

ガサツと草むらをかき分け、一人の男が現れた

「貴様っ!？」

その男は、少女が燃やされている時に見た異様な雰囲気のものだった

「敵意むき出しだな。安心しろ、俺様は敵じゃ無い。お前が燃えた後、誰にも気づかれずに灰を集めたのも俺様だぞ」

「……貴様、魔法使いか？」

「まずは名を名乗れ。それと俺様は魔術師だ」

「……エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだ。魔術師だと？  
それにしたって何故私を連れてきた？」

連れてきた、という表現も少しおかしい気がするが、其処は気にする事では無い

服についている草や葉を払いながらフィアンマが答える

「俺様はフィアンマだ。何、吸血鬼というモノと話してみたかったのさ。珍しいからな」

「珍しい、か。何が目的だ？」

エヴァは敵意むき出しのまま、フィアンマに聞いた

「フィアンマは敵意を気にすることなく、話す

「吸血鬼というモノは珍しい。俺様も興味があるのでな。ぜひ研究してみたい」

「ハッ、不老不死の秘密でも探りたいのか？」

「いいや、今更研究した所で意味が無いからな。そんな事に興味は無い」

「不老不死という、人類が常に夢見て止まない夢を、そんな事と切り捨てる

何様のつもりだと、エヴァは睨みつけた

「そんな事は関係ないとばかりにフィアンマは話を続ける

「まあ、研究といっても、少しばかり実験台になってくれればいい。危険の無いように配慮はしよう」

「嫌だと言ったら？」

「叩き潰してでも手に入れる、とまではいかんな。そこまで欲しいものでも無い。吸血鬼は俺様にとってその程度の価値だ」

魔術師の魔力は魔法使いの使う魔力とは全く違う

魔法使いが自身の『魔力』呼ぶ力は自然界に存在する万物の根源のエネルギーそのものを使っているのに対し、魔術師は自身の生命力<sup>マナ</sup>を魔力へと変換、更に魔術の種類によっても魔力の質が違う

どちらかといえば、この世界では気に近いかもしれない

原油からガソリン、重油、軽油など、別のモノに変えるように、流派や宗派によって精製方法が違う

それでも、魔力の量というモノは必要とされる

吸血鬼とは魔術師側では『カインの末裔』とも呼ばれている存在だ  
魔術師の魔力は生命力を変換して作るため、必然的に不老不死の吸血鬼は無限の魔力を持つことになる。

おまけに『<sup>アルス・マゲナ</sup>黄金練成』のように時間的制約から人間には発動できない魔術も使えるため、魔術師になるともう手がつけれない

その余りの凶悪さゆえ魔術師たちさえもその存在を認めたがらないという存在

もちろん魔法使いが使うような魔力も膨大な量があるが、魔力という点では魔術師になったほうが得だと言えるだろう

「ほう？　吸血鬼の価値がその程度だと？」

「より正確に言うなら、魔法使いの吸血鬼ほど力の無駄遣いをして  
いる奴は価値が低い」

不老不死である吸血鬼は無限の生命力を持ち、無限の魔力を生み出  
せるとして研究の価値がある

そうは言っても、フィアンマ自身老いで死ぬことも無く、必要な  
『天使の力』<sup>テレスマ</sup>でも使えばいいのでどうしてもというほど欲しい訳で  
はない

だが、エヴァにとってその言葉は吸血鬼を侮辱する言葉だ。自信を  
侮辱されるという事を許さないプライドの彼女は敵意を殺意に変え、  
フィアンマを殺そうと距離を取り、魔法を使う

危険度など関係無い。自身は今まで何十、何百と敵対した魔法使い  
を倒し、殺して来た

唯異様な雰囲気を持つだけの男に負ける筈は無い。そう確信する

「リク・ラクラ・ラック・ライラック 契約に従い 我に従え 氷  
の女王 来れ とこしえの闇 えいえんのひょうが！」

「ほう、ヤル気かな」

フィアンマはその詠唱を聞きながらも行動を起こさない

更にその顔には笑みを浮かべている

「二百年間練磨した魔法を受けてみる！！ 全ての 命あるものに等しき死を！」

フィアンマの周りが氷つき、巨大な氷の塊に閉じ込められていく

「其は 安らぎ也 『おわる……』」

瞬間、ドーム状に閃光が炸裂した

エヴァにはフィアンマの右肩の辺りから出た爆発的な閃光を捕えるので精一杯であつただろう

轟音と共にフィアンマの周りの氷は崩れ、周りの木々はなぎ倒される

エヴァはギリギリで障壁を全力展開したが、障子の如く簡単に破られ、木々をなぎ倒しながら数百メートルもの距離を吹き飛ばされた

衝撃による暴風が吹き荒れ、木々を揺らす

暴風はフィアンマを中心として数十メートル程度の範囲で起こっていた。だが、フィアンマはそれを気にすることなく歩き続ける

「吸血鬼といえど、『魔法使い』ならこんなものか」

その声は暴風の中でもはっきりと聞く事が出来た

ザッザッと地面を踏みならしながらエヴァの方へ歩いて行く

その気になれば水平に数百メートル処か数十キロを一瞬で移動する事も可能なのだが、あえてそれをしなかった

「クッ……何が……？」

エヴァは体が所々吹き飛んでおり、血を流し、体の部位が足りない状態でもフィアンマに殺意を向ける事をやめなかった

それは吸血鬼としてのプライドか、戦意を喪失する事は無かった

「やめておけ、どうせお前じゃ俺様に勝つことなど出来はせん。工夫次第でどうにかなるレベルをとくに超えてる」

見下したようにエヴァに淡々と告げるフィアンマ

「どの道、魔法じゃ俺様は倒せんよ。それ以前に格が違う」

魔術師と魔法使いとしての差か

天使に近い者と真祖の吸血鬼としての差か

生きてきた年月の差か

何にせよ、エヴァがフィアンマに勝つことなど不可能だと、証明してきた

「き、貴様……」

こうしている間にも、エヴァの体は再生し続けている



再生が終わればまた攻撃するだろうが、フィアンマはあえて追撃しなかった

「ふむ、思ったよりつまらなかったな」

フィアンマは唯の興味本位で挑発してみたが、予想より簡単に挑発に乗り、相手と自分の力量差も分らないバカだと認識する

どの道、この程度では放っておいた所で邪魔にもならない

「折角だ、少しばかり血を貰って行こうか」

倉庫から試験管を取り出し、エヴァンジェリンの傷口にあて、血を入れる

ある程度の量がたまった所で封をし、倉庫に入れる

「今回は見逃そう。次に襲ってくれば容赦などせんがな」

それだけ言ってフィアンマは立ち去る

残されたのは、エヴァンジェリンとドーム状になぎ倒された木々だけだった

森の中の一軒家。其処には一人の魔女が住んでいた

その家に俺は踏み入り、紅茶を飲みながら会話を楽しんでいる

「……それで、その小さな吸血鬼をボロボロにしてきたのかい？」

「まあな。俺様に喧嘩を売ったあいつが悪い」

売り言葉に買い言葉と言うけど、この場合売り言葉は俺の方だったかな

簡単に買ったあいつもどうかと思うが

「ハア、まだ小さい子供だろう。何が気にいらなかったんだい？  
フィアンマ」

「餓鬼だからと手を抜くつもりは無い。それに相手は吸血鬼だぞ？  
二百年以上生きてる。お前よりずっと年上のババアだぜ？ ラフ  
レンツェ」

手元の紅茶を飲みながら、俺はそう答える

ラフレンツェと呼んだ女は頭を抱えて溜息をついた

「それを言ったらアンタだって六百年以上生きてるジジイだろ。ど  
っちもどっちだと思っけどね」

「相手と自分の力量差も分からん馬鹿だ。それに『魔法使い』だったしな」

「ああ、なるほど。なら殺す意味がない訳だ」

魔術師なら始末する必要性が出てくるが、魔法使いは別にどうでもいい

理由はラフレンツェにある訳だが、その訳はいつか話そう

「お前の価値は『魔法使い』には分からんだろうからな」

「ふん。五百年近くもこうして一人で過ごして来たんだ。母も、祖母も、曾祖母もね。魔法使いじゃ無理だって事はとつくの昔に気付いてる」

「血のつながりは無いだろうが。受け継がれるのは呪いのみ。厄介な魔女に拾われたな、お前」

まあ、俺はその受け継がれる呪いを掛けた魔女と知り合いなんだがな

「もうとつくの昔にあきらめたさ。今じゃ私も立派な魔女だ。私は私の役割を果たすだけ。いつかお前がこの呪いを不要にしてくれる日が来る事を祈るよ」

「暇があったらな。一応頑張っではいる」

ラフレンツェはキセルをふかしながら笑う

「ハハハ！ あんた程の魔術師でもこの呪いは必要な物だろうから

ね。コレが無くなった時の被害に比べればまだ呪いを受け継がせる方がいってもんさ」

「確かにそうなんだが、代々続く血の繋がらない魔術師の家系。呪いと共に魔術の技術を引き継ぎ、次世代へと渡す。それだけの人生、つまらなくは無いか？」

「つまらないね。はつきり言えば。でも、私達にはアンタがいるだろ。アンタは月日がいくらたとうと変わりなく居る。少なくとも寂しくは無いよ」

キセルを吹かし、立ち上がる

腰まである銀色の髪を揺らしながら、無くなった紅茶を入れようとガチャガチャとキッチンをあさくる

「寂しくは無い、か」

紅茶のポットを俺に渡し、ラフレンツェは椅子に座る

「名前、呪い、魔術。それだけの物を次世代へと渡し、利用されない様に守る。外に出れないのはつまらないと思うがな」

紅茶を淹れながら会話を続ける

「外に出れない訳じゃない。出ないのさ、面倒な輩に見つかる訳にはいかないからね。それでも偶には出てるわよ、この森の中を歩き回ったりしてるわ」

「まあ『魔術師』にその価値を気付かれれば不味いだろうな。それ

でも後継者を見つける為に森を出歩く、か。ご苦労な事で」

魔女の伝説ってこいつの所為で生まれたものとかあるんじゃないか？

魔術師も危険度を正しく把握してるなら、手を出そうとは思わないだろうがな

「そう思うならこの呪いを不要にして欲しいものね。コレがあるから馬鹿な奴らが寄ってくる」

「その為に態々陣を形成しておいただろうが。余程の攻撃でも無ければ通らないぞ？」

「ソレだつて感謝はしてるわよ。まあ並みの相手なら私だつて何とか出来るけど、厄介なのはあんたみたいなレベルの魔術師だ」

「俺様位の魔術師などそうは居ないと思うがな」

俺は肩を竦めながら返答する

俺レベルの魔術師が世にそう何人もいるわけが無いだろうに

居るとしたら相当な天才だろうな。……アレイスターとかなら、まあレベル的には同じ位かな

「もしかしてつて事があるかも知れないでしょう。……ま、その時は素直にアンタに助けを求める事にするよ」

「そつだな、お前の頼みなら素直に聞こう」

それも『あの女』との約束だしな。敵は排除するのみだ

「感謝するよ。魔術師といってもアンタに勝てる奴なんていないだろうからね」

「さあ、どうだろうな。まあ安心しろよ。約束は守る」

「信用してるよ」

いつか、この呪いが不必要になる時が来るといいんだがな

### 第三話 吸血鬼（エヴァンジェリン）（後書き）

フラグばかり、というか伏線ばかりの話。

コレの謎が解ける位まではちゃんと続けたい。

学校の方が忙しくて執筆時間が取れないですが。

後思ったんですが、「聖なる右を持つ者」の方にリメイク書き始めました。って出した方がいいんですね。

#### 第四話 黄金夜明（アレイスター）（前書き）

早く大戦期入りたい。多分しばらく無理でしょうけどね。



#### 第四話 黄金夜明（アレイスター）

時は飛び、日本

「がっはっはっはっは！！ ほれ、飲め飲め！！」

「やめ、バカ野郎！ そんなに飲んだらお前直ぐ潰れるだろうが！  
！ 弱いくせに飲みすぎだつての！！」

とある居酒屋で俺は友人と飲んでいた

「そう言つなよフィアンマあゝ家じゃ飲ませてくれねえんだよお」

「そりやお前のかみさんが正しい。お前を飲ませると手に負えない」

俺はとある事を頼む為に伊能忠敬に接触した。……のが一週間前

同じ魔術師という縁だけで忠敬は『よし、飲みに行こうぜ！』と俺を引っ張って居酒屋へ。かみさんに話を聞くと元からこういう性格らしい

豪快だな。豪快過ぎだろ

「お前とか言うなつての。ダッチちゃんと呼べ」

それで呼ばうと思うと別のダッチちゃん思い出すつての

こいつは焼肉と風呂と酒が大好きだ。それでも仕事は丁寧なのがすごい  
げえ

居酒屋で話す事でも無いので、忠敬の家にやって来た

一軒家の大きな家で、家の中には測量用の器具やら何やらがおかれていた

「仕事はちゃんとやってんだろっな」

「あたぼーよ。お前の依頼はしっかりやってるぜ」

それなら良いんだが、コイツホント忘れやすいからな

「しっかしよ。俺は地図を書いた。お前はそれが精巧で、魔術にも使えるっていったからよ。やってみた訳だ」

「やったのか。それで？」

「成功した」

……コイツ、ホント何でもこっという性格なんだろうな。魔術師としての才能と、偶像を創る事に関しては凄いが。

だいにほんえんかいよちぜんす  
大日本沿海與地全図

伊能忠敬の魔術技術と、異常なまでの地図の精巧さが、偶像の理論の逆利用によって日本各所に『渦』を付け加えるという魔術を使えるようにした

発動には特別な準備が必要で、それを満たすことによって午前0時から5分間だけ移動魔術『縮図巡礼』使用が可能となる

偶像を作らせたら右に出る者はいないという事で、俺は偶像を作って貰えるように頼んでいる訳だ

ちなみにコイツ繋がりで天草式十字樓教とも知り合っていたりする。

「ま、お前が出来のいいものが出来るまで待たせて貰うよ」

「おう、いいものを作ってやるさ」

仕事に関しては信用できる。性格がコレだから隠し事も出来ないけどな

「コラ！ アンタまた飲みに行ったね！？」

「ゲッ、ヤベえ。逃げるぞフィアンマ！」

そして、逃げるときに何故か俺まで逃げる羽目になるという。何故こうなった？

忠敬は頑張ってくれて、二年かけて四体作っている。

だが、作った一ヶ月後に訃報が俺の元に來た。病死らしい

俺があつた時はまだ元気だつたんだがな。友達が死ぬのはやはりつらいものがある

そんな気持ちを抑え、実験をすることにした

無人島を探し、そこで天使を降ろす魔術を行使したら本当に天使降臨。ちなみに『<sup>ガブリエル</sup>神の力』

もちろん、降ろした瞬間ガチバトル

一度戦つてみたかつたんだよ、一方通行とヒューズ・カザキリを相手に五十%の力でも勝てると原作フィアンマが豪語した化け物だからな。

ちなみに勝つたよ。大勝利

無人島は軽く地形が変わっていたが、平地が増えていて丁度いいので、ここに魔術の研究所でも建ててる事にした

島の大きさは四方十キロ程度の大きさだ

まずは魔術で防御陣を島全体に描く

川などで水路を描き、流れを変えつつ地道に結界を強化しつつ、魔術生命体を研究

魔術生命体ってのは、その名の通り魔術によって作られた生命体だ  
そのパターンは有機物に手が加えられた既存生物の亜種であつたり、  
無機物だけを素材とした新種生物であつたり千差万別で、姿も十  
人十色。

その中で唯一全ての個体に共通することは『独自の思考能力を持つ』  
ということ

一体あたりの製造コストが高い、寿命も不安定、外界に対する適応  
力が低いなど問題が多く、これについて真面目に研究、製造を行  
っている魔術師は絶滅危惧種であるとさえ囁かれる。

俺が作ったのは限りなく人間に近い生物だ

目的の生命体を生み出すに足る環境を整えた上で、生命の源を生む  
であろうと推測される、いくつかの未分類現象を人為的に発祥させ  
ることで、望むデザインの生命体を作り出す

俺は既存の生物に似せる事で寿命の増長を目指し、更には肉体の強

化や、多量の『天使の力』<sup>テレズマ</sup>を扱う為に肉体を作るときに『天使の力』<sup>テレズマ</sup>を流し込んでみたりと、いろいろ実験していた

魔術生命体自体も清潔な儀式場や神殿、塔など限られた場所にしか現存しないとされているが、そんな常識はゴミ箱にでも捨ててしまえ！

とまあ、そんなスタンスで作った結果がコレ

「お父様、次はどうなるの？」

俺の横でニコニコしながら魔術の授業を受けているこの少女

見た目は黒髪、紅眼、肌は白く、身長は百二十センチ位で、歳は二歳（作ってから二年だから）。追記するなら顔は可愛い（俺はロリコンでは無い）

名前も最初は順番的に番号で09とでも付けておけばいいかな、と思ってたんだが、まさかの成功だったので『ルーシー』と呼ぶことにした

五年程でまさか成功するとは俺も思わなかったよ

魔術の授業を行い、魔術に精通した俺の助手として過として貰うことにした

寿命はどこぞの人形遣いの如く、記憶も引き継げるように魔術を創ったので、死ぬたびに新しい肉体になり、記憶は残る。輪廻転生的な奴

ちなみに知識だけね。禁書本編で言うならば、

言葉や知識を司る      意味記憶

運動の慣れを司る      手続記憶

思い出を司る      エピソード記憶

そのうちエピソード記憶のみ消去している為、俺が親と言う事以外は思い出なんて無い

まあ、ちょっと悲しいかなとは思うが、早い話、記憶の量に脳が耐えられなくなるので、俺が百年に一度位の頻度でいらぬ記憶の消去をしようと思ってる

俺の脳は神に弄られてるから必要は無いけどな

そんな感じで早数十年

知識があるからって何でも出来るとは思わない

知識だけでなく、経験も必要だ。そう思って、使える魔術は一度使ってみようと思った

ルーン、カバラ、錬金術、神道、陰陽術 e t c

多種多様な魔術を一つ一つ試すのは中々きつかったけどな

ちなみにルーシーの得意な系統は肉体を創るときに『天使の力』テレズマを

流し込んだ属性で決まる。まあ当然と言えば当然なのだが

そんなこんなでいろいろやっていた俺だが、時たまいろんなところに出かけては情報を仕入れ、魔術組織を動かしている

その中で現状最も興味のある組織は『黄金夜明』という組織

知つての通り（？）『黄金夜明』とは、後に世界最高の魔術師にして最低の魔術師と呼ばれるアレイスター・クロウリーの属している組織だ

この世界でも科学に走るかは分らんが、自力で神の領域に入り込んだ魔術師で、『魔神』に近い、というか『魔神』と同レベルの力を持っている筈だ

相手に回せば厄介な事この上ない。俺もこいつを相手にすれば絶対に勝てるという自信が無い

禁書原作でアレイスターにやられてるからな。原作フィアンマ。多分全力でも勝てなかっただろう

俺は分かんが。少なくとも『聖なる右』以外の力もある訳だし

取りあえず『黄金夜明』に入る事にし、探した

元はウィリアム・ウィン・ウェストコット、マグレガー・メイザー



ス、ウィリアム・ロバート・ウッドマンの三人によって作られた小さな組織だったが、いろんな魔術を研究し、結果が出て、いろいろやっていたら有名になった。とのことらしい

アレイスターは既に組織に所属していた

『黄金夜明』では「この術式はこうしたほうがいいと思う」とか、「これはこの方法だろう」とか、魔術の研究ばかりだった

だが、やはり思ったのは……

「天才だなあ。アレイスターは」

「お父様も十分すごいと思うよ?」

ルーシーがそうフォローしてくれる。かわいいなあ、ホント。撫でてやろう

「……お前、そう言う趣味してるのか?」

「アレイスター、そっとしておいてやれ。ああいう趣味があっても言わないのが社会人だろう」

何だか激しく勘違いされてる気がする

「愛娘をめでて何が悪い!」

「言い切るなよ。確かにかわいいけど」

「手を出したら殺すぞ?」

「出すか！　まだガキだろーがよ！」

こんなに可愛いのに手を出さないだど！？　お前は男として終わってる！

そう言うのと、親バカだなあ。　と言うような生温かい視線に包まれたので少し自重

どうせこの組織に入ったのもアレイスターと接触するためだしな

魔術知識は全部入ってる訳だし、原典も含めてな。　どの道俺は何もやる事は無い

「お前も随分な天才だと思っがな」

そう言うてきたのは仲良くなったフィオラ・ディオスタークと言う男

こいつは『死霊術』を研究している『死霊使い』ネクロマンサーだ

『死霊秘法』ネクロノミコンの写本を持っているというスゴ腕の『魔導師』でもある

「いやあ、アレイスターには敵わんよ」

「そう謙遜すんなっての。　お前のおかげで俺の魔術も進歩したんだしよ」

「それはちよつとした理論構築を手伝っただけだろう」

霊体进行操作する事と死体を使う事に関しては一級品の實力

死体を使つての反魂の術とか出来るらしいし。ほぼ失敗らしいが。

俺も参考にさせて貰つたよ。やはり見るのもいい勉強だ。知識だけじゃ駄目だね、やっぱり

「それでもよ、俺の夢の為に手伝ってくれるってのはありがたいんだよ」

お礼を言われて悪い気はしない。本当にそう思つたよ。嘘だけど

神から貰つた知識だしね。俺の力じゃ無いからどうにも言えないよ

日本にある無人島

研究所の他に別荘を建て、ルーシーと二人でのんびり暮らしていた

やる事無くてね。本当に

『黄金夜明』は既に解散している

理由は『天才であるが故の協調性の無さ』といったところだろうな。我が強過ぎる連中だったし

その為、俺は無人島ですつと研究している

俺はもう0と1で表せる領域の存在では無い

アレクスターやアンナ・シュプレングルのような『シークレットチーフ秘密の首領の窓口』では無いにせよ、存在そのものが曖昧になってきている

『窓口』になる事が絶対的に必要な訳ではないようだからな

『セフィロト生命の樹』では、上位部分は『人間には理解できない』として説明が意図的に省かれている

神の領域に片足突っ込んだ俺だからこそ、『法の書』が解読できた

『法の書』は既存の言語学では解明できないと原作でインデックスが言っていた理由がハッキリと分かった

アレは人間には解読できない。エイワスやガブリエルの言葉が『ブ  
レた』ように、『法の書』は人間より上位の存在しか分からないのだ

十万三千冊を手に入れ、『魔神』と同等のレベルに達し、神の領域に片足突っ込んだ

……俺、今人間と言えるのだろうか。いや、気にしない様にしよう。  
うん

この無人島は隠蔽されて気付ける奴なんていないから放っておいても問題は無い

今、世間ではきな臭い動きをしている奴等が居る

俺の記憶が正しければ、そろそろ第一次世界大戦がはじまる頃だろう

完全記憶能力があっても、間違つて覚えていれば意味が無いからな

ふと、周りを見渡す

周りは森に囲まれた山地で、近くには湖がある

まるで漫画にでも出てきそうな場所だが、あるのだからしょうがない

あるときは釣りをしつつ、あるときは森を散歩

なんと言つか、隠居生活を送っている気分だ。いや、年齢的には間違つて無いんだろうけども

そんな折、ルーシーが一枚のメモを持ってきた

「お父様、教皇から至急お父様に伝える事があるって。さっき霊装を通じて連絡があつたわ」

俺はそのメモを読む

内容は大まかに言えば『世界大戦の開戦。これからについて話し合う必要がる為、至急バチカンまで来て欲しい』との事だ

#### 第四話 黄金夜明（アレイスター）（後書き）

今回はまたおかしな物を手に入れた話。

偶像入手とか、アレイスターとの接触とかです。地味に天草式とも繋がってたり。

第一次世界大戦どうしよう。入れたはいいけどネタが無い（えなんか良いのありませんかね……

感想を頂けるととてもうれしいです。

## 第五話 世界大戦（せんそう）（前書き）

今回、すごく難産でした。後短いです。

## 第五話 世界大戦（せんそう）

バチカン、聖ピエトロ大聖堂。

聖ピエトロ大聖堂とは、世界中に存在する十字教魔術組織の総本山である。

莫大な魔術的な仕掛けや、領土を保護するための防護陣などが施されている十字教勢力最大最高の要塞として働いている。

更に、バチカンという国そのものが一つの霊装と化している。建造物などが発する魔術効果によって一種の巨大な結界ができていたのだ。

複数の魔術効果が複雑に絡み合っているうえ、常時変化し続けるので、『組織』自信も把握し切れておらず、例え禁書目録インデックスの知識をもつてしても解析はできず、仮にできても次の瞬間には変化してしまうため、誰にもハッキングできない強固な結界となっている。

それでも、フィアンマの『聖なる右』をまともに喰らえば一撃で崩壊するのだが。

そんな聖ピエトロ大聖堂の一部屋に集まっている人々が居た。

< 黒の教団 >

そう呼ばれるのは、数ある十字教魔術組織を一纏めにし、尚且つ統率している組織。



とはいえ、全ての組織が完全に纏まった訳ではない。いくつかの組織は国と言う単位で閉じている為、それぞれの国内にしかない有様だ。

別の国同士での交流などもほとんど無い為、＜黒の教団＞内でもいくつかの組織の派閥で分かれ、それぞれの『個性』が出来上がっている。

出来たのはほんの数十年前だが、その権威は既に大国のそれと変わらない。

科学兵器を使う国がほとんどだが、アステカやイスラム等別の宗教の魔術組織もある上、それらと対抗して十字教の魔術師が戦場へ投入される事も珍しくは無い。

重要な戦力となりえる魔術師を多数抱える黒の教団は各国から戦力として頼られる事も多々ある。

加えて、アステカやイスラムの魔術師は＜黒の教団＞の様にいくつかの組織が纏まっている訳ではないし、魔術師の数は少ない。

その辺りの理由もあり、魔術組織、結社は＜黒の教団＞に登録する事が自身の利益につながると思っている。

各国の重要なポストに居る人物は大抵魔術師、魔法使いを知っているが、魔法使いを頼っても旧世界じゃ勝てる確率は限りなく低い。

何故なら、魔法使いは旧世界では秘匿の問題がある為、魔法を使う事を良しとしない為だ。

ともかく、大きな力を持つロシア、イギリスやドイツなどの国もバチカンの影響力はある。

その為、敵に回そうとはしない。敵に回せば戦力が傾く事は間違いないからだ。

その組織でも、最も重要な人物が、今バチカンに集まっていた。

「……『彼』は既に？」

廊下を歩く老人は貫禄があり、白髪があるがその威圧感は何者でも無いと悟らせる。

彼は教皇であり、その威厳も当然のモノと言えよう。

「先日通達しておきましたので、既に来ているかと」

教皇の後ろに控えた秘書の声が凜と響く。

その時、ギーー、と音を立て扉が開いた。

中に入った教皇と秘書が見たのは赤い修道服を着て鍛えているようには見えない体つきの赤髪の男『右方のフィアンマ』。

そして、その男につき従うように後ろに付いている黒髪の少女。ルシー。

「……ちゃんといるようだな」

「悪いな。何分急だったもんで、準備を整えるのに時間がかかった」  
教皇の言葉にフィアンマが気軽に答える。

「教皇に対して少しは敬意を示して欲しいものですが」

「そう言っなよ。俺様はあくまでも『相談役』だ。隠された暗部が態々敬意を払う必要もないだろう」

そもそもこの組織の基盤はフィアンマが作ったのだ。表に立つ事を面倒がった為に現教皇が纏めているが、ほぼ全ての組織のトップに通じている為。実質的にはフィアンマの組織とも言える。

教皇は席に座る。

教皇の秘書は全員に資料を渡し、会議を始める。

「……さて、今回の会議の内容だが。ワールドウォー世界大戦争が開戦した」

世界大戦争とは、後の歴史で第一次世界大戦と呼ばれる戦争である。

フィアンマは手元にある資料を覗き込み、内容を聞く。

秘書は概要と大体の理由を述べ、通達し終わる。

各国はドイツ・オーストリア・オスマン帝国・ブルガリアからなる中央同盟国と三国協商を形成していたイギリス・フランス・ロシアを中心とする連合国の2つの陣営に分かれ、日本、イタリア、アメリカ合衆国も後に連合国側に立ち参戦した。

「……と、そう言う訳です。やはり魔術師の『戦力提供』を求められている部分ほとんどです」

「イギリスの『王室派』は何と言っているの？」

ルーシーはそう聞く。歴史があり、繋がり強いイギリスの言う事はある程度は聞かなければならない為、気にする部分も多い

「『王室派』は魔術師を投入する事を強要しています。同盟国であり、影響の強いイギリス。更にはロシアも同じように要求していますので、恐らくは戦力提供をすることになるかと」

現状ではイギリス、ロシアは同じ陣営である為に魔術師を投入すれば同じ勢力同士で戦うこともない為、既に何人かは偵察として送られている。

「なるほど、他の組織から魔術師は出ているのか？」

「既に確認された魔術結社は、『黄金夜明』から分裂した一人が作った魔術結社、『宵闇の出口』が少なくとも関与している事が確認されています。恐らくドイツ側かと」

宵闇の出口についてはまだ出来たばかりで情報が少なく、戦力がどれほどのものか分からない。

「聖人は戦争に参加させられているのか？」

「現在ではまだ確認されていません」

聖人は魔術師たちにとって核兵器にも等しい。その戦力は国としても欲しがるほどだ。

だが、その存在は新世界、旧世界でおおよそ三十人も居ない。時代によつては更に少ないという事もある。

人数が少ない故に見つける事も難しい。だが、手に入れられれば相  
当な戦力となる。

「全部ぶつ潰せば速いんだがな」

「どの道お前達二人は暗部中の暗部だ。表舞台に出る事は出来無い  
だろう」

当然だが、表舞台に出れば暗部の意味が無くなる。

戦力過多だと見る他の国が戦争を仕掛けてくる可能性だってある。

実際、＜黒の教団＞がある事で危険視している国もあるのだ。

「他に何か情報は？」

「未だ不確定ですが、悪魔が居るとの噂を聞きます」

「悪魔、か。『殲滅白書』は？」

「既に準備を進めています」

対悪魔専門部隊、『殲滅白書』。

幽霊狩りに特化し、心霊的な事件の解析や解決を専門とする特殊部隊の名だ。

その他対魔術師機関、対魔法使い機関等あるのだが割愛。

「……それで、私達はどうすればよいのだ？」

「そうだな、自発的に戦争には参加する必要は無い」

「ですが、それではイギリスやロシアからの援助を受けられなくなる可能性が……」

「話は最後まで聞け。態々悪魔を用意してるんだ。それに便乗しまえ」

「と、いうと？」

「簡単な話、悪魔を召喚する様な国は滅する。とでも言えば参戦の理由にはなるし、それなら弁がたつだろ」

悪魔を使う様な国は世界の敵。

そう言ってしまうば、単純な話、宗教のある大抵の国がその国を攻撃対象にする。

余程の大国。それこそソ連やアメリカでも、数の暴力には勝てない。核兵器もまだこの時代には存在しないのだ。

「なるほど。われわれ自身は手を出さず、情報でかく乱させるのか」

「まあそんな所か。それで、それ以外に何かあるのか？」

「いえ、特には」

「そうか、なら俺様はちょっと出ていくぞ」

「何処へ行かれるので？」

「知り合いの所さ。行くぞ、ルーシー」

「はい、お父様」

そう言つてルーシーを連れ、フィアンマは何処かへと行つた。

「……神の右席、か。頼りになるが、性格が難だな」

その教皇の呟きは、フィアンマに聞こえる事は無かつた。

「なるほど、それで私の所へ、ね」

「まあな。心配はして無いが、情報があつたほうがいいだろう」

椅子に座つて話しているのはフィアンマとラフレンツェ。

ルーシーはキッチンで紅茶を淹れている。

「そうね、悪魔の情報はあったほうが心強いわ。誰かさんみたいに右手振るだけで勝てる訳でも無いから」

「その誰かさんが態々結界張ってる事も忘れるなよ」

「分かってるわよ。感謝してるんだって」

コトン、と机に置かれた紅茶を一口飲む。

香りを楽しみ、味を楽しみ、喉を潤す。

「それにしても、『黄金夜明』が解散したってだけでも結構なニュースになってるみたいね。魔術の基盤ともいえる部分を作った、アレイスターの所属していた組織。結構有名だし。彼、今どこで何してるのかしら」

「さあな、あいつ等は協調性は絶無だった。いつ解散してもおかしく無かったよ。どいつもこいつも一癖も二癖もある、何処で何をしてるかなど分からん」

「……え？ アンタ『黄金夜明』に所属してたりする？」

「していた、というのが正しいだろうな」

「……マジ？」

「マジだ。其処まで珍しいか？」



そりゃあね、と言いながら紅茶を飲む。

「しかし驚いたわ。まさか『黄金夜明』に所属してたなんてね」

「其処まで驚く事でも無いがな。天才集団の集まりではあったが、協調性の無さも一級品だった」

一度崩れ始めたらあつという間に崩れる。

それほどに脆弱な繋がりだ。

「まあ戦闘に関しても学問に関しても相当なモノを持ってたしな。特にアレイスター」

「……アンタが其処まで人を評価するなんて珍しいね」

「そうか？ ……そうだな、俺も、あいつには負けるかも知れんと思っただよ」

「そりゃトンデモ無い化け物だね。アンタが勝てなきゃ神様でも引っ張ってこなきゃ無理だろう」

ケタケタと笑うラフレンツェ。

公式チートどころか数の概念さえ意味の無い相手だから、ナギとかのバグキャラでも勝てんだろうなあ、と思う。

「お父様、教皇から連絡が」

「ん？ 俺様にか？」

連絡用の霊装から情報が来たらしい。

ちなみに、場所を特定できない様に多少ジャミングしてある特殊な霊装を使っている。

「それで、なんだって？」

「『アレイスター・クロウリーの研究を発見。科学の物と判明、即刻アレイスターを捕縛、殺害せよ』と」

ラフレンツェは啞然としている。

「ソレは俺様への命令か？」

「いいえ、他の魔術師にも連絡してあるみたい。どうするの？」

「そうだな……」

「ちょ、ちょっと！ アンタ勝てんのかい！？ アンタさえ負けるかもしれないと言った相手だろ！？」

「それでも、俺様は戦うさ。どっちが最強か、白黒付けてやる」

椅子から立ち上がって、外に出る。

「科学へと走ったか、アレイスター。これも予定通りなのかね……」

呟きは誰にも聞こえる事無く、風にのまれて消えた。

## 第五話 世界大戦（せんそう）（後書き）

学校が忙しくて、中々書く時間が取れない……。

夏休みなのに学校なんて鬼畜だ！！

次回はアレイスターとの戦闘を予定。

……勝てるかなあ？ いや、ガチで。

## 第六話 頂上決戦（さいきょうのふたり）（前書き）

今回、超展開キタコレ。と言いたくなっています。

ちなみにアレイスターの使ってる魔術は完全に独断と偏見ですので  
ご容赦を。

それでもOKという心の広い方は、どうぞ。

## 第六話 頂上決戦（さいきょうのふたり）

1920年。第一次世界大戦は終結し、戦火も消えて数年。

ある場所に、二つの影があった。

一人はアレイスター・クロウリー。ねじくれた銀の杖を持つ稀代の天才魔術師であり、その実力は世界最強とも言える。世界で最高にして最低、最強にして最悪と呼ばれる魔術師。

もう一人はラト・デイストロ・フィアンマ。神の右席の『右方』を担う魔術師にして、転生者神の子でもある。そして、ほぼ世界中に存在する魔術を知り尽くしている男。

イギリスの片田舎。まわりには何も無く、のどかな風景が続いている其処に、二人はいた。

「久しいな、フィアンマ」

「ああ、久しぶりだ、アレイスター」

先に口を開いたのはアレイスター。

昔を懐かしがるように語りかける。

「『黄金夜明』が解散し、行方がぶつつり切れていたお前と会うとは、全く思っていなかったよ」

「そうだな、俺様も、もう会う事は無いと思っていた」

二人の間には、およそ殺気という様な物は無い。

唯昔話をするように、緩やかに話す。

「こうして久しく会ってみると、やはり懐かしい。私にも人間味というモノが残っていたようだな」

「人間味か。お前は随分と人間離れしていたがな」

「それはお前の言えた事ではあるまい。私と肩を並べられるほどの人間はお前しかいなかった。お前も随分と人間離れしているよ」

「『黄金夜明』のメンバーはそれぞれどつかぶっ飛んでいたからな。俺様も例外ではないだろうさ」

肩をすくめ、呆れたように言う。

「……それで、お前が私を殺しに来たのか？」

「そうだな。『科学に走った裏切り者』の始末をつけにな」

「ふ、裏切り者、か。個人がどんな事を研究しようと勝手だと思うがな」

「俺様もそう思うがな。お前は魔術師でも最高峰。科学に走ったとなれば魔術師のメンツが無い。との事だ」

やれやれ、面倒な。と呟くフィアンマを見て、アレイスターは笑う。

「お前らしいな。だが、私を殺すのだろうか？」

「そうだな、これ以上勝手やられると魔術の品位が下がっちゃう」

「ならば 初めから全力でやらせて貰おう」

瞬間、不可視の衝撃がフィアンマを襲う。

左手で弾き飛ばし、衝撃を逸らすも、左腕は折れて使い物にならない。

(……何?)

疑問を覚えたのはフィアンマではなく、アレイスター。

確実に当たれば死を招く一撃を放った筈だった。だが、事実としてフィアンマは左腕こそ使えなくなっているものの、死んではない。

「やれやれ、やはり慢心は死を招くな。こんなことならもう少し準備をしておけばよかったよ」

ワイヤーに魔力を通し、術式を発動させる。

折れて血の出ている左腕は見る見るうちに治っていく。

「……やはり、油断も慢心も出来る相手では無いな」

「じつちとしてもそう思うよ」

ゴッー！ と轟音と衝撃波が辺りを揺らす。

当たり前のように不可視の一撃をぶつけあい、距離を取る。

この場所はアレイスターの潜伏場所。そして、魔術師にとって『前準備』こそがどれだけ真価を発揮できるかの力ギとなる。

そして、前準備が既に整っているアレイスターにとっては、この場所に至高だ。

恐らく、この場所においてアレイスターに勝てる人間はいない。

「巨人に苦痛の贈り物を」

『倉庫』から取り出したルーンの刻まれたカードを手に詠唱する。

巨大な炎はアレイスターへと向かい、その身を焼き殺そうと迫る。

「聖なる右は使わないのか？」

湖の上へと移動したアレイスターは、その大量の水を掌握し、炎と相殺させた。

「使って欲しいのか？ 心配せずとも使ってやるよ」

術式の書きこまれたルーンのカードを媒体に炎剣を作りだし、操作された水を一気に蒸発させる。

この時点で左腕は完治し、感覚こそあまりないが、動かす事には問題無かった。



風を操り、視界を保って『聖なる右』を発動する。

「いつ見ても気持ちの悪い物だな」

「見た目は、だろ。強力なんだがな」

アレイスターは手に持った『フラスティングクロッド衝撃の杖』を振るい、フィアンマは『聖なる右』を振るい、その力をぶつける。

（オイオイ、聖なる右と拮抗かよ。どうなってんだ、あいつの力）

目的に応じて出力の変わる第三の腕。

それはつまり、倒そうと思えば倒せるだけの出力が出ると言う事。

それだけの力と拮抗出来ている時点で、アレイスターも人間離れしていると言えないだろう。

（とはいえ、長引くのは不利か。奴はいいだろうが、私は駄目だ）

フィアンマには知識がある。

魔術師同士の戦いにおいて、最も狙うべきは相手の魔術の逆算。

どんな魔術を使おうと、逆算して正体・解法を導き出してしまえば、何の脅威にもならない。

だが、フィアンマにとって場所が悪い。

逆算しようにも、所々で別の魔術が発動し、どんな魔術を使ってい

るのが分からなくなる。

厄介な事この上ない。

（奴自身、ルーンやそれ以外の魔術を同時に使っている……全く、ふざけた奴だ）

アレイスターは連続して起こる炎の爆撃を相殺しながら考える。

元々魔力の精製方法の違いから、多種の魔術を同時使用すると言う事は出来ない。

だが、フィアンマは魔力を別に、同時に精製する事で同時使用を可能としている。

ソレは、思考を分割して同時に二つ以上の事を考えている様なモノ。

戦闘に集中などできる筈も無いし、魔術に対する魔力のロスも相当なモノだ。

だが、それを平然とやってのける。

もちろんいくつも同時に使えている訳ではないが、微妙に時間をずらす事で多少の無理は効く。

魔力とて、できうる限りのロスを無くしている。

九百年の練磨の結果が、この戦いに如実に表れている。

（面倒になって来たな、少しばかり強力なのかますか）

トン、と一步で数百メートルの距離を取り、魔道書の知識を引き出す。

「『硫黄の雨は大地を焼く』」

上空に五十ほどの『灼熱の矢』が出現し、吊り天井のように降り注ぐ。

アレイスターは杖を振り、『灼熱の矢』を消し飛ばす。

同時に、下から切り上げるように、二十〜三十キロ程度の長さの大剣が迫る。

紙一重でソレを避け、同時に不可視の刃を四方から膨大な数を放つ。フィアンマはそれを右腕を振って消滅させ、続け様に術式を発動する。

「『<sup>エリ・</sup>神よ、<sup>エリ・</sup>何故私を見捨てたのですか<sup>レマ・サバクタニ</sup>』」

血の様に真つ赤な赤黒い光線を発射し、アレイスターの体を食い干切ろうとする。

もう一度杖を振り、赤黒い光線と相殺させる。

（（このまま続けても堂々巡りか））

最後の一手。後一手が足りない。

実力はほぼ均衡。既に二人の戦闘でこの辺り一体は焦土と化している。

木々はなぎ倒され、湖はその水かさが異様に減っている。

辺りに用意されたアレイスターの魔術も同時に破壊しながらの戦闘を続けていた為、大分逆算が進んでいる。

ルーンの投影で凍らされた水は槍となり、フィアンマへと牙をむく。

同じくルーンの魔術で多数の炎剣を作り、氷の槍を薙ぎ払うように相殺させ、必殺の右腕を振るう。

だが、その右腕の攻撃も『フラスティングロッド衝撃の杖』によって相殺される。

似たような事の繰り返しだ。

互いに一撃必殺。常に相手を殺すつもりで攻撃している。

故に、ほぼ同威力に達する魔術を使うが為に勝負がつかない。

「チツ、流石に強いねえ」

地面に文字を描き、数体の巨大ゴーレムを作り出す。

「お前も相当だよ。今までこんなに強い奴と戦ったのは初めてだ」  
不可視の空気の槍がゴーレムを串刺しにする。そして、突き抜け、

フィアンマへと向かう。

「ま、そうだろうな。こんなレベルの魔術師なんてそうはいない」  
地面へと展開された術式から土の槍が飛び出し、空気の槍を相殺する。

そして、一瞬の静寂。

（チツ、マジで決着つかねえじゃねえかよ）

（強いな、流石に逃げを選ぶことも出来ん）

背を向ければ死ぬ。本能がそう告げている。

「……しょうが無い、派手なのは避けたかったんだがな。目立つから」

「……何？ この場所、お前が侵入するときに張った結界で感知は不可能だろう？」

「ま、そうなんだがな。無茶やると結界ごと喰いかねないんだよ」  
ブウン、と魔法陣が空中に浮かびあがる。

「!? 『<sup>サイン</sup>聖ジョージの聖域

目」に連動して動く魔法陣と、半径一メートル程度の空間の裂け目が

展開される。

「へえ、知ってるのか」

「竜に関しての伝承や魔術は一度研究した事があるのでな」

詠唱を始め、何かを始めるアレイスター。

「なら、竜の一撃を喰らってみろよ。『ドラゴンブレス竜王の殺息』をな」

『聖ジョージの聖域』で発生した空間の亀裂から放たれる、直径数メートルもの光の柱がアレイスターへと迫る。

「チツ……」

何かの詠唱を終え、両手で何かの術を発動させる。

光の柱はアレイスターからわずかにずれ、この場所を覆っていた境界をいとも容易く喰い破る。

距離を取る。縦では無く、横に。

目と連動して動く光の柱を逸らし、避けながら一撃を喰らわせようと近づく。

轟！！ と莫大な風と共にフィアンマの背中に現れた血よりも赤い翼と、聖なる右がその行く手を阻み、『ドラゴンブレス竜王の吐息』が追撃する。

一旦距離を取り、膨大な水を操作し、莫大な風を操作し、槍、槌、刀、剣を形作る。

多種多様な武器へとその形を変え、可視の武器と不可視の武器がその身を挟ろつと迫る。

真つ赤な翼、聖なる右、『竜王の吐息』で蹴散らそうと動かす。

轟音を立てながら次々とぶつかり、相殺し、蹴散らし、衝撃波で辺りを決る。

その中を移動し、アレイスターはフィアンマの眼の前へと来る。

「残念。もう少し遊べそうだったのにな」

逆算、終わるぞ。

ソレは最後通告。魔術を逆算されてしまえば、発動の予知も出来るし、止める事さえ出来るだろう。

「ああ、全くだよ」

眼の前へと迫るアレイスターは不敵に笑う。

「後数秒でよかったんだ」

ゴッ！！ と、莫大な衝撃波が『聖なる右』を超えてフィアンマを攻撃する。

聖なる右である程度は緩和されたものの、その一撃は重い。

吹き飛ばされ、倒れ　ずに、足を踏み出して持ちこたえた。

「っごあ……やっぱ強いなあ、オイ」

「な……何故、耐えられる……」

「危なかったぜ。それでも俺は聖人でね。体の頑丈さなら負けねえ」

攻撃の当たる瞬間、膨大な『天使の力』テレスマで肉体の能力を最大限まであげた。

でなければ、今頃トマト的に頭も潰れていただろう。

それでも、強力な一撃で頭からは血が流れている。

「　逆算、終了だ」

「クツ……」

咄嗟に張った防御用の魔術をすり抜け、作りだされた『豊穡神の剣』はアレイスターを攻撃する。

『衝撃の杖』は『聖なる右』で押さえつけ、防御用の魔術は逆算され対抗術式を組み込まれ、意味を無くす。

ザン！　と、音をたて、アレイスターの体は上半身と下半身に真っ二つにされた。

同時に両腕を吹き飛ばし、抵抗させないようにする。



ドサツ、と地面に落ち、アレイスターは地面を転がる。

「……負けた、か」

「そうだな、お前の負けだ」

「お前なら、確かに負けても仕方が無い。納得が出来る分、まだマシだ」

そうか、と返し、知りたかった事を尋ねる。

「お前、何で科学の道を選んだ？」

「……叶えたい夢、いや、野望と言うべきか。それがあつたんだ」

「夢、野望ね。……『神浄』『エイワス』『ホルス』に関する事か？」

アレイスターは驚き、聞き返す。

「……何故、お前がそれを知っている。いや、最初に私の魔術と拮抗した時からの疑問だった。……なぜ、『ホルス』の域に居る私と同列の力が扱える？」

「簡単だ、俺も既にお前と同じ領域に居るだけさ」

「そう、か……なあ、フィアンマ。お前にあの杖をやる」

「……ソレはまた、太っ腹だな」

「私はもう死ぬからな。魔術を無意識的に発動させてるから、まだ生きているが、そろそろ魔力も尽きる」

「……ああ、貰っていく。ありがとよ、友人」  
アレイスター

「ああ、さらばだ友よ」  
フィアンマ

そして、アレイスターは絶命した。

「……ハァー。疲れた」

地面に座り込み、そのまま寝ころぶ。

結界は恐らくルーシーが張り直しているだろう。ばれていないとい  
いが、と考えながら体を動かす。

（流石にノーダメージであいつは無理か。というか最初に一撃食ら  
ってたな、そういや）

頭からダラダラと血を流しながらそんな事を考える。

ワイヤーで術式を構成し、頭の傷を取りあえず治し、アレイスター  
の杖を拾う。

「……『ブラステイングロッド 衝撃の杖』か」

アレイスターの近くに転がっているねじくれた銀の杖を手に持ち、

『倉庫』に入れる。

「ありがたく貰って行く。お前は世界で最高にして最強の魔術師だった」

山が抉れ、大地が裂け、湖が割れ、森を薙ぎ倒している場所で、頂上決戦は幕を下ろした。

## 第六話 頂上決戦（さいきょうのふたり）（後書き）

アレイスターがヤバイ。強過ぎじゃねーの？ ってな感じになってしまった。

ぶっちゃけ聖なる右って、禁書読み直したら自動防御とか特に無かった（え

だってヴェントの攻撃避けたんですよ？ じゃあ無いと思うしか無いじゃないですか。

でも、ここまで来て書き直したらなんかズレそうな気がします。反応出来るのか？ 反応して防いでるんだろうか。異常だとは思いますが。

感想はいつでもお待ちしております。

## 第七話 大分裂戦争（オスティア）（前書き）

短いです。ご了承ください。

そして今回、俺TUEeeeeeeee成分が含まれています。

## 第七話 大分裂戦争（オスティア）

大分裂戦争。

魔法世界で起こった戦争の名だ。

ヘラス帝国とメセンブリーナ連合による戦争。

下らない価値観による戦争。

「本当に下らない。良くもまあ飽きずにこんなことが出来るものだ」  
人の歴史は争いが作る。

そんな事が唐突に頭をよぎった。

今、俺はアリアドネーのとあるホテルに居る。

特に目的も無く、やりたい事も無く、暇つぶしの感覚で魔法世界へとやって来た。

とはいえ、本当に何の目的も無いから何をしようか迷っている。

『紅き翼』に入る気は毛頭ない。

別にぶっ潰してもいいし、放っておいてもいい。どうにでもなるし、どうとでもなる。

メセンブリーナ連合に入ってるしな。

連合に魔法使いはいても、魔術師はいない。

帝国は魔術師も魔法使いもいるが、『紅き翼』の存在があつて中々勝てない。

魔術師は基本的に自分の為にしか力は使わないし、そもそも戦闘に向いている魔術を使う奴も限られる。

戦力にしても対して変わりは無いらしい。

速い話、『紅き翼』って戦争助長させてるだけなんだよね。

どっちかを潰せば速いんだが、『コスモ・エンテレケイア完全なる世界』の連中も動いているだろう。

連中、目的は世界を『完全なる世界』にする為に動いているが、何のために戦争をさせてんだろうな。

両方の戦力を削る為か？

それこそ『コードオブザライフメイカー創造主の掟』でも使えれば問題は無いだろうに。

使えないと言う可能性もあるがな。

少なくとも、中核を担つてるのはアスナだった筈だ。

完全記憶能力って便利。忘れないもんな。

それはともかく、現状ではどっちつかずを通そうかなーと思つてる。

でもそれだと暇になるよな。

「お父様、今情報が入りました。帝国がオスティア回復作戦を始めたようです」

.....。

.....。

.....。

アスナ姫、攫ってみるか。

轟音が鳴り響く。

鬼神兵は次々とオスティアの防御を抜け、『黄昏の姫御子』のいる塔へと手を伸ばす。

同時に精霊砲が放たれ、塔を直撃しようとする。



ソレは『魔法無効化能力』能力により弾かれ、再度手を伸ばし、精霊砲は消滅する。

手は届く事無く、何かに切り落とされた。

「ふん、『紅き翼』は遅れているようだな」

現れたのは二人の人物。

不自然なほどに自然に、いつの間にか其処に居た。

近くにいた者達は当然、驚く。

「な、何者だ!？」

「言っても分かるまい」

コツコツ、と歩を進め、一人の少女へと近づく。

近くに来てしゃがみ、口に付いた血を拭き取る。

鎖を破壊し、体に治癒の魔術を使う。

「……嬢ちゃん、名前は？」

「……ナ、マエ? ……アスナ……アスナ・ウェスペリーナ・テオ  
タナシア・エンテオフュシア」

「アスナか。俺様はフィアンマだ」

「……フィアンマ……?」

「そう、フィアンマだ」

そう言つて立ち上がり、軽く手を振つて近くにいた魔法使い共を攻撃し、気絶させる。

「この程度か。オスティアの最奥の秘密だと思つんだがな」

護衛とか大丈夫か?

そう言つて、周りを見る。

鬼神兵が絶えず攻撃を仕掛けようとしているが、ルーシーの操作する水によつて防がれている。

「お父様、まだ倒しちゃ駄目なの?」

「まだだな。奴らが来るまで待て。一度確認しておきたい……と、言つてゐる間に来たな」

雷が走り、鬼神兵を二つに断つ。

そして現れたのは、三人。

「無事かつ!？」

「随分と遅い登場だな。待ちくたびれたよ」

ルーシーは水の操作を止め、フィアンマの傍に寄る。

ソレをみて、『紅き翼』は少しばかり警戒をする。

「あなたは？」

「通りすがりの魔術師さ。面白そうだったから見に来たんだよ」

「魔術師だと？　ならば敵か！？」

「ふむ、そうだな。どう取ってくれても構わんよ」

もとより目的は特にない。

暇つぶしで攫ってみるか、という感じなので、特に何かしようという気は無い。

「それより、あっちをどうにかした方がいいんじゃないか？」

指差したのは大量の艦隊。

精霊砲等の装備をしたモノや、鬼神兵などが居る。

「……お前が後ろから攻撃しないとは限らないだろう」

「そんな事はしない。俺様なら真正面から叩き潰すさ」

どちらにしても結果は同じだが。と付け加える。

「ほおー、言うじゃねえか。なら俺と勝負してみるか！？」

「ナギ、それより先にアレらを片付けるのが先です。このままでは落とされますよ」

「……チツ、しょーがねえ。待つてろよ、直ぐに終わらせてやる！」

そう言つて飛び出し、呪文を唱えて一掃し始める。

アルビレオは一度フィアンマを見た後、戦場へと出る。

詠春は信用できないとでも言いたげに見た後、しぶしぶ戦い始める。

「……お父様は戦わないの？」

「うん？ ……そうだな、この程度じゃ暇つぶしにもならん」

そう言つてアスナの隣に座り込み、アスナを膝の上に座らせる。

「あ、ずるい」

ぷくっ、と頬を膨らませるルーシーを宥め、アスナの髪に触れる。

撫でる様な形になっているが、特に問題は無いだろ。

そう思つて頭を撫で続ける。

漸く終わったか。

そう呟いて、アスナを膝から降ろし、立ち上がる。

「随分と時間がかかったな」

「ハッ、テメエはアレより早く倒せんのかよ！」

「できるが、面倒だな」

魔法を続けて使い、大量の敵との戦闘で魔力も大分使っている為、息が少し上がっている。

「大丈夫か？ 息があがっているぞ？」

「テメエに心配されるほどじゃねーよ」

「ふ、威勢がいいな」

「当たり前だ。俺は『最強の魔法使い』だぜ？」

そう言って、構える。

魔力は高まり、魔法を発動しようと準備する。

「いつでもかかって来い。潰してやる」

「ハッ、余裕かましてんじゃねーよ!」

無詠唱の魔法の矢を多数放ち、そのまま瞬動で横へと回り込む。

フィアンマは地面にワイヤーで術式を書き、動かして盾にする。

「『雷の斧』!!」

続け様に放たれた魔法はルーンによる炎剣で防がれ、炎はそのまま焼こうと迫る。

チツ、と舌打ちして離れ、呪文の詠唱を始める。

「『雷の暴風』!!」

右腕から放たれる雷の魔力の奔流はフィアンマを飲み込もうとうねりを上げる。

ソレを避け、トン、とナギの横に移動し、そのまま蹴りを放つ。

「う、あ……」

咄嗟に腕でガードするも、強烈な蹴りで数メートル吹き飛ばされる。

「……やれやれ、こんなものか。拍子抜けだな」

「ん、だとコラァ!! 舐めんじゃねーぞ!!」

「そう熱くなるなよ」

クククつ、と笑いをこらえるようにしながら、フィアンマは歩く。

「まあどの道全員でかかってきても、結果は同じだな」

その言葉に、ナギ以外の二人も反応する。

「随分と自信があるんだな」

「ナギ、手伝いましょうか？」

「いらねえよ、こいつは俺がぶっ倒す！」

「言っただろう、結果は変わらん。人間じゃ、どうあっても俺様には勝てんよ」

ゴウツ、と巨大な炎がフィアンマの右手へと集まる。

「まあ、今はこんなものだろうな。姫御子は連れて行かせて貰う」

「なっ、待ちやがれ！！」

「『巨人に苦痛の贈り物を』」

放たれた巨大な炎は、いとも容易くナギ達を飲み込んだ。

その温度の高さにまわりの空気は揺らめき、炎は地面を焦がす。

そして、ゆっくりとアスナの元へ歩く。

「では、お姫様。城の外へご案内しよう」

そう言って手を取り、術式を発動させようとする。

「待ちやがれっ――！」

炎を抜けて、ナギが飛び出す。

そのまま殴りかかるが、軽くかわされ、蹴りを入れられて距離が離れる。

「空気読めよ、今襲う所じゃ無かつたろ」

「知るかよ！ テメエに連れて行かせてたまるか！」

「……ギャンギャンと五月蠅い奴だ」

簡易的に強力な結界を張り、アスナとルーシーを結界の中に入れる。

首を動かし、乾いた音を立てながら、『紅き翼』と相対する。

「『雷光剣』――！」

詠春は結界が張られ、被害が出無いと分かると、神鳴流の奥義を放つ。

アルビレオもまた、重力魔法を放って動きを阻害しようとする。

そして、極めつけには。



「百重千重と 重なりて 走れよ稲妻 『千の雷』!!」

普通ソレ対人、それも護衛対象が敵側にいるときに使うもんじゃねーだろ。という疑問を覚えつつ、強力な雷が迫る。

「無駄だと思いがね」

フィアンマは構えさえ取らなかった。

その手の指を動かし、見えないモノを掴み取る。

有るはずの無い物がにじみ出たような感覚。それは確かに現実世界に存在していない。

だが、気配や雰囲気といった未分類の情報の所為で、『銀』という色まで付いた幻覚があるように見えてしまうのだ。

ナギはそれに違和感を抱きつつも、目を離さない。

勝敗など、一目瞭然だった。

強烈で強力なまでの一撃で、詠春とアルビレオは塔のギリギリまで吹き飛ばされる。いや、これは塔から飛び出さない事を褒めるべきだろう。

ナギはその攻撃をまともに受けて吹き飛ばされ、アルビレオと激突した。

「たかが魔法で、俺様に勝てると思うなよ」

フィアンマは、今度こそアスナを連れて転移魔術で何処かへと飛ぶ。

その顔は、愉悦に満ちていた。

## 第八話 接触（それぞれのであいい）（前書き）

短め、特に書けなかった。戦闘シーンが楽な気がして来たのは錯覚では無いと思う。

## 第八話 接触（それぞれのであい）

テーブルに紅茶が三つ置かれる。

「ありがとう」

「いえ」

テーブルを囲み、いつも通りの流れで紅茶を飲む。

俺とルーシー。二人でいつものティータイム、という奴だ。イギリス産の紅茶は旨い。

ただし、今日はちょっと違う。

もう一つおかれた紅茶を飲むのはアスナ。先日オスティアから攫って来た。

それに伴ってアリアドネーから少し離れた場所に、適当に家を建てて隠れ家の代わりにしている。

もちろん強力な結界と防衛用の仕掛けがしてある。守る為には当然だ。

一応近くに町はあるから食料とかには不便してない。

「おいしいか？」

「ウン、オイシイ」

……唯、この子片言なんだよね。後で言葉の勉強でもさせてみるか？

アスナの頬をぷにぷにとしながら、紅茶と一緒にケーキを食べる。

ちよと切って一口食べる。うむ、上手い。流石に慣れてるなーと思う。ちなみにルーシー作。教えたのは俺だけだね。

ふと視線を感じてみると、横でアスナがジーっとケーキを見ていた。

「……食べてみるか？」

コクンと頷く。

食べやすい大きさに切って、口へ運ぶ。

「アーン……」

パクツ、と食べる。何この子可愛い。

「……オイシイ」

ケーキを飲み込んで、そう言った。

ふむ、感情が出にくいのか。それだけならまあどうにでもなるだろう。

今から一緒に暮らせば、自然と感情も出るようになる。と思う。

紅茶を飲み終わり、立ち上がる。

「どこ行くノ？」

「うん？ ちょっと掃除にね」

「掃除？」

「直ぐ戻ってくるよ。ルーシー、ちゃんと見ておけよ」

「分かりました」

「随分とまあえげつない仕掛けをしていたものだね。驚いたよ」

「俺様としてはお前が生きているだけでも驚きだがな」

白い髪に淡々とした喋り方。

多分アーウェルンクスシリーズの一番目<sup>フリームム</sup>だろう。

まわりにはおびただしい程の血、血、血。常人なら匂いだけで吐き気がするほどの濃い血の匂い。

俺が用意していた『人形』だ。詳しく言うなら魔法生命体っぽいもの。

大半は失敗作で、倉庫には封印されたのが無数に眠っている。

どこぞの『人形遣い』みたいに不死身の化け物作ってみようかと思っただ、失敗続きだ。そもそもあれ生物じゃねーし。

どれもこれもが意外と強い。個人的に知能が無いのはアウトだけだな。

強いといっても一体一体のレベルはラカン表で言う千位だ。俺達レベルになるとヘボに見えるからな。

「なるほど、全滅か」

半数は石化されている。こいつがやったんだろうな。

「まあどうせ暇つぶしで作ったガラクタだ。ストックなら幾らでもある」

「……やはり君は脅威だね。だが、『黄昏の姫御子』を渡して貰えないかい？」

「理由は？」

「僕たちの計画の為に必要なんだ」

計画、ね。『コスモ・エンテレケイア完全なる世界』か。

知ったこっちゃねーよ。そんなの。

「力づくで奪い取ってみるんだな」

「……ふう、出来るだけ穏便に済ませたかったんだけどね」

「随分余裕かましてるじゃないか」

「こういう性格なんだ」

そうかよ。そりゃ結構だ。

「この世界の真実を知らず、のうのうと過ごすより、僕たちの計画を手伝ってくれた方がいいんだけどね」

「真実ね。この世界が近いうちに崩壊する事か？」

「……何故知っているんだい？」

「そりゃお前、俺様の知らない事なんて、それこそ未来位しかねえよ」

原作なら分かるけどな。当てにならない可能性が出てきたが。

「それを知ってなお、僕たちの提案は受け入れれないと？」

「当然だ」



「何故？ 世界を救うにはこれしか方法が無い。堅実で確実な方法なんだ」

くだらねえ、と呟く。

「どうだっていいさ。そんな事。ある程度の刺激とスリルがあれば、人生楽しくやっていけるし、方法なんて探せば腐るほどある」

「そう、なら飛びつきりのスリルを味あわせてあげるよ。君の考える方法は無意味だからね」

詠唱を紡ぎ、巨大な石柱が現れる。

巨大な質量を持つ石柱は俺を押しつぶそうと向かう。

ソレを見きって避け、懐へ無理矢理ねじ込むように入った。

無造作に右手をのばし、アーウェルンクスへと向かわせる。

それに気付いたアーウェルンクスは障壁を全力展開し、構える。

だが、俺はソレを無視した。

強烈な拳を受け、アーウェルンクスは容赦なく数メートルも吹き飛ばされた。

「がつ、はあ……」

堅牢な障壁をブチ破った俺の右肩には、歪な第三の腕が出現してい

た。

「なるほど、気軽に破るには少々堅い障壁だったらしい」

軽い調子でそんな事を呟き、左手で肩口を叩く。

「……どうにも、化け物じみてるね」

「そりゃどうも」

右手をふらふらと動かしながら、歩く。

「で？ まだやるかい？ いい加減お前じゃ相手にもならない事は分かっただろ？」

「……そうだね、今回は退かせて貰うよ」

そう言うと、転移魔法で何処かへ消えた。

どの道倒しても新しいの作るだけだろうしな。無駄だろ。

さて、さっさとアスナの所へ戻らないとな。

『紅き翼』

それが俺達のチームの名だ。

青山詠春。アルビレオ・イマ。フィリウス・ゼクト。そして俺、ナギ・スプリングフィールド。

最強を自負する魔法使いと剣士の集まりだ。

だが、俺達は前に一度だけ負けた。

俺と同じ赤い髪。異常なまでの威圧感。魔術師と名乗った男は、俺達を守ったオステシアの『黄昏の姫御子』という女の子を連れ去った。

当然、連れ去られた事に俺達『紅き翼』は非難を受けた。

だから、今度こそ負けない様にゼクトっつージジイ口調の奴に魔法を教えて貰ってる。

あんちよこ見らずに魔法を使って、絶対あいつに一泡吹かせてやるよ！

だが、その前に

「これが旧世界の『鍋料理』か！ それじゃ、早速肉を投入〜！」

「ちょ、ナギ、おまつ！ 何をいきなり肉を入れようとしている！」

「いいじゃねえか、詠春。旨いんだから！」

「いいわけあるか！！　いいか、鍋には火の通る時間差というモノがあつてだな……」

くどくど言つてんじゃねーよ。うまいモンから先でいいじゃねーか。

「フッフ、知っていますよ、詠春。日本ではあなたのような人を『鍋將軍』と呼ぶのでしょうか？」

その言葉に、俺とお師匠はショックを受ける。

「ナベ・シヨーグン！？」

「強そうじゃな」

シヨーグンか、確かに強そうだ。

「まいったよ、詠春。お前がそれほど偉かったなんて知らなかったぜ……」

「うむ……料理は全てお主に任せる。好きにするといい」

「おお、なんじゃこのソースうまいぞ？」

「ホントだうめえっ!？」

「これこそが日本の誇る『しょうゆ』だよ」

「おおっ、コレが『しょうゆ』か。うめえっ!？」

「ナギ、お前日本来た時寿司食ったろ」

うめえな、コレ。

「……姫子ちゃんにも食わせてやりたい位のうまさだな」

「姫子ちゃ……？ ああ、オスティアの姫御子のことじゃな？」

あの時の事を思い出すと今でもイラつく。

「あの野郎、姫子ちゃんに酷い事してなきやいいが」

「……しかし、彼が連れて行った事で、自由になれたのかもかもしれませんよ？」

……そうかも知れねえけどよ。

「何で無理矢理連れて行きやがったんだ」

「そうしなければ連れて行く事は出来なかったでしょうからね。まともに交渉しても、取り合う筈がありませんから」

だとしてもだ。

「……どうもキナクセエな」

「何がだ」

「戦争とか、姫子ちゃんとかよ。勘だけど、全部繋がってる気が済んだよな」

「まさか、そんな筈は無いだろう」

だといけどな。

それにしても、あの野郎。納得いかねえ。

「何であんなに強いんだよ」

「なんじゃ、お前が負けたとか言う赤毛か」

「俺も赤毛だけどな。そうだ。あいつは強かった。俺じゃ歯が立たなかった」

「ナギだけではなく、私達もです」

「三人がかりでも、怪我一つ負わせられなかった」

「トンデモ無い奴じゃの」

俺も思うよ。トンデモねえ野郎だ。

だからこそ。

「次は絶対に勝つ」

そう言ったら、他の三人が笑った。何が可笑しいんだよ。

「魔術師でしたからね。私達とは違って、一人一人が全く違う術を使いますから。敵対するには厄介です」

「帝国には魔術師が大量にいるんだろ？」

「確かにいますが、元々魔術は事前準備が大事ですし、突発的な戦闘には向いてないんですよ」

なら、其処を突くつてのも、作戦としちゃ有りってわけか。

……駄目だ、知恵熱が出そうだ。

「無い頭で考えようとするからじゃろ」

余計な御世話だ。

「……ん？」

風を切る音がして、鍋が飛ばされる。

俺とアル。お師匠は肉を空中でキャッチし、食べ続ける。

「食事中しつれーいーいー！！俺は放浪の傭兵剣士 ジャック・ラカン！！ いっちょやろうぜ！！」

「なんじゃあのバカは」

「帝国のって訳じゃなさそーだな。えいしゅ…おお!？」

鍋かぶってやがる。避けるよ、それぐらい。

「フ…フフフフ…フ…食べ物を粗末にする者は……」

あ、詠春がキレてる。珍しいな。

「どーした、来ねーのかぁー？ 来ねーならこっちからいッ……」

詠春は大剣を投げた筋肉野郎を目掛け切り掛かり、大剣を真つ二つに斬る。

「おほ」

「斬る」

派手な音を出しながら斬り合い、最後に詠春が色仕掛けにかかって負けてやがった……。

次は俺だ！

『雷の斧』を使って牽制する。

「おう、出たな『情報その四 赤毛の魔法使いは弱点なし 特徴 無敵』」



「てめえら、手エ出すなよ」

なんとなくだが、こいつと戦ったら気分が晴れる気がする。

強そうだからな。ぶっ倒してやるよ!!

## 第九話 人形（さいせん）（前書き）

更新が遅い。何故かと言われると忙しいに尽きます。すみません。

今後遅れて行くと思いますが、どうぞよろしくお願いします。

## 第九話 人形（さいせん）

人が多い町中。私とお父様、そしてアスナは手を繋いで街を歩く。

最近、町では『紅き翼』が有名だ。

三人がかりでお父様に手も足も出なかった連中の癖に、グレートブリッジを落とせるだけの實力はあったらしい。

最も、私達がやろうと思えば一時間程度で制圧できるとは思っけれど。

まあ、今はそんな事は関係無い。お父様とショッピング。アスナもいるけれど、楽しまなくちゃ。

「フィアンマ、アレ何？」

「うん？ ああ、アレはソフトクリームだな。二人とも食べてみるか？」

その問いに私とアスナは直ぐに頷いた。

「よし、ちょっと待ってろ。直ぐ買ってくるから」

お父様は直ぐに店の前に行き、二人分のソフトクリームを買って来た。

「ほれ、アスナ、ルーシー」

ソレを受け取り、一口食べる。

「甘クテオイシイ……」

「冷たくて甘い」

私達はそれぞれ感想を言う。お父様はそれを聞いて笑った後、私達と手を繋いでまた歩き始めた。

『私』という個体の寿命は、恐らく後二十年弱。

お父様と違い、永遠の命を持っていない私は、死ぬと知識などの記憶を持って別の体へと移る。

寿命は個体差は有れど、およそ四十年程度。肉体年齢は既に二十台前半で止まった。

今の肉体は『神の力』<sup>ガブリエル</sup>のテレズマを流し込まれている為、必然的に『水』系統の魔術を得意とする。

時間を精一杯使って、できうる限りお父様との思い出を残したい。

傍から見ればアスナの方がお父様とは親子に近い気もするけれどね。

ソフトクリームを食べ終わり、いくつか服を買って、また街を歩いている。

まだ昼過ぎで賑わっているし、帰ってもやることも無いので楽しみ

たい。

そう思っていた時、ふと既視感があった。

振り向いてみれば、赤髪の男がこちらを振り向いていた。金髪の女は赤髪の男に何か聞いているようだ。

「……お父様」

「気にするな。放っておいていい」

お父様は振り向こうともせず、ゆっくり歩き続ける。私も同じように歩き、放っておこうとした。

だが、あの男はそのまま放っておくつもりは無かったらしい。

「おい、待てよ」

ハッキリと、魔力を高めながら止められる。

お父様を見ると、溜息をついた後、振り向いた。

「……やっぱりテメエだったか。通りで見た事あると思っただぜ」

「ナギ、奴と知り合いなのか？ 誰じゃ？」

「姫子ちゃんを連れ去った犯人さ」

「何？ 奴が……」

連れ去った。と言われてもしようがないとは思うが、イラつく。直ぐにでも攻撃に移ってしまいそうになった。

魔力を練り始めた事に気付いたのか、お父様が片手で制する。

「お前も随分と暇そうだな。少しは戦争の真実に近づけたのか？」

「……戦争の真実、だと？」

「何だ、まだ気付いていなかったのか？」  
コスモ・エンテレケイア『完全なる世界』の事に

お父様は笑いながらそう言う。

あの男はそれを聞いて更に強く睨み始めた。

「テメエ、奴らの手先か！？」

「バカか、お前は。それなら態々この子を連れだしたりせんよ」

よく見ればアスナが『黄昏の姫御子』だと気付いたのか、二人はビツクリしているようだ。

今のアスナは普通の服を着て、髪も下ろして、お父様と手を繋いでいる普通の女の子にしか見えない。今まで同じ服しか着ていなかったみたいだし、気付かなくてもおかしく無い。

「……貴様が、『黄昏の姫御子』を……」

「おおっと、怖い怖い。そんな睨みつけるなよ」

からかう様にそう言うお父様に対して、金髪の女が赤髪の男と何か話している。

「ナギ、貴様は奴には勝てんのか？ 『黄昏の姫御子』は目の前におると言つのに」

「無理だな。俺一人で勝てる相手じゃ無い。少なくとも、俺とアルと詠春の三人でも一撃も入れられなかった相手だからな。ジャックがいても分からねえ」

「主が『一人で勝てない』等というのは、奴の強さは相当な様じゃの」

「ああ、正直目の前に居る今でも、奇襲を掛けられる状態でも、勝てる気が全くしねえ」

話し合いは終わったのか、二人はこちらを向く。

「……『黄昏の姫御子』をこちらに引き渡しては貰えぬか？」

「嫌だ、と言つたら？」

「ならば、諦めるしかない。ナギでも勝てんのであれば、今戦つても意味が無い。それより、『完全なる世界』を倒す為に手を貸してはくれんか？」

「オイ、姫さん！」

「黙っている。……主の力量は大体分かる。ナギでも勝てんと言うほどの男じゃ。ならば、この戦争を止める為に手を貸してくれ」

戦争を止める為、ね。

『紅き翼』の活躍で、戦争が長引いたって事を分かって無いのかしら。

少なくとも、彼らが余計な事をしなければ帝国が勝ち、戦争は終わっていた。

連合がどうなろうと知った事ではないし、魔術師であるなら連合より帝国領の方が過ごしやすい。

お父様の方を見れば、ちょっと考え込むような顔をしている。

……まさか、彼らを手伝う気なのかしら。

「……そうだな、戦争は止めるべきだ」

「ならば……」

「だが断る。どの道魔法世界がどれだけ疲弊しようと、旧世界に行けばいいんだ。それに、『完全なる世界』の連中も、計画を遅らせざるを得ないだろうしな」

「……どういう事じゃ？」

「簡単だ。最終的な目的に最も必要な鍵がここにある以上、奴らは計画を実行できない」

ソレは、確か前にも言っていた事だ。



アスナの『魔法無効化能力<sup>マジックキャンセル</sup>』を使って、世界を再構築する。

その為には、アスナは計画には必須だ。でも、お父様が保護している以上、彼らは計画を実行できない。

「何故、そう思ったのじゃ？」

「単純な事だ。俺様は全てを知っているからな」

「何」

その問いを言い終える前に、どこから魔法による攻撃が放たれた。

轟音と爆炎が私達を包む。

「……また随分と行儀の悪い奴がいたようだな。早めにつぶして置くべきだったか」

私達は水によって張られた幕で爆発、それに続く爆炎や粉塵等を防いでいる。

あの程度の攻撃では、届かない。

「では……」

「そうだな、肩慣らしでもしておけ」

その言葉を聞き、直ぐに上空へ跳び上がる。

攻撃をして来た魔法使いを上空から補足し、周囲の水を操作して滑るように移動する。

トン、と降り立ち、敵を見据える。

「チツ、見つかったか……しょうがない、やるぞ!」

目の前にいる敵の数は二人。奇襲の為だけに来たのだろう、人数は少ない。

二人はそれぞれ詠唱を始め、左右に分かれる。

「『紅き焰』」

「『白き雷』」

挟むようにして放たれた攻撃はルーシーへと直撃する。

爆発音が響き、煙が上がって粉塵で姿は見えない。

「……やったか？」

その言葉に反応するように、男の腹に氷の槍が突き刺さる。槍の突き刺さった男はそのまま複数の槍に貫かれ、倒れた。

「確か、そう言うのをフラグっていうんだっけ」

そんな事を呟きながら、煙の上がっている中から出てくる。傷など一つも無い。

空中に浮かんでいる水球を操り、ルーンを刻んで凍らせる。その強度は唯の氷とは違う、異常なまでの強度。

もう一人の男は距離を取り、もう一度攻撃をしようと詠唱を紡ぐ。

「『紅き焰』」

爆炎がルーシーを包み込む。だが、ソレを突き抜ける様に氷の槍が迫り、男はかろうじて避ける。

爆炎の中、ルーシーは平然と歩いて男の方へ向かう。

足と地面の間に水の膜の様なものを作りだし、滑るように移動を開始した。

それは音も無く、高速。

男が気付いた時には、既に視界から消えていた。

バゴン！ と横からの一撃が振るわれる。

生まれるときに肉体へ『天使の力<sup>テレスマ</sup>』を入れられ、人間以上、そこそ聖人に迫る身体能力での膝蹴りを食らわされ、吹き飛ばされる。

建物に当たり、男は壁を破壊しながら内部へ転がる。

（……クソッ、何だあの化け物！）

『完全なる世界』の下部組織として、現状敵対し、危険となりうる者の排除を請け負ってここにいる。

本来ならば、奇襲だけで決めるつもりだったのだ。

ならば、奇襲した時と同じように威力が一番大きい攻撃を喰らわせるしかない。

そう思い、詠唱を開始しながら、ルーシーを補足しようと動く。

見つけるのは簡単だ。異様なまでに雰囲気が違う。それ位は分かる。

一定の距離を保ち、詠唱を終える。

「『燃える天空』！！」

勝った、と確信した。

あの一撃を人間がともに喰らって、生きていられる筈が無い。

そう。

『人間』が『まともに』喰らえばの話だ。

ザン！ と右腕が切り裂かれる。

痛みに呻き、切れた場所を押さえながら逃げようと動く。

「全く、ちよろちよると逃げ回って。面倒ね。ついでにこの辺にあるアジトまで潰しておこうかしら」

風で髪を靡かせながら、悠然と歩く。

両足は凍らされ、使い物にならない。

「ひ、く、来るな。来るなっ！！」

無様に地面を這いつくばっても逃げようとするが、両足が凍り、地面とくっついていては動かない。

「さあ、私とお父様の時間をつぶした事を後悔なさい」

「ふむ、そろそろ終わったか」

「ナニガ？」

「うん？ ルーシーの方だよ。敵を捕まえたみたいだな」

敵は三人。二人は潰したが、一人はわざと逃がした。

ナギが咄嗟に追跡用の魔法を掛けている所を見たからだ。追う必要は無いと判断した。

あつちは勝手に追跡して潰すだろうし、もとより興味も無い。

そう考えていると、フィアンマの目の前にルーシーが降り立つ。

「敵は？」

「既に消しました。問題は無いかと」

「ならいい。さっさと帰るとしよう。これ以上の面倒は御免だ」

そう言つてアスナを抱き上げ、ルーシーと手を繋いで移動用の魔術を行使しようとする。

「そうはさせないよ。ここで君は倒させて貰う」

不意に現れたのは、五人。

アーウェルンクス、そして恐らく他の人形達。

「この間の一件で懲りたと思っていたんだがな。まさか数を増やした程度で、俺様をどうにかできるとは思ってはいないだろうな？」

「少なくとも、数を増やせば『黄昏の姫御子』を攫う事も出来るだろうからね」

「やってみろ。お前らじゃ相手にならん」

「言うじゃないか、魔術师风情が」

炎を纏った男が瞬動で目の前に移動し、そのままフィアンマへと殴りかかる。

ソレを横に逸らし、蹴り飛ばす。その間にアスナをルーシーへと渡し、結界を張る。

「さあ、思う存分かって来い。アスナが傷つくのはお前等とて望むまい」

影の中から引きぬくのは一振りの剣。『カーテナⅡオリジナル』。

ヒュン、と手元で一度回転させ、次元を切り裂く。射程はおよそ二十メートル弱。

切り裂かれた次元空間の『断面』が残骸物質として世界に出力され、壁の様にして現れる。

瞬間、その断面に攻撃が直撃した。

爆炎がまき散らされ、フィアンマはそのまま剣を振るう。

距離はおよそ七十。

「攻撃範囲内だ」

咄くように言った後、見えない何かに切り裂かれるように、障壁を無視して片腕を切り落とした。

「何っ!？」

他の四体を含め、人形達はそれぞれ驚きを返す。

当然だ。自分たちの使う多重障壁を無かったように、それも剣が届いていない範囲で斬られたのだ。驚かない方がおかしい。

「……やはり、危険だね」

詠唱を紡ぎ、五人は一斉に魔法を放つ。

「『燃える天空』」

「『千の雷』」

「『こおる大地』」

「『千の影槍』」

「『引き裂く大地』」

その全てが対人では無く、対軍勢用の魔法。



人に使えば、肉片など残らないだろう。

だが、目の前にいるのはそんな常識など通用しない男だ。

ヒュン、と剣を手元でもう一度回転させ、百メートル程度の断面の壁を作りだす。

爆炎、雷撃、氷結、影槍、溶岩。

そのうち四つは完全に防げたが、『こおる大地』は足元からの絶対氷結魔法。壁では防げない。

「まあ、予想通りか」

フィアンマはカーテナを地面へと向け、突き刺す。

ドッ！！ と衝撃波が四方へ散り、それによる音が響いた。

氷は完全に砕け、半径五百メートル近くに及ぶ衝撃波を受けて町は壊滅状態、人形達も障壁でこそダメージは少ないが、それでもゼロと言っ訳ではない。

「……化け物だね、全く。ここまでやって無傷とは。一体どうなっているんだい？」

「企業秘密です。ってな」

緩やかにもう一度剣を振り、アーウェルンクスの腕を切り落とす。

『次元』そのものを切っているのだ、障壁を張った所で防げるわけが無い。

「クツ、『万障貫く黒杭の円環』」

無数の杭がフィアンマへ迫る。だが気にも留めない。

もう一度剣を突き刺し、衝撃波を四方へ散らせる。今度は其処までテレズマを込めておらず、自身の周りの杭を弾いただけ。

「『奈落の業火』」

迫る炎をまたも壁で防ぎ、それが消えた後に敵を見る。

「逃げたか。まあ妥当だろうな」

周りを見れば、町から少し離れた場所だったとはいえ、相当な被害を出している。

早めに逃げるか、と考えて結界を解き、今度こそ転移魔法を使って屋敷へと帰った。

「我が主、頼みがあります」

「……どうした、一番目？」  
フリームム

「我々の力を上げてはくれませんか？」

「何故だ？ そのままでも十分だと思うが」

「奴……かの魔術師に勝つためには、力が足りないのです。これでは計画を遂行する事が出来ません」

後ろを見れば、同じように膝について頼み込む四人。いや、他の人形も合わせれば十人近くはいるだろう。

「……ふむ、其処まで強い、か。いいだろう、調整をしてやる」

「ハッ、ありがとうございます」

一斉に頭を下げ、下がる。

造物主は一人夜空を見上げ、呟く。

「魔術師か。お前は一体何者なのだ？」

その言葉は、夜の闇に消えた。

## 第九話 人形（さいせん）（後書き）

ぶっちゃけ能力を考えてみればカーテナを転生時に持って行くという考えをもつ転生者はいなかったのだろうか？

正直凄く強い。読み直して設定まとめたら障壁とか意味無かった。

そしてアーウェルunks達強化フラグ。これ以上ってナギ達勝てるのか？

まあナギ達が戦うとも限らない訳ですが。

感想を頂けるとありがたいです。

## 第十話 誘拐（まんしん）（前書き）

サブタイがネタ切れ気味。本編よりサブタイが思いつかない。

この所戦闘ばかりですが、恐らく次回までになると思います。後、短いです。

## 第十話 誘拐（まんしん）

屋敷の中を歩く。

アスナは扉を開け中を見ると、いつも通りの光景があつた。

「おはよう、アスナ」

「オハヨー、フィアンマ」

紅茶を飲みながら何か本を読んでいる。アスナはフィアンマの膝の上に座り、その本を覗き込む。

アスナがみる前にフィアンマは本を閉じてしまう。

「コレ何？」

「いわゆる『魔道書』だ。アスナが見ると目の毒だぞ」

実際、耐性の無い人間が見れば廃人になる様な代物なのだ。誰が見ても毒だろう。

最も、殆どの魔道書はフィアンマの知識の中にあるのだが、魔法という技術と混ざったものや魔法の影響がある事による技術の変革によって、新しい魔道書も幾つか生み出されている。

魔道師は其処まで多くは無い。だが、出す人間は確実にいる。

厄介なのは、人一人を簡単に廃人出来る魔道書を生み出せる人

間が実在する事だ。破壊は『イマジンブレイカー幻想殺し』でもあれば可能なのだろうが、残念ながら存在しない。

最も、破壊すると言う考えは全く無かったりする訳だが。必要なら自身が持つておけばいい訳でもあるし。

「アスナに魔術を教えてみるのも面白いかな」

「魔術？」

「そう、魔術だ。『マジックキャンセル魔法無効化能力』は効くみたいだしな」

実際、気弾や魔法を消せるので魔術を消せてもおかしくは無かったのだが。精製方法は気に近いとはいえ、一応人間の作り出すものであるからだろう。

だが、『テレスマ天使の力』を使った魔術は消せなかった。

もしもの時の為の備えをしておくのも悪くは無だろう。

「そうなると……何がいいかな？」

まあ後でいいか。と呟いて紅茶を飲む。

ルーシーは朝食の準備をしている為、ここにはいない。

まるで親子だな。と思うフィアンマ。

確かに傍から見ればフィアンマとルーシーが夫婦でアスナはその子供だと思っだろう。

一人は世界最強の魔術師と呼んでもおかしく無い男。

一人はその魔術師に作られた魔術生命体。

一人は魔術師に助けられた『魔法無効化能力』マジックキャンセルという能力を持つ少女。

全員が特異な存在であるが、それ故に引きあつたと考えてもいいかもしれない。

そして、いつも通り朝食を終え、また魔道書を読み始める。時たまアスナと出かけたり、遊んだりしているが、基本的に知識の収集をしている。

但し、状況次第ではそれだけではないが。

「またか、随分と暇なんだな、お前等」

「暇じゃ無く、『黄昏の姫御子』がいなければ計画が進まないんだよ」



アーウェルンクスと悠長に話す。

あの町で戦っておよそ半年。月一くらいの頻度で戦いに来っていて、最早顔馴染みである。

「今回はかりは形振り構ってられない。これ以上邪魔されると面倒だからね」

そう言って、十人近い人形達の一人がアーティファクトの様なものを出す。

何か詠唱の様なものを紡いだ後、景色が変わる。

「空間に作用する魔法……いや、アーティファクトか」

「ここなら全力が出せる。周りへの被害を考えなくていいだろうしね」

魔力が高まり、人形達は一斉に散る。

主たる造物主から調整され、より強化された人形達は『紅き翼』  
ライフメイカー  
を持ってしても倒しきる事は出来ず、その数は総勢で十七。

そのうちの九体がこの場にいる。

仮に戦闘を行ったのが『紅き翼』だとしても、これら全員の相戦力で戦えば無事では済まない。

にもかかわらず、だ。

「どうした、そんなものか？」

フィアンマは余裕で攻撃を防ぎ、攻撃し、格の違いを見せつける。

聖人とは、その身に宿す圧倒的な量のテレズマにより腕力や脚力、五感などの身体機能が大幅に強化されており、簡単に音速を超えるのだ。それを更に魔術で強化すればどうなるかなど、想像に難くない。

更には、次々と放たれる魔術。その種類は多種多様。

十字教に限らず、北欧、日本、欧州等の神話を使った魔術。

シンボリックウエポン  
象徴武器を使った攻撃など、数は幾らでもある。

炎が放たればより強力な炎で飲み込み、それが水でも同じ事。

地力が全く違う。片や実力的には世界最強クラスの『魔法使い』の作り出した人形。片や右腕を振るうだけで星を消し飛ばせる怪物。

「相変わらず化け物だね」

巨大な石柱を詠唱によって呼び出し、ぶつける。

確実に殺しに来ている一撃だ。人間への殺しはできうる限り避けるようにと設定されているにも関わらず。

だが、その中でも感じる違和感。

（……この結界、外との関係を完全に断絶するのか）

アスナに渡した防御用のブレスレットやネックレスからの魔力を感じられない。何か有事の際、フィアンマを転移させる事が出来るようにしておいたものが機能していない。

ならば、可能性は一つ。

（俺のいない間にアスナを連れて行くつもりか）

元々フィアンマは人数を完全に把握してはいない。当然だ、全員で戦う訳が無い。他にもアーウェルンクス達はやる事があるのだから。他にいないとも限らない。

故に、行動は速い。

影の倉庫より取りだすのは一振りの太刀。千年ほど前、とある刀匠が作り上げた代物。

千年と言う期間、そして強烈な魔力は刀身を露わにするだけで脆弱な結界を破る事が出来る。

『太刀』という言葉の語源は知っているだろうか。

太刀、と言う物は、元は『断つ』という言葉から来ている。

そして、その意味を最大限にまで引き出し、最早概念とまで化したその太刀を『結界の中で』振るえはどうなるかなど、想像に難くない。

音も無く鞘から刀身を剥き出しにし、構える。

少なくともそれに耐えられるだけの力を、このアーティファクトは持っていたらしい。

「……また新しい武器かい？ 一体どれだけ持っているのやら」

「安心しろ、コレはお前等を斬るものじゃない。ここを斬る物だ」

ザン！！ と音がした。

『神の如き者』<sup>ミカエル</sup>の右手には世界最強の武器が宿っていたと言う。

そして、そのフィアンマが対応する天使の『天使の力』<sup>テレスマ</sup>を壊れない程度に込め、振るった。

結界は容易く切り裂かれ、アーティファクトを破壊する。

景色が変わり、元居た森が周りにある。

そして、感じる魔力。すぐさまアスナの元へと転移した。

「遅かったな、魔術師」

其処に居たのは、造物主。ライフメイカー 黒いフードをかぶり、フィアンマを見ている。その手の中には気絶しているアスナ。

「随分と舐めた真似をするじゃないか、魔法使い」

周りには瓦礫の山。屋敷は半壊し、ルーシーは倒れている。

造物主の周りには四体の人形。そして、合流した九体の人形。

アスナに身に着けさせていたブレスレットやネックレスが壊れている。

これらはフィアンマが作ったものだ、生半可な攻撃では傷一つ付かないほどの代物を、造物主は破壊している。

「相当に強固なものだった。かなりの時間がたっている筈だが、漸く壊し終わったところだからな」

短い時間を感じるが、フィアンマ達が戦闘を初めておよそ三十分は経っている。

逆に言えば、フィアンマの防壁を三十分で破壊できると言う事。その辺の魔術師や魔法使いでは、ほぼ傷さえ付けられない防壁を、だ。

「ここで君は倒させて貰う」

「自慢のご主人様がいらっしゃるって、調子に乗るなよ。人形風情が」

フィアンマの右肩から現れた異形の第三の腕が、その身に力を溜める。

自動的に出力が調整される以上、『溜め』という行為には何の意味も無い。だが、あえてそれをする。

このまま攻撃すれば、アスナまで巻き込む可能性がある。

「ヴィシュ・タル リ・シユタル ヴァンゲイト 契約により我に従え 奈落の王 地割り来れ 千丈舐め尽くす 灼熱の奔流 滾れ 進れ 赫灼たる亡びの地神 『引き裂く大地』」

詠唱など耳に入らない。フィアンマの目に入っているのは造物主とアスナのみ。

滾る溶岩は地を引き裂き、その姿をあらわにする。

「邪魔だ」

唯一言。それだけを言って、右腕を振るう。

咄嗟に『危険性』を感じてアーウェルンクスの前に五体の人形達

が出て、それぞれが使える最大呪文をぶつける。

初めから勝負にならなかった。

魔法を容易く飲み込み、障壁を最大展開させた人形たちでさえ吹き飛ばす。アーウェルンクスの前にいた五体に至っては完全に消し飛ばされている。

「……やはり、脅威だな」

それだけを呟いて、造物主は『扉<sup>ゲート</sup>』の魔法で移動しようとする。

「逃がすと思っているのか？」

トン、と数十メートルを一步で詰める。そのまま右手をのばし、アスナを奪い取るうとする。

だが、横からの攻撃と造物主が後ろへ飛び去った事で避けられる。

「『奈落の業火』！」

爆炎がフィアンマを包み、更に他の人形達が詠唱を始める。

雷撃、爆炎、影槍、氷結。何度も見た攻撃だ。

その間に創造主は転移し、アーウェルンクス達も転移を始めた。

攻撃など、右腕を一度振るえば全て消せる。追撃が何度も成され、時間を稼がれる。

アーウェルンクスに続いて、人形達も転移して行く。

フィアンマは追う術が無い。魔法が使えないのだ、追うにしても追跡が出来ない。

だが、容易く逃がす筈も無く。右腕を振るって逃げ遅れた人形達を消し飛ばす。

手応えからして、恐らく三体。

葬った数は大凡八体。奴ら全員の数を知って入れば、過半数以下だと分かる。

半壊した屋敷と、右腕を振るった所為で抉れた地形。ルーシーは恐らく造物主と戦闘をしたのだろう、半壊した屋敷で倒れている。

「そうか、そうか……ふざけやがって、クソ野郎が」

怒りに顔が歪む。

油断していた。慢心していた。傷こそないが、そんなのは些細なことだ。

心に隙があつたから、自身の力に慢心を抱いていたから。アスナは攫われた。

「良いだろう。造物主」  
ライフメイカー

故に、最早力を抑える気などない。完全な力を持って、殲滅する。



「貴様がそのつもりなら、俺様は 全力で殺す」

その気になれば惑星さえも滅ぼせる力を持った男が、今 その  
力を振るう。

## 第十話 誘拐（まんしん）（後書き）

次回、最終決戦。そう遅くならないと思います。

感想など頂けると嬉しいです。

## 第十一話 決戦（ぎゃくさつ）（前書き）

今までの中で最長です。何故ここまで長くなった……。

悪乗りした感がありますが、気にしないでください。

ついでで何ですが、タイトルから（仮）外しました。リメイクと言  
うかも別ストーリーなのでちょっと紹介分も書き換えました。

## 第十一話 決戦（ぎゃくさつ）

晴天の空。太陽が地表を照らす。

世界最古の都、王都オスティア空中王宮最奥部『墓守り人の宮殿』  
。

それを見ているのは『紅き翼』の五人。

帝国・連合アリアドネー混合部隊の準備が準備され、『コスモ・エンテ完全なる  
レケイア世界』との戦争が始まるうとしていた。

「不気味なくらい静かだな、奴ら」

「なめてんだろ、悪の組織なんてそんなもんだ」

余裕があるのか、軽口をたたき合う二人。

「それにしても……あの野郎、姫子ちゃん攫われやがったな。俺達より強いくせして」

「幾ら強くても、個人ですからね……数の暴力では、恐らく勝てなかったのでしょう」

二度相対し、勝つ事さえ出来るか分からないとまでの威圧感を浴びたあの男が、数の暴力でどうにかなると思えない。ナギはそう考えるが、頭を振ってそれを頭から追いだす。

今考えてもしようがない。目の前の事に全力を尽くす。それだけ。

「ナギ殿！ 帝国・連合アリアドネー混合部隊の準備完了しました」

「おう」

アリアドネー総長、セラスが報告をしに現れる。

それでも、混合部隊のおよそ二倍以上の数の悪魔がいる。まともに戦えば甚大な被害は免れない。

「あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ、俺達が本丸に突入できる。頼んだぜ」

「ハッ！ ……それで、あのナギ殿……」

「ん？」

「ササ、サインをお願いできないでしょうか？」

顔を赤くしながら、ペンと色紙を渡すセラス。

「おお？ ああ、いいぜ？ それくらい」

「そ、尊敬していました！」

緊張感の無い会話。本来なら処罰されてもおかしく無い行為だが、それを咎める者などいない。

「連合の正規軍の説得は間に合わん。帝国の皇女とタカミチ君も同じだろう。決戦を遅らせることはできないのか？」

紅き翼の面々はガトウからの連絡を受けるが、もう時間がない。

此処にいるメンバーだけで決行するしかないのであろつことを全員分かつている。

「ガトウ、それは最早不可能です」

「既にタイムリミットだ」

「ええ、彼らはもう始めています……『世界を無に帰す儀式』を。世界の鍵、『黄昏の姫御子』は今、彼等の手にあるのです」

『彼』の事を知っている者は思い浮かべただろう。あの少女を守っていた男を。

紅き翼。果てはアーウェルunks達さえ軽くあしらう程の人物。

その人物が現れたのは唐突だった。

赤い髪をなびかせ、ポケットに手を入れて、紅き翼の前に現れる。

「デメエ……どういうつもりだ？ 姫子ちゃんを攫われるなんて！」

「ああ、俺様としても油断していたよ。あのクソ野郎。ふざけた真似をしてくれる」

怒りにゆがんだ顔。その憎悪は矛先を向けられていない近くにいた戦乙女達でさえ戦慄した。

紅き翼さえ、その憎悪には冷や汗が流れたのだ。無理も無いだろう。

左手に持っていたのは、一枚の紙。特殊な術で通信用の霊装と化している。

「準備は？」

『いつでも可能です』

「よし、出撃だ。大天使『<sup>ガブリエル</sup>神の力』。全て薙ぎ払え」

瞬間、空が反転する。

晴天で太陽が照っていた筈の空には満月が浮かび、空は黒く塗りつぶした様な夜へと変貌する。そして、その中を飛ぶ一つの影。

「i s a m t 殲 g a i o d j i a 滅 m c n z k a」

この場にいた全員がノイズ交じりの音を聞き、高速で移動するその影を見る。

「な、何だあれは……」

誰かがそう呟く。

二メートル前後の身長。女性的な体型。のっぺりした顔と背中にある氷の翼。水の象徴にして青を司り、月の守護者にして後方を加護する者。

旧約においては墮落都市ゴモラを火の矢の雨で焼き払い、新約においては聖母に神の子の受胎を告知した者。

常に神の左手に侍る双翼の大天使。『ガブリエル神の力』

天使。

『テレズマ天使の力』として扱う事は魔術師として基本とも言える事だ。だが、それはほんの一部、部分的な物に過ぎない。

その大本　すなわち天使そのものを目撃するなど、人生に一度有るか無いかと言っていていいほどの事だ。通常ならまずあり得ない。戦争などと言うレベルでは無い。

子供の喧嘩に爆撃機を持ちだす様なものだ。比較対象にすらならない力の差。

しかも、『大天使』。天使の中でも別格。新旧両世界で喰らいつく事の出来る人間が両手の数だけいるかどうかも怪しい。

それほどの化け物。

偶像を用いた術式で強制的に引き摺りおろした天使。だが、その操作はフィアンマでは無く、ルーシーが行っている。

怪我が完治していないのだ。そもそもフィアンマが戦わせる事すらさせようとはしなかった。

それでも、力になりたいと言ったルーシーの為に用意した『兵器』



。

全人類相手に喧嘩さえ売る事のできる怪物の手綱を任せたのだ。

故に、その力は全力の半分に届かない程度。だが、それだけでも世界を滅ぼすには十分過ぎる程の力。

夜となった天空に浮かぶ術式、アストロインハンド『天体制御』によって形作られるその術の名は

『しんりく神戮』

かつて、神の怒りに触れ、墮落都市ソドムとゴモラを一夜で消滅させたという伝説がある。そして、それを再現した魔術。

天体と言う強大で膨大な力を持つスクリーンに星と言う点を配置し、それらを線で結ぶ事によって発動させる。

だが、それは天体という物を使う以上、時と場所を限定される。

しかし、天体そのものを操作し、自身に有利な夜を強引に作り出し、この星座を配置した。

全力を出せば星の半分が焦土になるほどの威力。それを、場所と威力を限定させる事で即時発動を可能とする。

端的に言ってしまうば。

この天使は、世界を終わらせるだけの力が存在する。

例え相手が一騎当千の化け物だろうと、世界と戦える怪物だろうと皆等しく虐殺されるだろう。

魔法使い、魔術師。双方の最大戦力を尽くしたとして。

大天使に勝てる人間など、『右方のフィアンマ』を除いてしまえば存在しない。

仮にアレイスタークロウリーが生き残っていれば、勝つ事は出来るだろう。だが、死んだ人間を頼った所でどうにもならない。

新世界にどれだけの兵力、戦力があつた所で。

鬼神兵は一撃で薙ぎ払われるだろう。戦艦は一撃で沈められるだろう。魔法使いは虐殺されるだろう。魔術師は逃げる事さえできないだろう。

人類としての意味で『終わらせる』事ができる存在なのだ。

それほどの存在を間近で見て、とある者は右手で十字を切り、とある者はその姿に感嘆した。敬虔な者であれば涙しても恥じる事の無い状況だ。

氷の翼は、一度振るわれるだけで数百体はいるであろう悪魔達を引き裂き、次々と葬って行く。

「どついう事だ……アレは、一体なんなんだよ……」

ナギの呟きに答える物はいない。

戦艦など不要。戦力など不要。

唯神ガブリエルの力が力を振るえば、それだけで『完全なる世界コスモエンテレケイア』はほぼ壊滅する。

帝国・連合アリアドネー混合部隊は戦慄していた。自分たちが命を掛けて戦うべき相手が、いとも簡単に引き裂かれている状況を見て。

紅き翼は放心していた。異常で異質で異形で異端。圧倒的な力の前に、戦闘狂のナギとラカンさえもが凍りついていた。

ルーシーは唯、フィアンマの用意した神殿で神ガブリエルの力を操作していた。そして、同時に親でもあるフィアンマに戦慄さえ感じていた。

『神の力ガブリエル』は世界を終わら去る事が出来る。それほどの化け物を、フィアンマは『悪魔を掃除する為』だけに呼び出したのだから

『天使の力テレスマ』を操るのは現在の西洋魔術では珍しい事ではなく、普遍的な事。

だが、圧倒的にレベルが違う。ここまでの規模となるとまずあり得ない。技術の問題もそうだが、全人類を敵に回して完全に虐殺できる程の力をこつとも簡単に取り出す事。それ自体が異常だった。

フィアンマは唯見据える。自身の所為で攫われたアスナを助け出

す。その為だけに一步間違えば世界を滅ぼしかねない化け物を放った。

悪魔達は見ると見るうちに減って行く。

氷の翼で、空から降り注ぐ火の矢で。

後から後からどんどん湧いているが、関係無い。増えるよりも、減る方が圧倒的に速い。

フィアンマは右手をかざす。目標は『墓守り人の宮殿』。

そして、小さく口を動かす。

直後、音が消え、莫大な閃光が迸った

それは『墓守り人の宮殿』までの間に居る悪魔達を根こそぎ吹き飛ばし、消滅させ、宮殿の壁を破壊した。

フィアンマの方には不格好な第三の腕が出現している。

トン、と一步だけ踏み出す。

距離など関係無い。間に床が無くても、空中その物でも、間に障害が無ければ仮に一万キロメートル離れていたとしても、フィアンマは変わらず一步踏み出すだけで距離を詰めるだろう。

宮殿の内部には、九体の人形達がいた。

「……外のアレも君の仕業かい？ 全く、厄介な事をしてくれた」

「知った事じゃ無いな。貴様らを潰すのは俺様一人でも十分過ぎるが、面倒なんだよ」

其処に、以前と同じような雰囲気は無い。

殺気、悪意、そういった負の感情をぶつけている。

「君には随分とやられたからね。決着をつけよう」

「抜かせ。大して力を使つて無かつた俺様相手に遊ばれてる程度の人形が、今更相手になるとでも思っているのか？」

ドン！！と見えざる何かがフィアンマを中心に炸裂する。

それは殺気だ。人形であり、莫大な殺気を浴びる事に慣れているアーウェルンクス達さえ、肌を刺す様な刺激を感じるほどの重圧。

そして、同時に第三の腕が光を宿す。

ゴバツ！！！！と莫大な力がアーウェルンクス達を襲う。

咄嗟に幾重にも防御の魔法を使い、ダメージを軽減する。アスナがどこにいるか分からない以上、完全に力を振るう事は出来ない。

故に、一撃を喰らっても生き残った。

半壊した通路の中、アーウェルンクス達は起きあがる。ダメージこそ追っているものの、その数は減っていない。

「げ、ほっ……全く、規格外だ」

「アスナはどこだ。答えろ」

「言う訳には、いかないね」

未だ睨みつける。

不快感を感じたフィアンマは容赦なく右腕を振るおうとした。探すなら別に方法がある。

ゴガンツ!!

爆音を立てながら、『紅き翼』の面々が現れる。

「見つけたぜ、テメエ!」

「紅き翼……また厄介なのが来たね……」

「ふん、ボロボロのお前等の相手には丁度いいだろう。雑魚は雑魚同士で潰しあえ」

フィアンマは右手を振り、壁を破壊して移動する。

黒いローブを纏い、造物主は術式の準備を終える。

「黄昏の姫御子……我が末裔よ。その本来の役割、果たして貰おう」  
造物主の目の前にはアスナがいる。

その術式は世界を終わらせる魔法。魔法世界を『完全なる世界』へと変える物。

「……速かったな、魔術師」

「随分とまあいろいろ仕掛けていたようだが、俺様の前じゃ全部同じだ」

フィアンマの後ろには、幾重にも仕掛けられた罠、防壁。

「全く持って、随分と舐めた真似をしてくれた」

殺気をぶつけながら右腕を構える。

ゴッ！！ と光の爆発が飛んだ。

真正面からの強力無比な攻撃は造物主を吹き飛ばし、アスナから距離を取る。

巻き込む訳にはいかない。力が強力すぎるが故に、近くにいれば巻き込んでしまう。

「……ふ、やはり強いな……人形達アレラが危惧するのも分かると言う物

だ」

「お手製の人形なら紅き翼共が相手してやってる頃だろうよ」

「それをいとも簡単にあしらうお前の強さ。やはり殺すには惜しい」

ゴッ！！ という爆音が響く。

「……ふざけた事を抜かすなよ。俺様よりお前の方が強いとも思っているのか？ たかがこの程度の『幻想』を作りだしたからと」

真正面からの手加減した攻撃を、完全とまではいかないが、防ぐ。それだけで造物主の力が計れる。

「この世界を『幻想』と知ってなお、戦いを挑むか」

「俺様に関係無いからな」

唯、告げる。

魔術師とは本来こういう物だ。

他者の為では無く、自身の為動く。

それがたとえ、世界を滅ぼす事になろうとも、人類が破滅しようとも、自身の目的の為なら、どんな被害も厭わない。

造物主の後ろにいくつもの魔法陣が浮かび上がる。



それらから放たれる攻撃を消し飛ばし、フィアンマは歩を進める。まるでそれが死へのカウントダウンとでもいう様に。

「私の様な神の力を持ち得ておきながら、何故救おうと思わない！？」

「知ったことか。やりたいなら勝手にやれ。最も、俺様の癪に障るようならば容赦なく殺すがな」

ゴバツ！！ と爆発が起こる。

二つの攻撃がぶつかり合い、余波で建物が壊れかけている

ヒュン、と造物主は移動し、何処かを向く。

黒い光線の様な者はフィアンマでは無く、アーウェルンクスとナギを貫いた。

そして、そのまま強烈な攻撃を放ち、戦闘不能へと追い込む。

「余所見をするか。随分と余裕だな」

爆発的な閃光が造物主を包み、吹き飛ばす。

「……チツ、逃げ足だけは速い野郎だ」

苛立ったように呟くフィアンマ。既に造物主はいない。

「デメエ、何してやがる……」

声のした方を見れば、満身創痍となった紅き翼がいた。

「無様だな。その程度の実力で良く生き残れたものだ」

それだけを告げ、フィアンマは造物主を追う。

ゴッ！！と爆発が起きる。

それは強烈な一撃。まともに受ければ肉体など跡かたも残らない。

「チヨロチヨロ逃げ回りやがって。其処まで俺様を苛立たせたいか？」

フィアンマの体には傷一つない。

対して、造物主の体には傷がいくつもできている。

この時点で、既に実力の差が表れているといっても良いだろう。

「は、ははははははは！ 私を倒すか人間。それもよからう、私を倒し英雄となれ！ 羊達の慰めともなろう！ だが、ゆめ忘れるな！」

造物主の後ろには膨大な魔法陣が所狭しと浮かび上がる。

「漸く本気か？ その程度で勝てるなどと思うなよ」

そして、その魔法陣から膨大な魔力を使った攻撃が放たれる。

並みの魔法使い・魔術師ならば確実に死に至る攻撃を。

それでも、フィアンマには届かない。

「全てを満たす解は無い！ いずれ彼らにも絶望の帳が下りる。貴様も例外ではない！ 神の力を手に入れた私に出来ない事が、貴様に出来るのか！？」

黒い光線の様な攻撃を一撃で吹き飛ばし、造物主を殴り飛ばす。

右腕には膨大な力が宿り、光線ごと造物主を飲み込む。

「随分と上から目線で言うんだな。その程度の事しかできず、勝手に諦めて神の名を騙る雑魚が」

実力で言うならば、アレイスターの方が余程強い。

「方法なら幾らでもある。お前が探すのを諦めたただけだな。お前如きが、神の名を騙るなよ」

神。

ソレは世界を滅ぼす天使を手足として使う存在。

事実として神に会い、その莫大な力の一端に触れたフィアンマだからこそ言える事。

造物主では、神の名を語る事などできない。

唯、幻想を生み出しただけの存在だ。

「貴様もいずれ私の語る『救い』こそが唯一の次善策だと知るだろう！」

魔法陣から現れる最大規模の攻撃。まともに当たればまず即死は免れられないだろう。

だが、その程度。

その気になれば星ひとつ塵にする莫大な力を持った右腕を振るい、その攻撃は造物主を飲み込んだ。

「舐めるな。信じる者は救われる。この世界が生きる事を諦めないなら、俺様が救ってやる」

トン、と降りる。

瞬間、壁が破壊され、ナギとゼクトが現れた。

「デメエ、造物主はどこだ!？」

「俺様が倒したさ。あの程度」

「何!？ アレを倒すとは……ウツ!？」

黒いローブがゼクトを覆い、突如として魔法を放つ。

後ろからの攻撃に対応出来なかったナギはそのまま倒れ、反応出

来たフィアンマは相殺する。

「……武の英雄に未来を造る事はできぬ。貴様達には何も変えられまいよ」

魔力の奔流で周りが白くなり、外が見えない状態になった。いや、外から見えない状態。と言った方が正解かもしれない。

「だが果たして……自らに問うが良い。人とは身を捨ててまで救うに足るものか？」

造物主の問いには答えない。

「……人間は度し難い。英雄よ、貴様達も我が2600年の絶望を  
知れ。さらばだ……」

造物主に乗つ取られたのである。うゼクトは、そのまま煙の様に消えかけ、フィアンマが放つた光の奔流に飲み込まれた。

「お師匠……」

ナギの弦きが聞こえた。

「師匠オオオオオーッ」

その声を聞きながら、フィアンマはアスナを助けに向かう。

コッソ、コッソ。

足音が響く。

最初に造物主と相対した場所。其処にアスナはいた。

「アスナ。迎えに来たぞ」

「……フィアンマ……？」

周りには白い光が回っている。恐らく世界を終わらせる魔法が発動したのだろう。

外を見ればわかる。いくつもの艦隊が『墓守り人の宮殿』を取り囲み、大規模反転術式を展開させている。

だが、このまま行くならアスナは封印されてしまう。それはフィアンマの望むところでは無い。

故に、倉庫から取り出した人形を使う。

アスナそつくりのその人形は、一時的にアスナの力を奪って、本体の代わりに封印されるだろう。

指先を少し切り、血をたらし、『魔法無効化能力』を人形へと移す。この時の為の研究だ。とはいえ、時間制限は存在するのだが。

大凡半年間。この為に研究を続けて来た。

ギリシア神話には、ピュグマリオンという男の掘った人形にアフロディーテという神が生命を与えた、と言う神話がある。それを元にした術式。

擬似的な生命体を作りだし、能力を封印させる。これならば、まず気付かれる事は無い。

大規模反転術式によって、人形は氷の様なものの中に閉じ込められて行く。

本人は転移魔術によってルーシーのいる神殿へと移動できただろう。

「おい、どうすんだよお前。あの姫さんに助けられちゃったが」

ほぼ虫の息のナギが現れる。

氷の中に封印された偽物のアスナを見て、一度溜息をついた後、近くの柱に寄りかかる。

「そうだな……離れた方がいいぞ。お前じゃ死ぬ……ああ、俺様は英雄とやらに興味は無い。お前等に奴らを倒したという『結果』をやるう」

「何を」

ゴッ！ とナギは蹴り飛ばされ、百メートル近く離れる。

「ゲホッ、何しやが」

瞬間、火の矢がフィアンマに降り注ぐ。

ソレは外で未だに悪魔達を掃討している神ガブリエルの力による『一掃』だ。

限定された範囲の爆撃が『墓守り人の宮殿』を削り取る。だが、反転術式によって封印されたアスナには、攻撃が及ばなかった。

ナギが次に目を開けた時、フィアンマは既に消えていた。

誤解しないよう言っておく。

何も、フィアンマは世界を終わらせるつもりで大天使を召喚した訳では無い。

小さい事件など、大きい事件に埋もれる物だ。

昼から夜へ変わる事。天空に浮かぶ術式とそれによる爆撃の様な攻撃。そして、極めつけには紅き翼と完全なる世界の死闘。



これだけの事があっていれば、フィアンマの事など誰も記憶に残らない。その行為を含めて。

当然ながら一部を除いて、の話だが。

アスナを助け、MM元老院から追手がかかる事を面倒に感じたフィアンマは、アスナの身代わりを置く事にした。ソレに気付くのは五年後か十年後か。

そして、神の力を還し、ルーシーとアスナと共に、旧世界へと渡った。  
ガブリエル

## 第十一話 決戦（ぎゃくさつ）（後書き）

ガブリエル登場。 な話。

こいつだけでも完全なる世界潰せた気がします。ソレやるとアスナまで巻き込まれるので無し。

フィアソマがああ程度で死ぬはずが無い、と紅き翼は分かっているかも知れませんが、誰にも言わないでしょうね。

紅き翼と関係が無いとあっという間に話が進むんですね。数年後、とか飛ばしていいすかね？

感想を頂けると嬉しいです。

## 第十二話 中間（つなぎ）（前書き）

遅れてすみません。いろいろ調べてたら遅くなりまして……

その割に短いです。繋ぎの話です。

## 第十二話 中間（つなぎ）

「ハハハ、見てみるルーシー。オスティアが崩落だとさ。あんな方法でしか止められないんだ、仕方ないと言えば仕方ないが」

新世界に存在する魔術組織からオスティアに関する情報が、ファツクスのように送られてくる。

多くの人々を救う。素晴らしいね、全く。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい、とはアリカ姫の事だろうな。いや、女王が。

面白そうに口元を緩め、それらの資料に目を通す。

「しかし、思った通りだな。魔法消失現象の中でも『天使の力』<sup>テレスマ</sup>を使用した魔術は消されない」

「それは、オスティアの崩落で実験していた事なの？」

「そうだ。アスナ相手に『天使の力』<sup>テレスマ</sup>を使う様な魔術は使えん。下手をすれば怪我をさせてしまうからな」

特に何かに使える訳でも無い。アスナを相手取るときに使えるだけだ。そんな物は意味が無いだろうけど。

どの道、『聖なる右』を使えば終わるのだから。

「だがまあ、知っておいて損は無いだろう。いつか役に立つときが来るやもしれん」

ククク、と笑いをこらえながら呟く。

『英雄』となったナギ・スプリングフィールド。まあ俺が役目奪ったとはいえ、奴も『造物主』に勝てたのは事実だろうな。

しかし、あのクソ野郎。フィリウス・ゼクトの体を奪って逃げたか。どうやら奴専用にあ殺す為の術式を作り上げる必要性があるらしい。イラつかせる。

ルーシーが紅茶を運び、俺の前においた。

それを飲みながら、今後の事を考える。

アスナは別室で寝ている。これから世界をゆっくり見て回るのもいい。アスナに外を見せてやりたいからな。

ついでに俺の術式の開発。アイデアが無い。

と、言う訳で、数年世界を見て回った。

イギリスやフランス、ロシアやドイツなどのヨーロッパを中心に二

年ほど。

魔術を使うには前提として『宗教防壁』が必要だ。だからアスナには十字教の信徒となつて貰つた。

信仰心があればいい。俺はその辺はあまり気にして無いけどな。

そして、オスティアが崩落して二年が経つ。つまり、アリカ女王の処刑。原作でも中々に名シーンだったので興味本位で見に行く事にした。

空を飛ぶなんて自殺行為はしない。魔術師であれば当然なんだが、魔法使いはその辺知らないらしい。

まあ、魔法使いが何しようと思術師あんまり気にしないからな。

「空を飛べば落とされる。イカロスの民かつての」

自分の目的果たす為に戦う事はあるだろうけど、死んだら伝えれないなあ。

「落とされる。って、第十位の『聖人』ペテロの伝説使つた魔術？」

「お、よく知ってるな。アスナ。勉強したか」

頭を撫でて褒める。嬉しそうに顔を綻ばせるアスナ。可愛いなあ、ホント。言葉の大分流暢になつてきたし。

五キロキロ程度なら見える。魔術には遠隔監視の出来るモノもあるんだよ。例えば土御門が使つた『理派四陣』とか。あいつは三キ

口程度しか見えなかったが、魔道図書館を甘く見ちゃいけない。

そんな訳で現在鑑賞中。

『……これより戦犯アリカ・アナルキア・エンテオフュシアの公開処刑を行うー！』

元老院の一人が罪状を読み上げている。長つたらしく、飽きる。ここで戦艦の一つや二つ落としたら面白そうだな。

「駄目だよ、お父様」

……考えている事が顔に出ていたらしい。ルーシーにバレた。

つか思ったけど、魔力も気も使えない『ケルベラス溪谷』。多分ここでも『天使の力<sup>テレスマ</sup>』は使えるんだろうなあ。実験してみるか？

長く生きてると暇つぶしになる様なの大抵やってしまってるからな。小さい事でもやってみたくなる。時間はあるんだしって事で。

と、そんな事を思ってる間にアリカ姫が落とされた。

落ちて数分。アレはラカンだろう。元老院の頭を掴んで何か言っている。

『録画はここで終わりだ。で、今からここで起こることは『なかった』ことになる。わかるな？』

カメラが止まった事を確認して、『紅き翼』の面々が現れ、暴れ始

めた。

よくよく思えば暴れる必要無いんじゃないの？ アリカ女王助けたら元老院に目をつけられるし、犯罪者になるだろう。だったらこのまま雲隠れした方が楽だとは思っけどな。

頭が悪いのか、感情で行動しているのか。いや、この手を選んでるあたり、感情で行動してる訳じゃないみたいだが……隠れるだけなら方法は幾らでもあるだろう。

せめて一泡。ってんならMM元老院に直に『千の雷』でもブチ込んでやればいいのに。

ナギがアリカ（もう女王は要らないだろう。と言っかメンドイ）を連れて走り回る。……アスナの血筋なんだよな、アリカって。

そう考えるとちよつとおせっかいを焼きたくなる。と言う理由にして速攻で魔術の準備。

ギリシア神話に出てくる主神たる全能の存在、ゼウスをモチーフにした術式。風系統の『天使の力』<sup>テレスマ</sup>を使用したモノだ。

天候、特に雷を司る天空神でもあり、オリュンポス十二神をはじめとする神々の王。それ以外の気象を操作する神としても知られている。

それを利用した魔術は空に雷雲が現れ、天からの雷撃を呼び、魔獣の蠢く『ケルベラス溪谷』へとその一撃を落とし、轟音を鳴らす。

威力は相当。少なくとも対軍レベル。



「ナギ達に当たらない様になっていたから大丈夫だろう」

呟きながら『理派四陣』を通して『ケルベラス渓谷』を見る。

二人とも相当驚いていたようだが、目立った外傷は無い。周りの魔獣が焼け焦げてるが。

「……どうして助けたの？」

アスナが不思議そうに聞いてくる。俺の性格が分かってきたんだろう。普段ならこんなことしないしな。

「そうだな……アスナの血筋だからかな」

本音は最近作ったこの魔術を試したかっただけ。『あの野郎』造物主をブチ殺そうと準備していたが、やはり死を司る神の術式でも構成すべきかな。

バロールの魔眼とか作ってみるか。

こいつは威力はあるが、それだけ。広範囲に使うにしても準備がいる。俺以外には確実に月単位で準備期間があるだろう。調整も難しいし。

まあ俺がやったとばれた訳でも無いだろうし、あのシーンを見てさっさと消える事にしよう。

五分後。

例のナギが告白というシーンを見て、アスナに「ケツコンって何？」とか聞かれたりしながら、用意していた陣とか霊装とか片付けて帰る事にした。

アスナが知るにはまだ早い……いや、年齢的には遅いのか？ でもそれ言ったら俺もだしなあ。

結婚なんてするつもり皆無だけでも。そもそも相手がいない。

寿命的に。俺ほぼ無限だしな。

というか、本格的にやる事無くなったな。どうしようか。

魔法世界だとアスナの事気付く奴がいるかもしれないんだよな。封印されてるって知ってるなら見間違いで済むだろうけど、念には念をとって感じで調べられると面倒。

「何処か行きたい所ある？」

「特に無い」

「無いわ」

……なら、一旦バチカンに戻るか。黒の教団最奥の暗部『神の右席』のリーダーが暇潰しで世界旅行って何かアレだ。

仕事なんて無いし、大抵の事は他の奴らに任せればいいだろうけど。

「そして久しぶりのバチカン。ってか」

「何を言っているんだ？ フィアンマ」

出迎えたのは『後方のアックア』の席にしている女。本名とか知らん。

「久しぶり、アックア」

「お、アスナ久しぶりだな。いつも可愛いなお前は」

ギュッと抱きしめながら愛でている。可愛いモノ趣味全開だなコイツ。

実力は高い筈なんだが、百合疑惑が掛かってる。特に誰も気にしないけどな。コイツ以外男だし。

「テッラとヴェントは？」

「二人ともどっか行っただわ。ここ最近特に何も起こって無いから…  
…ああ、テッラが面白い魔術結社がいるって言ってたわね。資料は

其処」

「面白い魔術結社？」

一体何だ？　と思いつつ資料に目を通す。

……なるほど、確かに面白いな。

「魔法使いと魔術師が組んだ結社か。目的があつたか、利益が一致したか。今まで無かつた集団ではあるな」

元々魔法使いと魔術師では使う魔力がちがつ。簡単に言うとフォーマツトが別だからだ。

ソレを合わせる事にかなりの労力を使う上、それをやる位なら普通にどちらかを使った方が速いと言う事もあり、今まで存在してこなかった。

恐らく、魔法世界での戦争が原因だろうな。

戦力として、魔法使いと魔術師の利点を合わせたモノ。それを創りだそうとしたんだろう。

「……ふむ、経験知稼ぎには丁度いいかもな。アスナ、行くぞ」

「え、アスナも連れて行くの？」

「オマエが愛でる為にいる訳じゃないぞ」

アスナはトテトテと歩いて俺の傍に来て手を繋ぐ。ルーシーは俺が

読んでいた資料に目を通している。

「じゃ、ちょっと行ってくる」

「いや、もう『ネセサリウス必要悪の教会』が動いてるんだけど」

「いいんだよ、どうせ暇潰しだしな。俺様達の方が早く見つけれ  
るかもしれないだろう」

「それは良いけど、どうやってアンタ達の事を説明する訳？ 私達  
一応表にはほとんど知られていない暗部よ？」

「誤魔化す」

「誤魔化すってちょっと待っ」

最後まで聞かずに部屋を出る。あのレズ女の近くにいるとアスナの  
教育に悪い。

魔術結社の名前は『四精霊の旅立ち』。少しは俺達の暇つぶしにな  
ってくれよ。後十八年位暇なんだからな。

## 第十二話 中間（つなぎ）（後書き）

次回はまた戦闘？ 魔術師同士の戦闘はアレキスター以外では初めてだった。

神話だとか調べるのがキツイ……何か使えそうな無いですかね？  
wikiで調べてはいるんですが、旨く探せない、という。

ちなみに質問ですが、魔術サイドだけクロスオーバーとかありますか？

神崎とか出してみたいので。

感想はいつでもお待ちしております。

### 第十三話 魔法魔術（まざるざじゅつ）（前書き）

短いですが、次回からは長くなる予定です。

クロスオーバー始めました（何

### 第十三話 魔法魔術（まざるざじゅつ）

魔術結社『四精霊の旅立ち』

精霊を魔術で操る事によって、魔法の様に始動キーや詠唱を短縮する事を目的とした戦闘特化の結社。

元は大分裂戦争の際、帝国が魔術師に魔法使いの力を解明させようとした事が最初だ。

魔法は精霊に対して、魔力と言う対価を払って魔法と言う奇跡を得る。その過程には、『詠唱』と言うモノが存在する。

当然、これは魔術師にも言える事だ。魔力を対価に奇跡を得る。

だが、魔術師は必ずしも詠唱が必要とは限らない。

必要になるのは陣だったり霊装だったりとまちまちだが、場合によっては詠唱は不必要となる。

帝国は、其処に目をつけた。

つまり、魔法を詠唱なしで使おうとしたのだ。

現在でも無詠唱魔法や対軍用の地雷式『戦術広域魔法陣』は存在する。だが、無詠唱はあくまで下位レベル。対軍用の『戦術広域魔法陣』はコスト的問題と準備時間の問題で突発的な戦闘に使えるものではない。



特に『紅き翼』の様な強力な力を持った英雄と呼ばれる連中と張り合おうとしたのだ。生半可じゃ駄目だと悟ったのだろう。

そして、帝国はその開発に力を入れていたが、今まで全く違う体系を取っていた為、そう簡単に行く筈も無く。

最低限で年単位は必要だと思われていた上に、開発し終わる前に戦争が終わってしまった。

だが、足がかりをつかんでいた魔術師と魔法使い達はそのまま研究を続け、成功した。

「と言うのが今回の連中のデータだな」

「よく覚えてるね、フィアンマ」

そりゃ俺は完全記憶能力者だし。忘れる事は無い。

帝国は帝国で追ってるらしいが、あまり進んでいないらしい。何に使うかもわからない。魔術師なら魔術名があるだろうし、目的があるんだろうけど。

戦闘に特化してる訳だし、傭兵とかやってるのか？

アリアドネー辺りだと学問の一つだしな、魔術。そっちに持って行って売るとかするとまた便利になるだろう。宗教と一緒に習わせているらしいが。

何せ、詠唱が要らないと言う事は詠唱が『出来ない』者でも魔法が使える事を示すからな。

別に其処は良いんだが、問題は連合が魔術師を敵視していると言  
う事。

魔法至上主義者ともいえる連中がいるからな。魔術師が魔法を使  
うのを良しとしない連中もいるらしい。

場所はニヤンドマ。ヘラス帝国の外側に位置していて、連合に比  
較的近い場所だ。ここに潜伏していると情報があつた。

「アスナはまだ魔術は旨く使えないだろうし、今回は俺やルーシー  
のをみて勉強かな」

「勉強？」

「そ、アスナは賢いからな。直ぐに使えるようになるさ」

元々魔術は誰でも使えるしな。魔力さえあれば。

「フィアンマと同じくらい使えるように、頑張る」

「そうか、アスナなら出来るさ」

相当な勉強が必要だけどな。基本知識さえあれば魔術は使えるも  
のだし。

「と、見えてきた。あれが報告にあつた『四精霊の旅立ち』のアジ  
トだな」

「どうするの？ お父様」

「ん、そうだな。とつと潰して知識を手に入れて、後で再現してみるか」

言っが速いか、掌に出現させた炎で扉をブチ破る。古い教会みたいな場所だ。

「誰だ!？」

怒号と悲鳴。さっきの一撃でやけどを負った奴もいるだろうな。

すると、相手の一人が出てきて一枚のカードを手にとって、こちらへ向ける。

「『雷の暴風』!」

お、本当に魔術で魔法を使ってやがる。成功してたのは本当らしいな。

見た感じ威力は普通の詠唱した奴と変わらない様だし、後で再現してみるか。面白そうだ。

取りあえず攻撃を風の楯で防ぎ、そのまま風で相手に砂をかける。地味に目に入ると痛い。

だが、そんな事の為に態々砂をかけた訳では無い。

『ザントメンヒェン』と呼ばれる妖精がいる。

ドイツの伝承、民話にでてくる小人、妖精の類。砂をかけられる

と眠ってしまうという。

それを利用し、一時的に眠らせる事が出来る訳だ。それでも時間制限はある。最大で三分。最短で二十秒。

「よく見ておけよ、アスナ。魔術はその意味を持たせられれば十分な効果を発揮する」

眠った奴から拘束していく。後で『ネセサリウス必要悪の教会』の連中に引き渡してやろう。

中に入ると、いきなり魔法の射手の雨霰。

全員、手に持っているのはカード。詠唱の意味をカードに書いたとかしたのか？ ルーン文字みたいなものだな。

アスナがいる手前、さつくり殺すという訳にもいかない。こういうとき、ヴェントの『天罰術式』が羨ましくなるね。戦闘の必要性が無い。

取りあえず適当に、先ほどと同じ様に眠らせて行く。

ちょっと広めの教会。まだ奥があるようだな。そう思い、奥のドアを開けた

「『千の雷』！！」

爆音。雷撃が迸り、雷鳴が轟く。対軍用殲滅魔法を放たれ、強力

な雷撃が俺の身を焼こうと迫る。

が、その適度でやられる様な実力じゃ無い。

とはいえ、至近距離からの不意打ち。良ければ後ろにいるアスナ達に当たるとなれば、『聖なる右』を使うしかない。

唯一度振るだけで雷撃をかき消し、敵の姿を見る。

「……ほう、なるほどな。面白い使い方をする」

「……っ！？ 何故、生きている！」

敵の女は俺が生きている事に驚いているらしい。ま、至近距離で広域殲滅魔法使って生き残れるなんて思わないだろう。

しかし、面白い。

『三位一体』の理論を使った方法か。自身と『天使の力』<sup>テレスマ</sup>を降ろす為の偶像、そして精霊を当てはめたらしい。

元々三位一体と言うのは、『三つ全てが違う様に見えて実は同じ』と言う事が本質だ。それを逆に利用して、三つ全てが同一だと認識を変換させたらしいな。

いふなれば、自身が『天使の力』<sup>テレスマ</sup>を宿した精霊となる様なモノだ。精霊そのものになるのだから、当然始動キーも詠唱も必要無い。

『天使の力』<sup>テレスマ</sup>を使用すれば、使える魔法は制限されるものの魔力を使用する事無く魔法を発動できる。

さっきの奴らはルーンの描かれたカードを使った方法。こいつは三位一体の理論を利用した方法。もしかすると、他にいくつかあるかもしれんな。

使えるようになっておいても、損は無いかもしれん。一度実験してみるか。

その前に、こいつを片付けるのが先だがな。さっきから何度も雷撃を飛ばしてウザい。

「クソッ、クソッ！ 何で、何で死なない！？」

「その程度の魔術・魔法で俺様に傷をつけようなど、千年早い」

文字通りな。どうしてもというならアレイスターレベル連れてこいや。

これは確かに強力だが、儀式場が無ければ意味が無い。偶像を破壊出来れば、魔力を使う必要が出てくるし、そもそも三位一体の理論そのものを崩せる。

教会の地面に描かれた術式。右腕を一度振るえば放たれた魔法ごと術者を吹き飛ばして破壊する。

一度見た為、覚えた。いつか使うときが来るかもしれんな。

吹き飛ばした女は瀕死だが、死んではいけないので軽く回復魔術を行使して拘束。

その場に放っておけば後で『必要悪の教会』ネセサリウスの連中が回収するだ  
ろ。

「お疲れ様、フィアンマ」

「おう。速かっただろ」

「意外とあっけなかったね」

「俺様が相手をしたからな。まあ面白い物が見れた。後で再現して  
みよう」

取りあえずはバチカンに戻るとするかな。

二週間後。

魔法を魔術で使うという事がある程度再現していた所で、連絡が  
入った。

「何か用か？」

『それはこっちのセリフよ。フィアンマ、あなたまた『必要悪の教会<sup>ス</sup>』の仕事取ったわね』

「別に良いだろう。事件は解決。一件落着だろう？ ローラ」

『そう簡単に済む話じゃないのだけど。仮にもあなたは『黒の教団』最暗部、『神の右席』の一員でしょう？』

「それがどうした？」

『誰が解決したかが問題なのよ。あなたの名前を出す訳にもいかな  
いし、こちらとしては困るのよ』

「そうだな、誰か適当に名前をでっち上げろ。実際、潰したのは俺  
様だが、捕まえたのはちゃんとしたメンバーだろう」

『……ハア、何を言っても無駄な様ね。相変わらず自分勝手な男』

「それが俺様だよ。長い付き合いだろう？ まだ分かって無かった  
のか」

『長い付き合いって、数年でしょう？ これからはまだ付き合いが  
多くなりそうだけどね』

そう言って、連絡をきられた。

相変わらずだな。融通が効かん。ま、もう少しあの部署にいれば  
そう言った事はあまり気にしなくなるだろう。



しかし、最初に会った時は驚いた。

ローラ・スチュアート。今は『必要悪の教会』<sup>ネセサリウス</sup>の一員だが、恐らく後のイギリス清教『最大主教』<sup>アークビショップ</sup>になる女。

一応イギリス清教はあるしな。『黒の教団』の傘下ではあるが。  
というか、そもそも内部の派閥の一つだし。

この分だと、ウィリアムとかいそうだ。探してみようかね。

### 第十三話 魔法魔術（まざるぎじゅつ）（後書き）

ローラは土御門から馬鹿口調を教えられたので今はまだ普通の口調。というか、英語ですし。

神話などの乗っているサイトや本を紹介していただいた方に感謝をありがとうございます。

今回からクロスオーバー始めました。魔術側のみですし、原石も出ませんが。

数年すつとばす予定。いつまでも数年進んだとかだと進まないの。次回は天草式のあの人が出るよ！（幼女時代の）

感想はいつでもお待ちしております。

#### 第十四話 女教皇（プリエステス）（前書き）

ネタ自体は出て来ましたが、書く時間がありませんでした（言い訳）  
後書きにてちょっとお知らせがあります。

……五和出無かったなあ……（遠い目）

## 第十四話 女教皇（プリエステス）

聖人。

そう呼ばれる人間達がいる。

見た目は普通。一般人となんら変わらない、唯の人間だ。

だが、実際には全く違うと言っても過言ではないだろう。

世界に20人といないとされる、生まれた時から神の子に似た身体的特徴・魔術的記号を持つ人間。

偶像の理論により、『神の力の一端』をその身に宿すことができる。

具体的には、聖人の証『<sup>ステイグマ</sup>聖痕』を開放した場合に限り、一時的に人間を超えた力を使う事も出来る。

特に魔術を使用していない状態でも幸運など何らかの加護が存在する、恵まれた存在だ。

フィアンマもそれに該当する。とはいっても、神が直に聖人にしたのだが。

唯の聖人ではあるが、十万三千冊の魔道書とそれ以外の膨大な魔術の知識でコントロールすることにより、長時間力を行使し続ける事が出来る。

制御そのものが出来れば、相当な量の『天使の力』<sup>テレズマ</sup>を操作する事は可能だ。

魔術師たちの中では核兵器の様な扱いをされている上、圧倒的な能力を持つ故に単独行動を好む傾向があり、フィアンマの様に組織に属する聖人は稀。

その身に宿す圧倒的な量のテレズマにより腕力や脚力、五感などの身体機能が大幅に強化されている。

つまり、唯の人間相手なら近接戦闘で負ける事は無い。

それが、聖人。

「その聖人が、日本にいるの？」

「そう。所属は天草式十字棲教って言うてな。二百年くらい前に伝手で知り合った連中だ」

伊能忠敬が天草式十字棲教と繋がっていた為、其処からフィアンマも繋がっていた。と言う訳だ。

「ルーシーもあいつ等と会つのは始めてだな」

「うん」

そう頷くルーシー。身長は百二十センチ位。肉体が新しい物に入れ代わったのだ。

もって五十年程度。意外と長く持った方だが、やはり天使を直に

降ろしたのが肉体に響いたらしい。

本来、天使を降ろして操作するなど言語道断。自殺行為と取られてもおかしく無い、出来る筈の無い事だ。寿命が縮んでもなんらかしくは無い。

大分裂戦争から九年。去年の冬に入れ代わった。今度の肉体は『<sup>テレスマ</sup>天使の力』を入れてあり、対応する天使は『<sup>ウリエル</sup>神の火』。

「歳は……アスナの肉体年齢と同じ位かな」

「私と同じ？」

「ああ、友達になれるかもな」

実際にはまだアスナの肉体に作用している不老の魔法だが薬だけの効果で肉体は成長していない。最近アックアを相手にするのが面倒になってきた事もあり、日本へ来た訳だ。

一度ロシアに行った事もあるが、ワシリーサに合わせて酷い目にあったものだ。アスナを見るなり跳んで抱きつこうとした所を迎撃。

今度から気をつけようと心に決めている。

今いる場所は九州。天草式の本拠地は九州にあるのだ。という情報も実は嘘の可能性があるのだが、取りあえず昔使っていた隠れ家の一つに向かう事にする。

前にあったのは十年くらい前だったな。と思いだしながら道を歩く。

元々隠れキリシタンが幕府の迫害から逃れつつも十字教を信仰するため、仏教や神道でカモフラージュに偽装を重ねた宗派であり、多角宗教融合型十字教とも称される。

その背景が使う術式にも色濃く残り、パツと見ただけでは普通の台所にしか見えずとも、実はそれが儀式場だったりするのだ。

用いる戦術もまさしく『偽装』で、本命かと思えばフェイントで、フェイクかと思えば本物の魔術が襲ってくる。

それだけではなく文武両道で、日本刀から西洋刀まで何でも振り回せる、少数だがかなり戦闘能力の高い集団。

フィアンマが使う『いくつかの種類の魔力を同時生成する事』も発端はここにあつたりする。

二十分ほど歩き、着いたのは一件の家屋。

ギィ、と音を立てて扉を開け、中に入る。

「勝手に入って良いの？」

「別に大丈夫だろう。俺様とは知り合いなのだし、問題は無い」

フィアンマの地位の事は知らず、フィアンマと言う一人の魔術師として知っているのだ。

地位の事は『黒の教団』でもかなりの深部にいる者しか知らない。それ以外に知っている者がいたとしても、知るに値しないと判断されれば消される。

それほどに隠された存在だ。そう易々と教える訳にはいかない。

土足のまま上がり込み、居間へと入る。

特筆すべき点はない。それほどに普遍的でどこの家にもありそうな居間だ。

だが、こういった場所こそが天草十字棲教の独壇場だ。普遍的、だがそれ故に見落としがちな魔術的意味を拾い、使用する。

この居間にあるのは転移術式。隠れ家の一つとして使われているのは間違いないらしい。

「アスナ、ルーシー。こっちに来い」

二人を同じ方向に向け、術式を発動させる。

所謂風水の魔術だ。日本、陰陽道に関する物だが、元々フェイントの為に仏教や神道の魔術もある程度使える者がいる為、風水を用いた魔術を使えても何ら不思議では無い。

簡易的な、短距離の移動魔術。遠距離には未だ忠敬の大日本沿海輿地全図を使った魔術を使用しているらしい。

だが、今はこの近くに潜んでいるという事が分かるだけでも儲けものだ。いなくても多少の手がかりはあるだろう。と判断した。



転移した先にいたのは十数名の武装した者達。どうやら敵と思われたようだ。

まあ、現在は迫害されていないとはいえ、魔術結社に乗り込んできたのだ。警戒されてもおかしくは無い。

「……ん？ お前、ラトか？」

どうしようか、と迷っていると、一人の男が出てきてフィアンマの名を呼ぶ。

「ラト？」

「俺様の名だよ。ラト・デストロ・フィアンマ。あまり名乗らないから知ってる奴は少ないけどな」

実際、『神の右席』として活動するときは『右方のフィアンマ』と名乗っているし、知り合いにも大抵フィアンマで通している。

というか、『神の右席』として活動する事自体稀だが。後は名乗っても大抵フィアンマと呼ばれる為、ラトと呼ばれる事には慣れていない。

「お前は確か神裂雄吾、だったな。お前の娘を見に来てやったぞ。聖人らしいな」

「相変わらず情報が速いな、お前。自慢の娘だよ」

雄吾が親しげに話しているのを見て、敵では無いと判断したのだ

ろう。周りの者達が武器を下ろす。

「済まないな。火織　ウチの娘の名前だ　を守ろうと少しばかり殺気立ってるんだ。何せ聖人。祝福されて生まれてきた子供だからな。いずれこの天草式はこの子が率いるだろう」

奥から出てきたのは、長い黒髪をポニーテールに纏めた少女。アスナと同じ位の身長だ。

「はじめまして、神裂火織です」

「ほう、礼儀正しいな。お前の教育の賜物か」

「いや、この子は元々こうだ。それに教育は嫁さんがやってるから俺は口出しできねーの」

そう言って笑いあう。アスナは歩いて火織の近くまで行く。

「はじめまして。アスナです」

火織を真似、自分も同じように名乗る。

「……所で気になってたんだが、この二人の子は？」

「俺様の娘」

その言葉に、雄吾は絶句した。

あまりの驚きに劇画チックな顔になってしまっている。

「お前に……娘、だと……」

「冗談に決まっているだろう。片方は魔術生命体。もう片方は拾ったんだ」

間違いではないのだろうが、もう少し言い方は無いものかと雄吾は思う。

「しかし、お前が子供を拾うとはね。何があつたんだ？」

「魔法世界の戦争が原因だよ。巻き込まれたのさ、下らない大人の汚い自己保身にな」

「……そうか。関西の呪術協会でも、あつちの戦争での被害が出ているらしい。子供を残して死んだ奴もいるらしいしな」

関西の情報は基本的に流れてこない。

何故なら、関西は『黒の教団』の傘下では無いからだ。理由は単純。『十字教徒では無い』から。

天草式は傘下に入れるものの、入る事はしない。今はまだ、その時ではないと思っている。聖人である香織が利用される事態は避けたいと思っているのだろう。

フィアンマの事は流れの魔術師と認識している。というか、フィアンマが組織に属しているなど信じられないのだろう。

「この二人、同じ位の年齢だな。よかったら友達になってやってくれ」

雄吾がアスナに向かってそう言う。

肉体年齢は六歳程度だが、実際には百年程度生きている。もう少しの間肉体年齢はそのままだろう。フィアンマ自身、特に気にしている様子も無い。

数年後、再開した時にいろいろ困惑するだろうなあ。等と呑気に考える。それはそれで面白そうなので放っておくが。

「火織、こっちがラト・ディストロ・フィアンマ。お前と同じ聖人だ。で、こっちの女の子は？」

「ルーシーです」

ぺこりとお辞儀をして返答する。今の子供は礼儀正しいなあ。と思考している他の天草式の連中を散らせて、テーブルに座ってお茶を啜る。

一口お茶を飲んだ所で、雄吾が質問をぶつけた。

「で、結局何の用なんだ？」

「言っただろう。お前の娘が聖人だと聞いて文字通り飛んできた」

「魔術師が空を飛んだら落とされるだろうが。いや、でもお前なら確かに飛んできそうではあるけどよ」

フィアンマが普段どんな認識をされているのかよく分かる一言だった。

「其処まで出鱈目な存在では無い。まあ出来ない事は無いんだろうが、不可能に近いな」

幾ら十万三千冊の魔道書を持っていたとしても、この魔術に関してだけはどうしようもない。

それほどに、絶対的な効果を持つ魔術だ。

「聖人。俺様でも他に数人しか見た事が無い。それほどに貴重な存在だ。知りあっておいても損は無いだろう?」

「……まあ、そうだな」

気が向けば魔術でも教えてやろうかと思ったが、ここで学ぶ事はまだ沢山あるだろう。

それに、聖人は生まれつき力のコントロールの仕方を知っている。本能的に、身を守る為に存在しているのだ。

「いつか天草式から出る時でも来たら、俺様を頼ってくれて構わん。連絡は……そうだな、バチカンに来て教皇に俺様の名を出せば分かるだろう」

火織に、そう告げる。

驚いた様に眼を丸くさせ、呆けた顔をするが、直ぐに戻る。

「……はい。その時は、よろしくお願いします」

聖人は唯でさえ珍しい存在。その上、知り合いの娘だ。面倒を見ることに抵抗感はない。

「だが、その前にお前はもう少し子供らしくしろ」

「こ、子供らしく?」

「そう。子供らしく。遊びたいなら遊んで良い。好きなことしたいなら、他人にあまり迷惑かけない範囲でやればいい。所で、この子何歳だ?」

「七才」

「……まだ小学生か。それでこの礼儀の良さ。どんな教育してるんだ、お前」

「俺も何でもここまで礼儀正しい子になったのかが分かん。嫁は其処まで厳しい教育なんてしてない筈だが」

頭を捻りながらそう告げる。どうにも嫁には頭が上がらないらしい。

「つーか、教皇にお前の名を出せば分かるってどういう事だよ……」

「知り合いなのさ。いつでも連絡が取れる」

さら々と話す。普通なら機密事項扱いの筈だが、フィアンマはそんな事は気にしないらしい。

というか、信用するかどうかも別の話ではあるが。

「お前……相変わらず変な所に人脈あるよな」

天草式と言い、教皇と言い、一見繋がりが無さそうな部分に繋がりがあつたりする。

「変と言ふな。長生きしてるといゝんな奴と知り合ふのさ」

雄吾自身もフィアンマが寿命で死なない事を知っている。魔術でそう言ふモノを研究している者もいるし、不思議では無い。実現しているのには随分驚いたものだが。

「次世代の子を育てるのが楽しみか？ ジジイだな、お前」

「殴りたいか？」

「勘弁しろ。聖人の身体能力で殴られたらバラバラになつちまう」

手加減位はするだろうが、防護魔術を使わねば骨の一本や二本は簡単に折れるだろう。

（……そついや、エリザードんとこの見習い近衛侍女も聖人クイーンオブオナーだったな）

シルビアと呼ばれる女性を思い出す。まだ見習いだった筈だが、結構しっかりした子だったなあ。等と思う。

「ま、ここに来たのも暇潰しだ。折角日本に来たんだし、京都にでも行つてみるか」

「京都と言えば、その近くにある烏族の里で忌子が生まれたいぞ」

「忌子？」

アスナが首を傾げる。火織も不思議そうな顔をして聞いている

「禁忌とされる烏族と人間のハーフだな。烏族の場合は白い翼が禁忌の証だとか言われてる」

今までいない訳では無かったが、特に興味も無かった上に烏族の問題だ。勝手に首を突っ込むという訳にもいかない。

「所謂、『本来生まれてきてはならない子』って奴だな。俺達聖人の様な『祝福された者』の対極にいるとも言えるだろう」

「……そんな子が、いるんですか？」

「不思議か？ 同じ一族でそんな使いをする事が」

火織が頷いて、続きを聞いたそうに耳を傾ける。

「簡単に言えば、混血つてのが嫌なのさ。自分達の血に誇りを持っている。だから違う存在である人間との混血を嫌がる。これが黒い翼ならまだよかったんだろうが、白となれば話は別。掟に従って殺されるか、迫害されるか。その二択しかない」

その言葉に、驚きが隠せない。

祝福される事は有れど、迫害される事など決してない自身の状況



と比べ、顔をゆがめる。

「救われぬ者に救いを。十字教徒の考え方としてはこれはありだが、相手は半妖。最悪『黒の教団』からも追手がかかるだろうな」

最も、烏族の里から追い出され、何処かにさまよえばの話だ。人間に害を成すとされる妖怪。人間と妖怪のハーフもまた、人間に害をもたらすと思う奴もいるだろう。

妖怪を滅ぼす為に魔術を研究する奴もいる。理由は何であれ、『滅ぼす』と言う事に拘る辺りは流石魔術師と言えるだろう。

「ま、俺様にしても其処まで踏み込みはしないさ。これは烏族の中での問題だ。俺様が首を突っ込む事じゃ無い」

お茶を飲みながらそう続ける。

今回の子に関して興味が無いわけでは無い。時期と可能性からすると桜咲刹那という可能性もある。

年齢は恐らく四歳位だろう。年代から考えて。子供の面倒を見るのは好きでは無い。自分の事が自分で出来るなら別に良いのだが。

「さて、そろそろ行くか」

立ち上がり、アスナとルーシーを連れ、部屋を出る。

場所はどうかやらし山に入った場所らしい。周りは森だ。

「じゃあな。バチカンに来る事があれば、またいつか会えるだろう」

それだけ告げ、フィアンマ達は転移した。

#### 第十四話 女教皇（プリエステス）（後書き）

神裂火織の幼女時代の話。というか俺のパソコン、かんざきを交換すると神崎になるんですね。不便。

さて、ちょっとしたお知らせ。刹那、どうしましょうか（え

選択肢は二つ。

フィアンマが連れて行くか、原作通りか。

フィアンマが連れて行くと神鳴流は使いませんが、魔術師になります。原作通りは言わずもがな。

ちなみに木乃香と知り合うかもわかりません。いや、其処を変更したら駄目か。

どうしようかな、と迷ってます。魔改造アスナと魔改造刹那。後魔改造はもう一人加えるつもりですが、刹那は未だに迷っております。魔改造にしても、多分原作始まるとフィアンマの影が相当薄くなる予定なんで。

と言う訳で、ご意見あればお願いします。アンケートの様な形になります。よろしくお願いします。

期間は三日後の十四日午前零時までです。

## 第十五話 魔改造（アスナ）（前書き）

予想以上に長くなりました。ここまで長くするつもりは無かったんですけどねえ。

刹那は接触しない、という事で落ち着きました。下手に干渉するとまた原作が変わってゴチャゴチャしそうなので。

## 第十五話 魔改造（アスナ）

バチカン。聖ピエトロ大聖堂。

とある一つの部屋、其処に四人の人物がいた。

『前方のヴェント』 『後方のアックア』 『左方のテッラ』

そして、『右方のフィアンマ』

この四人は『神の右席』という、黒の教団のピラミッドに存在しない隠された最奥の暗部。

その座は常に四、天使の中で特に重要な四大天使に対応する四人のメンバーは、必要に応じて『中身』だけを次々と入れ替えて存続する。

最も、最悪『右方のフィアンマ』さえいれば神の右席は機能するので何の問題も無いのだが。

本来ならば、各部署のトップでさえその存在を知る事は出来ない。知ることが出来るのは黒の教団のトップである教皇のみ。

偶然知ってしまったとしても、知るに値しないと判断された場合、始末される。

それほどの、知る事の出来ない。否、知ってはならない暗部。

そこに、アスナが放り込まれた。ルーシーは用事がある為、今はいない。

「キヤー！ やっぱ可愛いわぁ！ お持ち帰りしたい位！！」

「アスナ、やっていいぞ」

「えい」

ボン。と軽い音を立ててアックアの体が火達磨になる。

「あちつ。酷いわね、もう」

一瞬間が空いた後、火が勝手に消える。アックアの体には火傷の跡どころか服に焦げ目すらついていなかった。

「次は本気」

ラミネート加工されたルーンのカードを持って構えながら距離を取る。

「さっきのといい、ルーン魔術を教えるの？」

「まあな。ポピュラーだろ？」

「だが、応用性も高いしな。初心者に使わせるには丁度いいんじゃないか？」

ヴェントが面倒そうに告げる。

ルーン文字とは元々複数の文字を合わせて使うモノだ。文字一つ一つが意味を持つ上で、いくつかの文字を合わせて効力を上げたり範囲を広げたりと応用が効く。

例えば、火を意味する『カノ』というルーンに対し、『アルジズ』と呼ばれる保護のルーンを組み合わせれば、それは火から身を守る為のルーンとなる。

別のモノでは、『カノ』に対して『ベルカナ』という成長のルーンを合わせる事で、それは強力な炎となるのだ。

単純な足し算とは少し違うが、梵字やルーンと言った文字自体に意味や力のあるモノは、大抵こういった使われ方をする。

とはいえ、慣れなければ組み合わせるのには難しいし、組み合わせ自体無限にあると言っても過言では無いので、ルーン魔術を使う者はまずどんなものを使うかを探す。

それは火を取り扱った神話や、水や氷と言ったモノを使う神話。とにかく、歴史の流れる上で淘汰されなかった神話と言う出来事を再現する事を目指す。

歴史に淘汰されなかったという事は、それは最適化された魔術の教本の様な物だ。参考にすれば発現させるのは楽で簡単になり、より強力なものへと昇華する。

ここで今回の議案の確認。『アスナを神の右席レベルの魔術師にしよっ』

「さて、アスナに魔術を教え始めて十二年。基礎的な知識と方法は全て教えた。後は詳しくいろんな魔術系統なんかを学ぶだけだ」

神の右席の基本的に共通する特徴として『原罪』を可能な限り薄めたことにより、人の限界を超えた神・天使クラスの魔術を行使することが可能となる。

ヴェントの『天罰術式』然り、アックアの『聖母の慈悲』然り、テッラの『光の処刑』然り、フィアンマの『聖なる右』然り。

フィアンマについては元からの才能もあるのだが、それは今は関係ない。

重要なのは、極端に調整した所為で普通の魔術が使えないという事。

だが、アックアとフィアンマに関しては別。

アックアはその特性、『聖母の慈悲』で『神の右席は普通の魔術を使えない』という制約を和らげる事で。

フィアンマは薄める原罪を取捨選択することで、ある程度「知恵の実」を残しており、神の右席としての力に加えて『人間用魔術』も火属性に限られるが使用できる。

加えて『一つの属性を操る』ということは、広義において他の属性に影響を与えることである』という理論に基づき、火属性を介して他の属性を操作することで、実質的にあらゆる属性の魔術を行使できる。



そもそも神の右席に入れるレベルの魔術師は大抵が一流、入れなかったとしても、候補に選ばれるだけで一流だと認められるようなものだ。

このメンバーから教えて貰うという事は、相当恵まれた環境なのだろう。

単純に言ってしまうえば、全員規格外と言う事なのだし。

……まあ、魔術師を名乗るなら自分で自分の魔術を作りだしてこそなのだが。

「具体的にどんな魔術教えるかは決めてんのか？」

「いや、まだ決めていないし、その辺はアスナが決める事だろう？」

初めからほぼ全ての魔術を知っているフィアンマや、調整される為に自分に合った魔術を探す必要の無かったヴェントはその辺の事は分からない。

まあ、ヴェント自身普通の魔術を使っていた時期もあるが、見た目通り若い為、殆ど使っていない。それでも、魔術師は知識が物を言う。一流には変わり無い。

「じゃあ私が決め……」

「やあ」

今度は強烈な爆風。火のルーンを局所的に使う事によって爆発的

な熱風を生み出したのだ。

「ちょ、酷いつ!?!」

慌てて防御魔術を使い、熱風を防ぐ。下手すれば喉がやられるし、火傷は必至だろう。

幾らレベルの高い魔術師とはいえ、至近距離からの攻撃を喰らえばそれなりにダメージを受ける。防御するのは当たり前だ。

「……何か、アックアに対する行動が反射的になって来たよな。アスナ」

「アックアも毎回やられている癖に懲り無いですよー」

「まあこれだからな。ちなみにこの間ワシリーサに会った時も似た様な事になった」

被害者がアスナなので、最悪『聖なる右』使っても吹き飛ばすつもりだが。変態は要らない。

ちなみにヴェントが風の『流れ』を操作する事で被害はアックア一人が受ける事になった。

「アスナ。こっち来い」

アックアの近くにいると抱きつかれる。それが嫌なのか、フィアンマの言葉を聞いた途端にダッ。と走り出してフィアンマの膝の上に避難する。

特等席として気に入っているのか、ここに座ったアスナはニコニコしている。

そして、それを見てアツクアがまた鼻血を出していた。

「……やっぱり、一遍コイツどうにかした方がいいのかね」

「あたしはどうでもいいけどな。いや、アスナの安全を考えるならどうにかした方が良さだろ」

「むしろ安全を確保するためには少しくらい無茶した方が良さ気もしますがねー」

残念ながら、ヴェントの天罰術式は『自身に敵意や悪意を持った者を問答無用で昏倒させる』魔術。欲望は敵意でも悪意でも無いし、そもそもヴェント自身に向けられたものじゃない。

「んー……アスナ自身にコイツどうにかさせるほどの実力を身に着けさせた方が速いだろが、時間がなあ……」

「時間なんて幾らでもあるでしょ」

「いや、早めに教えておかないとコイツロリコンでレスだろ？ 危ない気がしてしまうが」

正に敵は身内にいるといった状況である。いや、正確には全員が全員を身内などとは思って無いが。

唯一つの目的の為に協力する。それが魔術師だ。

アックアの実力自体はそこらの魔術師では相手にならない。増してや、魔術師として経験も知識も圧倒的に足りないアスナでは簡単にあしらわれるだけだろう。

最も、其処までガチバトルをするような事態にはならないだろうし、なっただらなっただでフィアンマが飛んでくるので心配など要らないのだが。

「アスナは本当に可愛いですよー。ヴェントとは大違い」

「何言ってやがるこのエリマキトカゲ」

「エリマッ……敵意を向ける気は有りませんよ。唯ちよつと術式の調整をするだけですがねー」

取り出したのは一つの霊装。小麦粉をギロチンの様に変化させ、ヴェントを狙う。

「やる気が、テッラ」

対するヴェントが取り出したのは有刺鉄線が巻き付けられたハンマー。それを振るう事で圧縮された風の術式を使って攻撃する。

二つの攻撃がぶつかり合い、爆炎によって飲み込まれる。

「この場で戦闘を始めるとは、仕置きされたいのか？」

右手を向け、爆炎を起こした原因であるフィンガースナップを繰り返す。

掌の上に現れた炎はフィアンマの意思一つで規模を変えられる。  
今の一撃で二人ともここから弾き飛ばされていてもおかしくは無かったのだ。

最も、テッラならば『光の処刑』で防げただろうが。

少なくとも『右手』の事を知っていて、尚且つそれを向けられているとなれば、この場で戦闘などする訳にもいかず。

「チッ。しょうがねえな」

「この場合は矛を収めましょうかねー」

渋々といった様子で席に着き直す二人。

アックアも鼻血は止まった様で、いそいそと席に着き直す。

「で、最終的にアスナはどんな魔術を使うつもりなんだ？」

ヴェントが腕を組みながらそう聞く。結局は其処に集約されるのだ、聞くのが手っ取り早く。

「んー。分かんない。フィアンマはルーン以外にもいろいろ教えてくれたけど、多過ぎて絞り込めない」

「一体何を教えたんですかねー？」

「ルーン以外だと、神道に近代西洋魔術、錬金術、陰陽道、カバラとかいろいろ」

「どんだけ教えてんだよお前……」

「もはや異教徒とか言うレベルでは無いですねー」

異教徒というか、十字教という一つの教義においてここまでいろんな魔術を使えること自体がおかしいのだ。

厳密に言えば、多数の宗教の知識を魔術を使う為だけに得ている。十万三千冊の魔道書を使うという事は、当然そう言った別宗教の魔術も存在する。

だからこそ。知識が異常なまでに揃っているからこそ、フィアンマには扱える。

アスナには天草式の様な魔力精製の方法で魔術を使わせている。十二年で良くもまあここまで大量の魔術の基礎を叩きこめたものだと、呆れ半分称賛半分といったところだろう。

「お前、どっちかといえば魔術師ってより魔導師の方が近いんじゃないの？」

「そうかもしれんな。後世の為に魔術師を育てる。確かに魔導師の方が近い」

「どうせなら私にアスナちゃんを育てさせ」

「ていつ」

投げたのは符。但し、爆炎を伴って槍と成す。陰陽道の符。

「ちよつ、まだ話してる途中だつて！」

口調こそこれだが、慌てることなく符を握り潰して消滅させる。  
やはり魔術師としての年期が違う。

そんなとき、ガラッ。という音と共に教皇が入ってきた。

「……何をしているんだ、お前達は」

「……アスナ魔改造計画」……

全員が声を揃えてそんな事を言う。呆れた教皇は頭を抱えてそのまま近くの椅子に座り、フィアンマ達の方を向く。

「基本的に俺様達は暇だからな」

「あたし達が自分から動かない限り、もしくはあんた等教皇が何らかの意思を示したときじゃない限りは動かないしね」

「娯楽は幾らあってもいい物ですよー」

「私はアスナちゃんと遊びたいっ!？」

いい加減面倒になったのか、ルーン魔術で椅子ごと吹き飛ばすフィアンマ。

ぶれない奴だ、と呟く。

「……まあ構わないがな。フィアンマ、お前イギリスの女王と知り合いだろう?」

「ん？ ああ、エリザードの事か？」

「お前に話があるらしい。何かやったのか？」

「さあな。心当たりがあり過ぎて思い浮かばん」

実際、いろいろやったものだ。

カーテナ「オリジナルを革命中にくすねたり、ローラと一緒にエリザードをドッキリにかけたり。

前者のがばれたかな？ 』と思考するが、取りあえず行ってみよう  
と思い、アスナを連れて聖ピエトロ大聖堂を出る。

イギリス。

魔術の国イギリスに発した「悪い魔術師から市民を守る」という  
方向性の極まりすぎた結果、他の十字教勢力と比較して、魔女・異  
端狩りや宗教裁判などの対魔術師技術に特化している。

魔術対策で様々な術式や文化を取り込むことに積極的なため信仰  
の制限は緩く、異教でも枠組みを保ったまま入信が可能。

そんな組織《必要悪の教会》がある場所、イギリス。



「おー。良く来たなフィアンマ。久しぶり」

国家元首はジャージで迎えてくれた。

クイーンレゲナント  
英国女王と呼ばれるエリザード。年齢は四十前半であり、カーテ  
ナⅡセカンドの持ち主。

あんなのになるなよ。とアスナに耳打ちし、ここまで連れて来て  
くれた騎士団長に労いの言葉をかける。  
ナイトリーダー

「……相変わらずだな、お前。大変だろ？  
ナイトリーダー 騎士団長」

「……ええ、まあ。もう慣れましたし」

慣れるのもどうかと思うが、このままだとナイトリーダー騎士団長の愚痴を受け  
る羽目になりそうなので、無視。

「で、俺様を呼び出すとは一体何の用だ？」

「暇なんだ、チェスしないか？」

そのままUターンして部屋を出ようと歩く。

アスナもそれに続いて部屋を出ようとするが、ナイトリーダー騎士団長から止め  
られる。

「なんだ、俺様は忙しい。チェスをやってほしいならローラでも呼  
び付けてろ」

「まあ何だ。子供を紹介しておきたくてな」

フィアンマの言葉を全部スルーし、自分勝手に気ままに会話を進めて行く。

右手を向けた自分は悪くない。とフィアンマは心の中で思った。  
それに気づいた騎士団長ナイトリーダーが何らかの魔術攻撃をしようとしていると  
気付いて止められたが。

「リメエアの事は知ってるよな。キヤーリサも。そしてこっちがヴィリアンだ」

それぞれ特徴的な子供達が出てくる。

リメエアは二十代後半に入ったばかり、キヤーリサはぎりぎり十代、ヴィリアンは十代後半に入ったばかりだ。

「俺様と会わせて何がしたいんだ、お前」

「娘自慢に決まっているだろう？」

「帰っていいか？」

呆れ果てて、もうここにいる気力を無くしたフィアンマ。もう良くな？ もういなくてもよくね？ といった感じである。

エリザードが自分の娘達とフィアンマを合わせたのは、速い話が政治的なものだ。

『神の右席』として、黒の教団を顎で使える人材であるフィアンマ。

本来ならエリザードでさえ気付かれる事は無いのだが、『頭脳』・『軍事』・『人徳』の三つをバランス良く備えているからこそか、気付かれた。

教皇とも知り合いであり、ローラとも知り合い。フィアンマが神の右席だと気付いたのもある意味必然とも言えるかもしれない。

エリザード的には結果的に『友人の娘』という事で、万分の一位でも守ってくれればいいな—という考えである。

つまりはあまり期待して無いという事なのだが。

それでも、フィアンマの実力は一人で国とタメを張れるほど。

本来、国の間での戦力などの睨み合いは、国と国という単位でする物だ。

それが更に戦争という枠組みが出来上がれば、国と国が混ざり、連合が出来上がる。

そして、『右方のフィアンマ』という『個人の戦力』は、それほどほぼ同等と捉えられている。

個人の範疇では無く、最早国単位で敵対行為をしなければ相手にすらなれない怪物。それと『知り合い』というだけでも、事情を知るものであれば相当なアドバンテージだ。

大き過ぎる力は、存在するだけで周りへと影響を及ぼす。

あまりにも強大で、強靱で、圧倒的で、絶対的。敵対行為すらし

ようとは思わない。そんな存在。

…… 本人的には、実際はそんな面倒事はやりたい訳ではなく、適当に遊んで暮らせたらいいなー位にしか思っ  
て無いのだが。

「お前の娘だろ、その子？」

「まあ、そうだ。血は繋がって無いが」

赤毛、眼付、魔術の才能。その辺を吟味して、エリザード的には実の娘じゃないのかと思っ  
ていたらしいが、当てが外れた様だ。

ちなみに二年前に『墓守り人の宮殿』の封印は解け、  
『魔法無効化能力』も戻ってきた。  
ヤンセル マジックキ

人形に封印していた為、この十年間使えなかったのだ。

肉体も元通り成長するようになり、今はイタリアの学校に通っている。性格的に合わないのか、あまり友達と呼べる子はいない様だ  
が。

ついでに言うところシーも同じ学校である。

「いろいろ理由があるだろうから詮索はせんがな、誘拐だけはするなよ？」

「お前が俺様をどんな目で見てるかが良く分かる一言だな」

「冗談だと分かってるので特に言及もしないが。これが本気なら三時間ほど問い詰めたい所である。」

「ここ最近魔法使いがウェールズに良く行っていてな。MM元老院の手先だ」

「ああ、そう言えばナギ・スプリングフィールドの息子がいるんだっただな」

「ほう、知っていたか。なら話は速い。奴ら、その子を狙ってる様だぞ？」

ナギの息子では無く、アリカの息子という事が、MM元老院にとつては必要な事だった。

だからこそ、ナギが消えた現状でネギを始末すべく動いている。

フィアンマの知る限りは後二年は大丈夫だろうが、その後の事は知らない。

「奴ら、私達の許可も取らずに我が物顔でウェールズを歩き回っている。困ったものだよ、全く」

やろうと思えば、恐らくあつという間に制圧できるだろう。MM元老院などその程度。

あくまでもカーテナの力を扱えるイギリス国内の話に限るが。少なくとも魔法世界においても相当な被害を出す事が出来るだろう。

「奴らはそう言うモノだからな。魔法使いが魔術師に劣っているなと考えるもしない」

魔術師は自分の為に。魔法使いは他者の為に。そう言った考えを持つ者は多い。

「最近是不穏な動きが目立つ。特にイングランドなど」

「伝令です！ イングランドにてテロが発生、要求をしてくれています！ 敵は恐らく魔法使いと思われます！」

「ほらな、こうなる」

「大変だな。暇潰しついでに手伝ってやろうか」

表に出るのは勘弁だが、こういった事件は暇を潰すにはもってこいだ。

「なお、一般人を楯に取っている模様。日本人です！」

「大使館に連絡をしておけ、テロの被害に合うかも知れんな。名前は分からののか？」

テロには屈しない。イギリスはテロに屈する様なやわな精神は持っていない。

「先日イギリスに入った日本人の様です。ファミリーネームは大河内、倉田、黒田。総数九名です！」

ふと、フィアンマには嫌な予感がした

## 第十五話 魔改造（アスナ）（後書き）

ほのぼの右席。ジャージ女王の登場です。

右席はあとはウィリアムだけですね。アックアは華々しく散らせます（マテ

人質になった人は分かる筈。原作キャラですたい。フィアンマファミリーの予定ですたい。

理由はかなり無理やりになる予定です。

次回、英国<sup>ブリテン</sup>

魔術と一般人が交差するとき、物語は始まる

……とか、アニメ風に予告してみたり。

## 第十六話 英国（ブリテン）（前書き）

今回、ご都合主義のオンパレードです（オイ  
独自設定等も出ます。

それでもいいと言う方はお進みください。

……更新遅れて申し訳ないです。



## 第十六話 英国（ブリテン）

イギリスにおいてのテロ。

イングランド地方において、魔法使いが起こしたものだ。

目的はイギリスに対しての魔法使いの価値を上げる様に要求する事。

魔法大国と呼ばれるイギリスにおいてはウェールズ地方一帯でしか魔法は学べず、国への影響力はゼロ。

魔術はイギリスの中枢まで入り込んでおり、『王室派』『騎士派』に並ぶ『清教派』が存在している。

魔法使いは、それが不満なのだ。

魔法世界において、膨大な影響力を持つ魔法使い。

現実世界において、多大な影響力を持つ魔術師。

魔法使いより魔術師をより強大で危険だと見るのは当然だ。

何故ならば、魔法使いは一人でも集団でも出来る事は限られていて。だが、魔術師は違う。

集まれば結社となり、例え一人でも目的の為なら世界を滅ぼす事さえいとわない。そんな奴らがいる。なら、そんな連中に対して対策を練るのは当然だ。

魔法は魔力を使う事と詠唱さえ出来れば使う事が出来るという『即時性』が利点だが、魔術は多量の時間と魔力で行う『大規模』な事が利点だ。

無論、即時性を持った魔術もあれば大規模な魔法もあるが、基本的な区分としてはこの様な感じとなっている。

「無駄に騒ぎを大きくしやがって。要求をしてその後突っぱねたらテロの流れじゃないのか、普通？」

「こういう事が出来るとアピールしたいんだろうよ。年単位で準備が必要になる事もある魔術と違って、魔法は即時性が売りだからな」

エリザードとフィアンマはのんびりとした様子でテロの状況を聞きつつ話を進める。

「宗教毒が及ぶ事も無く、ある程度の素質さえあれば誰でも使える魔法。宗教毒があるが、才能が無くても使える魔術」

「利点ならどちらにもある。だが、思想が違う、か」

ある程度の常識を持ち、やるべきではない事を弁えている魔法使い。

普通的手段では叶えられない願いを叶えるため、どんな被害も厭わない魔術師。

魔法使いでもやる奴はやるし、魔術師でも常識人はちゃんというのだが。

「大使館から連絡です。出来得る限り無傷で人質を助けて欲しいと」  
「私としても当然そうするつもりだ。だが、あまり無茶な事は言わないで欲しい」

テロが起こっているのに、無傷で救出などというのは難しい。相手が自爆を考えているなら尚更だ。

「……確か、人質の中に大河内という家族がいたか」

「はい。三人家族で、イギリスへは旅行に来ているようです」

「運が悪いな。関係者か？」

「詳しい情報は取れていませんが、恐らく関係者ではありません」

なら、事が終わった後で記憶処理をする必要がある。魔術は別に漏れても構わないが、魔法は漏れると困るらしい。

自分たちのケツは自分たちで拭けといたいエリザードだが、そもそも魔法使いの機関を置いていないので当然不可能である。

「ふむ……俺様が行こう」

瞬間、エリザードが動きを止めた。

「……スマン、聞き間違えたかもしれん。もう一回言ってくれ」

「何？ 俺様が行くと言ったんだ」

「何イ！？ お前が行くのか！？」

「俺様が行っちゃ悪いのか。傷一つ無く救い出して来てやるぞ」

「確かに出来るだろうが……お前、本当にフィアンマか？」

「どついう意味だ」

小さく怒気を孕ませて告げる。元々自分の為にしか動かない奴なので、こういう反応を取られても何らおかしくは無い。

「何、ちょっと興味が出ただけさ」

それだけ告げ、アスナを連れて部屋を出た。

エリザードは椅子に座り直し、息を吐く。

「大丈夫なのですか？ あの人一人に任せて」

「……ああ、この件はもう解決したとみていいだろうな」

現状、実力的にフィアンマに勝てる人間は存在しない。テロを起す程度の力しか無い魔法使いに負けるとも思えず。

「取りあえず、紅茶を」

ジャージのまま、静かにそう告げる。

イングランド某所。

とある建物に魔法使いと人質である数名の人物がいた。

中には小さな子供もあり、縛られている状態で怯えて親の傍に寄っている。

「……まだ返事は無いのか？」

「焦るな。こちらには人質がいる。無下には出来ん筈だ」

コツコツと貧乏揺すりをする男を宥めつつ、もう一人の男は手に持った剣の手入れをしている。

侵入者を警戒し、至る所に場所を割り出す為の探知魔法をかけている。並みの魔法使いや魔術師ならこれで見つけることが出来るレベルだ。

潜んでいる魔法使いはニケタを悠に超し、しかもそれぞれが結構な使い手。自信はあった。

だから、彼らは『運が無かった』としか言いようがない。

「やあ、人質を取って暇そうにしているテロリスト諸君。態々捕まえに来てやったぞ」

赤い服と髪。細身のその肉体を視界に入れつつ、警戒する。その横には髪を後ろで一つに纏めた少女。アスナの姿もある。

「何者だ!？」

剣を構えつつ、問う。近くに潜んでいる仲間に念話で連絡をするが、返事が無い。

「馬鹿正直に答える奴がいると思うか？」

手をポケットに入れたまま、構える事無くそう告げる。

「魔術師さ」

瞬間、二人とも後ろから吹き飛ばされる。聖人の力を込めたその蹴りは生半可な威力では無く、数メートルをノーバウンドで飛ぶ。

意表を突かれたが、受け身をとって何とか体制を立て直す。そのままフィアンマを視界に入れようとしたが、いた筈の場所にはいない。

「何処を見ている？」

その言葉に引き摺られる様に後ろを向くが、其処にもいない。

訝しげに顔を歪め、身体強化の魔法を使って背中合わせに構える。これで死角は無いとばかりに。

だが、注意していたにも関わらず、アスナは二人の男の胸にそれぞれ一枚のカードを張り付けた。

文字はイサ。意味は停止。

予め作っておいたワイヤーの術式でカードの意味を強化し、二人の精神を停止させる。これで二人の意識は落ちた。

「よし、上出来だ、アスナ」

褒めながら撫で、二人の魔法媒体を破壊して縛る。これで逃げる事は出来ないだろう。

幻覚を一時的に見せる事は簡単だ。火のルーンを使った屋気楼なこともあるのだし。

「さて、人質の諸君。大丈夫か？」

縛られたままの人質。ロープを切って解放しつつ、体に違和感が無いか確かめさせる。

数分で全員のロープを切り、解放を済ませる。そのままエリザードへ連絡を入れ、事件が解決した事を伝えた。

「大丈夫？」

「うん……ありがとう」

アスナの方を見れば、黒髪でポニーテールに纏めた女の子と話し

ている。日本語はちゃんと教えてあるので会話は出来ているらしい。

魔法世界では通訳の魔法もあるらしいが、魔術にそんな便利な物は無い。自力で覚えるしかないのだ。

(……んん?)

多少の違和感。違和感というよりは気になるという程度の事だが、アスナと話す女の子を見る。

そして、小さく笑う。少しばかり面白い物を見つけた、とでもいう様に。

女の子を観察していたフィアンマの下に、一人の人物が来た。

「少し、聞きたい事があるのですが?」

黒髪で長身。顔立ちからアスナと話している女の子の父親だと推測し。

「何か用か?」

「いえ……先ほど魔術師と名乗っていたようなので、気になって」

「関わらない方がいい。こっちの事は知らない方が安全だぞ」

「ああ、少し言葉が足らなかったようで……裏の事は知っていますよ」

その言葉に、眉を顰める。一般人だと聞いていたが、魔法・魔術



の事を知っているという事か。

「職業柄海外に行く事も多いからか、意外と目にするものです。その殆どは魔術師のものの様ですが」

それは当然だろう。魔法使いは秘匿を重んじる。だが、魔術師はその辺りが杜撰だ。魔術そのものは知られても、術式などの技術を知らなければどうという事は無いのだから。

「それで、俺様に何の用だ」

「……うちの娘の事で、少々。あの子はアキラと言うんですが」

少ばかり気にかかっている事を見抜かれたか。それとも、元からあの子の資質を知っていて、観察しているフィアンマに何かしらの感情を抱いたか。

表情に出したつもりは無かったんだが、と反省し、男の問いを聞く。

「本物の魔術師から見て、あの子はどう思いますか？」

「そうだな。……簡単に言ってしまうえば、聖人に近い。聖人の事は知ってるか？」

「聞いた事位は」

感じられているのは、微量の天使の力。性質は恐らく神の力だろう。  
テレズマ  
ガブリエル

だが、本当に微量だ。あれでは、身体能力が一般人よりほんの少しばかり高い位が精一杯だろうとあたりを付け。

同時に、原作キャラにそんな奴がいたのか。と驚嘆する。

「あの子は何が得意だ？」

「何、というと？ スポーツであれば水泳が得意な様ですが」

なるほど、と納得する。水の性質を有する神の力ガブリエルの天使の力テレズマがあるのだ。水に関する事であれば加護が働くのだろう。

天使の力テレズマとは、元から性質が決まっている。それを扱う聖人も当然得意な魔術というのは出てくる。

得意というよりも、特化と言った方が近いかもしれない。

普通の人間が使って、一定の威力を出したとしても、聖人はそれを易々と超える力を発揮できる。

一点特化では無く、いくなれば全点特化。普通に魔術を使っても普通以上の威力を出すからこそ、聖人と呼ばれるのだ。

その中でも、得意不得意で更に分かれるのだが。

だが、アキラは違う。聖人としては天使の力テレズマの量が少な過ぎる。

少しばかり普通より魔術を扱う事に長けている、少しばかり身体能力が高い、少しばかりの幸運。

聖人のなり損ないと取ってもいい位だ。フィアンマ自身が聖人の為、その差は顕著に表れている。

「昔から運動では他の子より出来て、少し運がいい位でしたが……最近、少しおかしい事があって」

「おかしい事？」

「麻帆良学園都市、という場所を知ってますか？ 日本の魔法組織で、関東魔法協会という組織の本部がある場所です」

「ああ、知っている。そこで何かがあつたのか？」

「……魔法使いには気付かれ無かったようですが……あの子が、何かしらの術を行使したんですよ」

「術を行使した？ 魔術か？」

「恐らくは。魔法には詠唱が必要らしいですし、練習も必要と聞きますからね」

別段、ありえない事では無い。

魔術自体、魔力さえ練る事が出来れば素人にさえ使えるのだ。何がきっかけとなって使える事も、無いわけでは無い。

だが、あくまでも魔力が練る事の出来る場合に限る。

魔力は呼吸法などで血液の流れや内蔵のリズムなどを無理矢理いじることによって、普段とは違うエネルギーを精製することができ

る。

それらは知らなければ出来ない事だ。何せ、普通に生きていけばまず使う事は無いであろう呼吸法などを使うのだから。

しかし、フィアンマや神裂はもう一つの方法がある。そして、恐らくはアキラもこちらだろう。

『テレズマ  
天使の力』

聖人であるならば、肉体に宿っているそれを使う事で発動できるものもある。だが、それは自身の肉体強化にあてているテレズマを減らすと言う事。

高速戦闘中などに使えば、まず隙を見つけられて潰されるのがオチだろう。

「水を生み出したんですよ。クレヨンで何か書いていたと思えば、突然水があふれ出して……」

恐らく術自体は簡易的なモノ。

色や書き方、陣の手順などが一致すればありえない事では無い。それでも相当な確率ではあるが。

「なるほどね……面白い素材だ」

少なくとも、本当に才能の無い魔術師よりも余程レベルの高い魔術師になるだろう。

才能が要らない技術と言っても、その中でも才能の差というのは必ず存在する。『神の右席』然り、『必要悪の教会』ネセサリウス然りだ。

アスナと仲良くしてるみたいだし、育ててみるのも面白いかな。等と思っているフィアンマ。

流石にアスナとは事情が違うので無理矢理やらせようとは思っていないが。

「……あまり知られてはいないのですが、麻帆良は少しおかしい場所ですね」

「知っているよ。学園全体に認識阻害の結界を張ったり、世界樹があつたりする場所だろ」

「ええ。どうにも、彼ら自身がその認識阻害に毒されているようにして」

「……く、くくく。自分たちで張っておきながら、自分たちに悪影響を及ぼしているのか？」

「そうですね。魔法の秘匿をしなければならぬ筈ですが、彼らはそれが緩すぎる。しかも夜な夜な戦闘まであっている始末。あの町を出てもいいのですが、妻はあの町で働いていますし、アキラは学校の友達とは離れたくないでしょうから」

それでも、安全性が考慮されていないのならば、麻帆良では無い別の町に移る事も考えてはいる。

多少嫌われようと、安全を一番に考える事が父親として最優先だ

と思っているのだ。

「それで？ その先が本題だろう」

「はい……あなたは、他人から見て自分の事を信用できると言えますか？」

「言えないな。俺様は十中八九誰も信用しないタイプの人間だ」

即答。別に信用されようとされまいと大して違いは無い。フィアンマはそんなことなど気にしないタイプなのだし。

「……出来れば、あの子に身を守るすべを教えて欲しいのですがね」

「何も知らない赤の他人にか？ 変わっているな、お前」

「いえ、あの女の子を見ると、あなたの教育が分かりますから」

アスナの事を見ながら、男はそんな事を言う。

「さっきの戦闘の後も、あの子はあなたに撫でられて嬉しそうでしたしね。本当に誰もが信用しないタイプの人間なら、ああいう子は近づかないでしょう」

それは自身の経験から来る確信めいたモノ。

どの道、聖人を創りだそうとしている結社も存在する。もしかすると、あの子が実験台になる可能性もある。

「アスナ」

「何、フィアンマ？」

「その子と仲良くなったのか？」

「うん。アキラちゃんって言うんだって」

ルーシーは家族だ。友達という括りの人物が出来て、アスナも嬉しいのだろ。顔を綻ばせている。

「……ふむ。なら、日本に移り住むか？ アキラ、という子と同じ学校に通ってもいい」

「本当？」

驚いた顔で、フィアンマを凝視する。隣で聞いているアキラも同じだ。

「どうにも、イタリアの学校には馴染めていない様だしな。仕事の方は気にしなくていい。どうせ俺様が必要になる事態等起こらん」

余程の事が無い限り、ではあるのだが。

教皇が神の右席の力が必要だと言い出しても、フィアンマ以外の三人で何とか出来るだろうと思っている。

そもそも神の右席の力が必要になる事態そのものが、滅多に起こらないのだが。

「大河内、といったか。お前の娘、最低限レベルまで育ててもいい。

あくまで身を守れる様にするだけだな」

「構いませんが、私も見張らせて貰いますよ。流石に娘と二人で一緒にいさせるほど、信用はしてません」

「構わない。どの道身を守れるレベルまで教えたら、後はあの子に選択を委ねる」

フィアンマにしても、アスナが笑顔でいられるならそっちが良いだろう、と判断しての事だ。

魔法機関があるが、何かしらの干渉をしてくるなら潰せばいいと考えており。問題は無いだろうと思考する。



## 第十六話 英国（ブリテン）（後書き）

無理矢理感がありましたが、麻帆良行き。

というか、こうでもしないとフィアンマ本気で麻帆良に行く理由が無いですww

アキラは魔改造。フィアンマパーティはこれで終わりの予定。  
千雨はどうしようかと悩んでいる途中です、過剰戦力な気がしないでも無い。

……いえ、フィアンマがいる時点で既に過剰戦力ですが。

次回は麻帆良での日常編を予定。

## 第十七話 学園都市（まほら）

神父という職業は極めて便利だ。少なくとも俺はそう思っている。

何せ、髪の色は同じでも顔が似ていない、髪の色自体が全く違う上に顔が似ていない二人の娘を連れて何処かへ出かけても、神父というものが神聖な職業として認識されているおかげか、変な噂が流れない。

逆に孤児を引き取って育てていると言う噂まで立っているらしい。

これが普通の職業だとか、ちょっと変わった職業ならアスナ達といると通報されそうだ。誘拐されたとか思われそうで。

外見というか、雰囲気的な問題というか。神父という職業で隠している感じだな。特にやましい事をしているつもりは無いのだが。

いろいろと悲しいが、今更なので特に落ちこまない。

「よ、つと。これで最後だな」

住宅街から少し離れた場所にある一軒家。それなりに大きい。

ここが俺とアスナ、ルーシーの家となる。住宅街から外れている所為か、意外と安かった。俺の資産が桁外れなだけかも知れんが。

今現在、ここに結界を敷いている。結界というのは、境界だ。『結界がある』ということ自体を悟らせない事が、結界を作る者として一流らしい。

小難しい事言っているように聞こえるが、実際には「ここには何も無い」と思わせればそれでオーケー。結界自体も悟られないなら認識のしようがない。

魔術師の工房だからな。侵入者が来ると死人になる。

俺は構わないが、アスナ達にはちょっと刺激が強いだろ。というか、帰ってきたら死体があったとかショック過ぎるだろう。

荷物は引越して来てから大凡三日程度で大体片付け終わり、中々見栄えのある部屋になったと思っている。物は多いが。

魔術的な役割を持つ品物を配置すると言つのも、立派な魔術だ。天草式のやり方を真似ている。一見そうは見えなくても、魔術師の儀式場だったりとかするからな。

「ただいま、フィアンマ」

「ただいま、お父様」

「お帰り、二人とも」

アスナとルーシーが帰って来た。二人には夕食の買い出しを頼んでいたんだ。いわゆるおつかい。

残った荷物を片付けるのと結界を敷くので、意外と時間を喰いそうだったから頼んでいた。二人から買って来た物を受け取って冷蔵庫に入れたり冷凍庫に入れたり。

主夫か、俺は。

まあそれは置いておくとして、現在の時刻は四時を回ったばかり。夕食の準備をするには少し早い。

ちなみに、アキラとその父親に魔術を教え始めた。それが用件だから当たり前といえば当たり前なのだが。

アキラはビツクリして固まったりしてたし、こういう反応は毎回見ていて飽きない。父親の方は魔術を使う気は無いらしい。唯変な事をしないか見張るだけで。

最初はアスナにやった様に聖書を読ませたり洗礼を受けさせたり。宗教防壁を築いている最中。魔術を使うにはまだ時間がある。

どの道もうすぐ夏休みだ。時間はたっぷりあるから問題は無いだろう。

「麻帆良祭？」

「うん。アキラが行こうって誘ってきてるの。行つていい？」

祭りと聞いてわくわくした目でこっちを見る。其処まで楽しみか。

「ルーシーもか？」

「うん。いいでしょ、お父様？」

こっちもわくわくした目で見てくる。そんなに行きたいのか。祭り。

そう言えば、そう言ったのはあまり行った事無いなあ、と思います。特に何かある訳でも無さそうだし、大丈夫だろう。

「そりゃいいが……迷子になったりするなよ？ あっちの親御さんもいるだろうし、迷惑かけない事」

「はい」

……本格的に主夫だな、俺って。

まあいいか、こっちもこっちで用事がある訳だしな。今の内に話を付ける必要がある。何か面倒事を起こされるのは御免だ。

麻帆良祭一日目。

町の中を見ながら歩き回る。基本的に赤い修道服を着ている俺だが、普通の服を着ている。違和感は無し。

修道服が普段着になってるしなあ。と思いつつ、屋台等を見ながら図書館島を目指す。

図書館島では図書館島探検部が探検大会とか言っのをやっているが、俺の用事はそこでは無い。

もつと奥。もつと深い場所に用がある。

チャチなトラップを解除・回避して奥へと進み続け、とある場所まで来たところで、一体の気配。

「ギャオオオオオオオ！！！」

竜。どちらかといえば、ワイバーンに類される種のドラゴンだ。

だが、この程度の生物には用も無ければ興味も無い。竜殺しの魔術など構築する事は簡単だし、その気になれば聖<sup>セイント</sup>ジョージの竜の攻撃を再現する事も可能だ。

敵意を持ってプレスを吐く竜。だが、そんな物は通用しない。

真正面からプレスを抜け、顔面を蹴り飛ばして気絶させる。聖人の力で全力の蹴りをかました。しばらくは起き上がれないだろう。

そして、その奥。扉に手をかける。

中には学園の地下とは思えない光景が広がっていた。木々や湖、

妙な建物。

その中。建物の上に、その人物はいた。

「よう、久しぶり、と言っておこうか」

「あなたは……そうですか、侵入者とはあなたの事でしたか」

「あの竜を通して見ていた訳じゃないのか」

「私とてそんな事は出来ませんよ。あなたなら可能かもしれませんがね」

まるで長年の友人と会ったかの様な気軽な会話。だが、その間には敵意がハッキリと存在している。

「それで、何かご用でも？」

「分かっているだろう？ 俺様がここにいると言っ事が、どういう事か」

「黄昏の姫御子……アスナ姫関連ですか」

紅茶を飲みつつ、アルビレオはそう答える。

「お前等が余計な干渉をしないなら、俺様も手を出さないでいてやるがな。余計な事をするようなら」

「分かっていますよ。あなたを敵に回す恐ろしさは、あの大战で良く理解しています」

大天使ガブリエルの降臨。そして、造物主をもつた力。こいつが全て知っているかは分からないが。

ガブリエルに関しては、人間にどうこうできる存在では無い。だが、無理矢理召喚して、敵対象を悪魔とすれば勝手に動いてくれる。

天使が悪魔を殺すのは当然のことだろう。

「数年前。お前等がここに『アレ』を封印したのも分かってる。封印しか出来なかったのもな」

「……私はそれを見張っているだけ。アスナ姫をどうしようとは思っていませんよ」

「お前はストッパーだよ。俺様が邪魔に感じているのは近衛近右衛門だ。アイツはアスナの正体を知れば、いずれ何かにつけて利用しようと思ひださるうからな」

武力的な問題では無い。政治的な問題。アスナの利用価値は様々だ。その能力にしろ、血縁にしろ、利用しようと思えば幾らでも利用できる。

魔法使い達の住むこの町に、アスナを住まわせるのは多少なり抵抗があった。今までの扱いを考えれば当然の事だが、アスナは仲の良い友達と入れた方がいいだろうし、何より俺がいれば大丈夫だろうと思つての事だ。

アスナ自身も魔術が使えるし、ルーシーもいる。……多分、アツクアの奴も動くだろうな。後ワシリーサ。



「学園長ですか？」

「アイツにしろお前にしろ、戦闘力などはなから俺様に匹敵するな  
どと思っていない。だが、アスナを利用する事だけは許さん。その時  
は麻帆良が地図から消えると思え」

右手を向けつつ、そう告げる。

「フフ……随分と過保護なのですね」

「どちらかといえば、お前等の為に言っているのだがな」

アックアとワシリーサのコンボはキツイぞ？ ガチで強いからな  
？ あいつ等。普段は変態だが。

俺が動くまでも無く、麻帆良終了のお知らせが出る。

「私達の為、ですか。肝に銘じておきましょう」

「そうしておけ。アスナの事を特定させる様な事は教えるなよ」

右手を下ろし、ポケットに無造作に突っ込む。

そのまま踵を返して歩き始め、ドアを開けて外へ出ようとする。

「ああ、そうだ」

ふと足を止め、後ろについて来ていたアルビレオの方を向く。

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。アレとは知り合いか？」

「ええ、昔馴染みですが」

「一度殺しかけた事がある。今また俺様を見れば殺しに掛かってくるだろうな。もちろん、俺様は手加減などしない」

「……気付かれない様にしろ、と」

「俺様は別に構わんがな。あれがどう動くかは、お前ら次第だ」

それだけ言つて、その場から消える。座標は手に入れた。何かあれば、地下ごと吹き飛ばせばこいつも生きてはいられないだろう。

地盤の問題もあるが、そんな物はどうだっていい。敵対するなら滅ぼす。それだけの話だ。

「……赤い髪の男？」

「ええ。彼とその傍にいる女の子。彼らに対して何かしらのアクションを起こせば、麻帆良が地図から消えると宣言されましたよ」

「それは、本気なのかの？」

「出来るでしょうね、彼なら。私達『赤き翼』の総戦力を持ってしても、傷一つ与えられるかさえ分かりません」

学園長室。フードを目深にかぶったまま、アルビレオはそう言う。

学園長は頭を悩ませる。その三人に余計な事をすれば、被害は魔法関係者だけでは済まない。一般人まで被害が及ぶ可能性もあるのだから。

「出来るのは分かったが……本気でやるのかの？」

「学園長。魔術師とは、目的の為なら手段も方法も厭わない連中が殆どですよ。あなたはよく分かっているでしょう？」

「……そうじゃの」

「それと、キティにも会わせない方がいいでしょうね」

紅茶を口を含みつつ、またしても面倒事を告げる。

「エヴァかの？ 何か因縁でもあるのかのう？」

「大ありますよ。一度殺しかけた事もあるそうです。彼が十字教徒

である事を考えると、それさえ優しい対応に思えますがね」

実際、異教徒は人間では無いと思っている者もいる。そう言った連中は殺す事に戸惑いなど覚えない。

吸血鬼であるエヴァンジェリンなど、生かす意味がない。

「ふむ……厄介じゃのう……所で、その赤い髪の男の容姿は分かるのかの？」

「みれば一目でわかりますよ。異質な雰囲気纏っていますしね。容姿は何か写真でも残っていればよかったのですが」

「お主のアーティファクトはどうじゃ？」

「無理ですね。隙が無い。そう簡単に収集させて貰えるとは思えませんし」

「そうか。では、気を付ける様にしようかの」

アスナの事は伝えたが、学園長にそれが誰かを特定させる様な事は言わなかった。

つまり、アスナが唯の一般人では無いと言っただけ。姫御子である事実は教えていない。

必要ではないし、明かす意味も無い。明かせばどうにかして利用する事を考えるかもしれない。一度相対して完膚なきまでにやられた身としては、それは死刑宣告にも近いものだ。

不必要に誰かを撒きこむ事が出来なくなった。これが、フィアンマの狙い。

一般人をむやみやたらと巻き込まない様に配慮して、アスナの詳しい事、容姿などを伝えない様にと言った。

これでは、偶然巻き込んだ一般人の筈の人物がそのアクションを起こしてはならない人物となれば一巻の終わり。むやみに動けなくなった訳だ。

アルビレオもそれが分かっているのか、その口元は笑っている様にも見える。

(……本当、過保護ですねぇ……)

一般人までその庇護を与えるとは。と呟いて、学園長室を後にした。

## 第十七話 学園都市（まほら）（後書き）

アルビレオと学園長に釘をさす話。これ3 - Aが出来ないフラグじやねーの？www

と、思いましたけど、この学園長だし多分3 - Aは造るでしょうね。二番目とか三番目のアーウェルンクスとの絡みを書こうと思ってたんですが、すっかり忘れていつの間にか十年前過ぎてた（えハツハツハ、時間は確かめるものですね。まあ大した事では無いので特に気にしません）。

今回はちよつとキンクリ。原作六年前の出来事です。ネギとはちよつと違う事件が起こります。感想お待ちしてます。

ついですが、アスナとルーシーのファミリネームどうしましうか。

学校に行く以上必要だよねって話でして、フィアンマだと……ちよつとあれかなあ、と思いますし。エンテオフォシアだと魔法関係者気付きますし。

そんな訳でファミリネームに良い案があれば言って頂けると大変うれしいです。

## 第十八話 約束（しごと）

「アスナ、帰ろう」

「うん」

ルーシーが帰る準備を整え、私の傍に来てそう言った。

麻帆良の小学校に転入してから三年。私達は九歳になった。特に話す様な事は無いけど、転入した直後はイタリアから来たって事で結構質問攻めにあつた。

名前はアスナ・ジャンヌ・ラツィオ。洗礼名のジャンヌとイタリアの地名を組み合わせた物。

フィアンマは「ジャンヌとは縁があるからな」って言ってたけど、あつた事あるのかな。

ルーシーはルーシー・アンナ・ラツィオ。アンナは至聖生神女の母聖アンナ。マリアの母として有名。ちなみに預言者アンナという人もいるらしい。

フィアンマは「アンナと聞くとシークレットチーフのアンナ・シユプレングエルを思い出す」って言ってた。

『黄金夜明』のメンバーの一人だったフィアンマは、会った事は無いけど知ってはいるらしい。

家に着き、ドアを開けてさっさと中へ入る。

「「ただいま」」

「ん、お帰り。昼飯は用意してあるから、早く手を洗って来い」

フィアンマに言われ、カバンなどを置いて手を洗い、昼食をとる。

今日は終業式だったから、昼まで帰って来た。明日から夏休みだ。宿題が多いけど、分からない所はフィアンマが教えてくれるから直ぐ終わる。

アキラも呼んで一緒に宿題をやる。そうした方が速く終わるだろうし。

そう思いながら昼食を食べ終え、食器などを片付ける。

「ああ、そうだ。一週間ぐらいはアキラの魔術の練習をするが、そこから先はちょっと出かけるぞ」

「出掛けるって、どこに？」

「バチカンに顔を出して、後は知り合いの所だ。イギリスにもいかなきゃならん」



バチカン……去年、アキラが一緒に行っただけ、アックアが暴走して大変だった。いつも通りの平常運転だったけど、アキラが涙目だったから。

水系統の魔術に相性がいいアキラはアックアに少し手解きを受けて、また少し魔術の腕が上がってた。

フィアンマの得意系統は火だけど、全部の系統をトップレベルで扱えるのが凄い。ルーシーには土系統の魔術を教えてたし。

本当は『神の右席』は会うのはいけないらしいけど、別に『神の右席』としてじゃ無く、フィアンマの友人という事でアキラに会わせた。フィアンマは会わせた事にちょっと後悔したみたい。

イギリスと言うと、『清教徒』の所だろう。トップのローラって人はフィアンマとよくお茶を飲む仲だって聞く。

「知り合いの子供の世話……というか、アスナも知ってる子だからな。会えば分かるだろう」

知ってる子？ 魔術師で同年代の子ってあまりいないと思うけど……。

「知り合いのところって、その子のいる場所？」

「違う。今のルーシーもアスナも会った事は無い筈だ。ここ数年行っただけ無いしな」

ルーシーの質問にフィアンマは即答する。

ここ数年行つて無い……私と一緒に暮らすようになってから、フィアンマが何処かへ出かける事は沢山あったけど、いけない場所もあつたんだ。

“今の”ルーシーって言ってる辺り、前の肉体の時は行った事があるみたい。

普段は教会で神父として仕事してるらしい。立場上、上の人の命令に従うって言っても、フィアンマが一番上でローマ教皇さえ顎で使うから気にしてない。

そもそも、正確には司祭ですらないし。資産は放棄する気なんて微塵も無いみたい。信徒から見たら本当に神父か疑うと思う。全部唯の人間じゃ分らない様にしてあるみたいだけど。

宗教と魔術も厳密には分けられてはいるらしいけど、魔法使いの居場所である麻帆良ではあまり関係が無い。

「ま、準備はしっかりする様にな。アキラも多分行くだろうし」

アキラとはもう家族ぐるみの仲だ。旅行に一緒に行く事も多い。アキラのお父さんがフィアンマを信用しているかららしい。

そう言えば、麻帆良に来たばかりの頃、「認識阻害というより世界樹の加護と言った方がいい……」というか、加護だろうこれ」とか言ってた。

常識がずれていると言っていたし、実際に見て私も魔法使いが魔法の存在がばれない様に認識阻害をかけているのだらうと思ってた。

でも、フィアンマはここにきてその考えを捨てた。世界樹の加護で『物事に大幅に寛容になる』かららしい。

最も、良い事ばかりでは無いらしいけど。

一週間後。

アキラと一緒に魔術の練習を終え、まずはバチカンに向かう事に。飛行機に乗るのは初めてじゃないけど、途中でハイジャックにあった。あつという間に全員気絶させられてたけど。

倒したのは「一般人を巻き込むのは許せないのである」って話す聖人だった。フィアンマはハイジャックがあつた事に気付かず寝ただけ。

いろいろあつたけど、そんなこんなでバチカンに着いた。

「じゃ、教皇と同僚に挨拶してくるから、おとなしく待ってるんだぞ」

『はい』

お小遣い  
軍資金を貰って、イタリアの町を観光する。観光と言っても、一

時期住んでたから美味しい料理の店に行くだけだね。

「綺麗な街だね。前ここに住んでたんでしょ、いいなあ」

「まあね。でも、いろいろ大変だったよ」

イタリアの学校の子はあまり馴染めなかった。ルーシーもだ  
けど。

麻帆良の子とは直ぐに仲良くなれたし、何が違っただろう。

「あつた、ここだよ」

前に住んでいたのは学校に近い場所だった。流石に聖ピエトロ大  
聖堂から通う訳にもいかなかったから。

その近く、パスタのおいしい店。小さいけど、店主はいい人だ。

アキラは小学生の女の子三人で入れるかちょっと不安だったみた  
いだけど、店主と親しげに話す私を見て安心したみたい。

「アスナとルーシーってイタリア語も喋れるんだよね。凄いなあ」

「まあ、勉強したからね」

「お父様に教えて貰ったから」

フィアンマは全部の国の言葉を知ってるんじゃないかと思う程に  
いろんな言葉を話せる。挙げればキリがないほどに。

この間は古代の文字を読んだし。

お喋りをしながら昼食を食べ、軽く歩いてからバチカンの総本山、聖ピエトロ大聖堂の中に入る。

フィアンマの権限……というか、教皇の権限で入れるようにカードを作って貰った……というか、作らせたらしい。半強制的に。

フィアンマは奥だろうから邪魔する訳にはいかないだろう。でも、する事が無くて暇だ。

行った事の無い場所に行ってみたいなあ、と思ったので探検してみる事に。かなり広い所為か、行った事の無い場所も多い。

「結果、迷子」

「どうしたの？ 急に呟いて」

何処かで道を間違えたのだろう。迷ってしまった。複雑では無いけど、広くてここが何処か分からない。

「おや、どうしてこんな所に子供が？」

後ろから声がしたので振り向いてみる。すると、初老の男性が杖をついて歩いて来た。

「そのカード……ふむ、私はやった覚えが無いから、私では無く前の……」

私達の方を見ながら何やら呟いているけど、誰だろうか。教皇は

去年あつたから分かる筈だし。

「ここで何をしているのかね？」

「広いから、探検」

「でも、ここが何処か分からないんです。外への道を教えてもらえますか？」

私がぶっきらぼうに言うと、ルーシーがフォローするように続ける。

「ハハハ、迷子になってしまったか。仕方無いだろうな、広いからついておいで」

笑いながら先導し、外への道を教えて貰った。外にはフィアンマが待っており、魔術で探知しようとしたのか、空中には円形の術式が浮かんでいる。

「ん？ この中にいたのか、お前達。探したぞ」

道理で反応が無い筈だ、と続ける。莫大な魔術的な仕掛けや、領土を保護するための防護陣などが施されている旧教勢力最大最高の要塞だからだろうか、フィアンマでも探知できなかったらしい。

「世話をかけたようだな、教皇」

「いや、構わん。私にはお前に子供がいる事の方が驚きだがな」

「血は繋がって無いし、一人は俺様の娘ですら無い」

「そうなのか？ この赤髪の子は似てると思うがな」

……え、教皇？

「教皇？ って、まさか……」

「気付いて無かったのか？ ローマ教皇だ。前に選挙があつて新しく変わったんだよ。前の教皇はもう歳だったしな」

補足するようにフィアンマが続けるが、アキラは凄く驚いている。

教皇に会えること自体、凄く名誉なことみたいだし。フィアンマと一緒によく会つてるからそうは思わないけど。

っていうか、結局選挙で決められてるしね。

「用事は済んだ。後はイギリスを回ってアイツの所だ」

バチカンに一泊するらしい。書類関係の事と適当な仕事だけで直ぐ済んだらしいから、今日も魔術の勉強だ。

魔術は理論。法則<sup>ルール</sup>を理解してないといけないから、勉強にも応用が効く。算数とか。

魔術を学ぶのは苦じゃ無い。フィアンマの説明は分かりやすいし、時々いろんな雑学をしてくれるから楽しい方だ。

アキラもそう思ってるみたいだし、ルーシーは私達より長い間フィアンマから魔術を習っていて、私より詳しい。

系統は違うけど。

私専用の霊装も作ってくれたし、今私はそれを使って発動する術式を構築中だ。

やっぱり魔術を作るっていうのは難しい。神話なんかを元にして  
いるモノがほとんどだけど、私が作ろうとしている魔術は神話には  
あまり例を見ないものだ。

それでも、頑張ってみる。

イギリス、ロンドン。聖<sup>セント</sup>ジョージ大聖堂。

『必要悪の教会<sup>ネセサリウス</sup>』の本拠地、そしてイギリス清教の実質的な頭脳で  
もあるらしい。

「ここが対魔術師機関、『必要悪の教会<sup>ネセサリウス</sup>』？」

「そうだな。無駄に大規模な事件を起こそうとしたり、変な術式を  
作ってイギリスに敵対すると『背信行為』として追われる羽目にな  
るぞ」



実力で言えば、イギリス清教最大規模。汚れを一手に引き受ける  
と言う仕事柄の所為か、実力の高い者が集まっているらしい。何人  
か会った事あるけど、みんな強そうだった。

対魔術師戦に特化している人物が多くて、フィアンマでさえこの  
組織と真正面から敵対するのは避けたいと言ってた。

それ位強い人たちがたくさんいる場所らしい。アキラはちょっと  
怯えてるけど。

「でも、そんな所にお父様は何の用なの？」

「ん？ いや、神裂の子供 火織が一人イギリスに行ったらしく  
てな。何かあったら頼れと言ってたからバチカンに行つて俺様の事  
を教皇に話した所、連絡が来たと言う訳だ」

「ああ、火織。五年位前に会った聖人の子？」

「そう、聖人だ」

そう言いながら、フィアンマは何処かへ歩きだす。私達はその後  
に続いて歩いて行く。

数分ほど歩いていると、長い黒髪の女の子の姿が見えた。

「神裂」

フィアンマは唯一言、呼ぶ。

その一言に気付いたのか、その女の子は振り返る。身長は高く、近づいてみるとアキラに似ている様にも思える。

同じ日本人で聖人という特徴を持っている所為なんだろうか。長い黒髪、高い身長、顔のつくりまで似ている。

聖人は神の子の特徴を宿すというし、それで似通ったのかなあ、とも思う。

「フィアンマさん、お久しぶりです」

近くで見ると、余計に大人っぽく見える。胸も大きいし、スタイルもいい……でも、太ももで切ったジーンズを着ているのはちょっと……。

「久しぶりだな。元気にしていたか？」

「はい。天草式でいろんな事を学んで、世界を見てもっと学びたいと思ったのでイギリスへ」

「なるほどな。良い経験が出来るの良いが」

聖人の力は強大。みんなが利用しようと動くだろうし、聖人がいるぞって誇示して力の大きさをアピールするかもしれない。

……実際、私がやられたときは国家機密だったけど。みんな私の力を利用しようとしたか考えて無かった。魔法使いは大嫌い。フィアンマがいなかったら魔法使いのいる場所なんて居たくも無い。

「ふむ。イギリス清教に入るなら、上の奴に話を通してみよう」

「本当ですか？」

「ああ、約束だったしな。頼ってくれて構わん」

といいながら聖ジョージ大聖堂の中へ入り、一人の人物と会った。

「そっちの子は？」

「神裂火織。聖人だ」

「聖人？ また珍しい人材連れてきたものね、暇なの？ フィアンマ」

「うるせーな。年齢詐称女。お前ほどじゃねーよ」

「誰が年齢詐称女ですって？ それに暇じゃないわ。イギリス清教のトップ、アークヒシヨツ最大主教としての仕事もしっかりしているわよ」

胸を張りつつ、そう答える金髪の女の人。正直十代後半か二十代にしか見えないけど、フィアンマ曰くババアらしい。

火織とアキラの方を見ると、何を言ってるのか分からないと言った顔をしてる。英語で喋ってるからだろ。言葉の壁は厚い。

「まあお前の事はどうでもいい。こっちの子の事だが……」

「聖人なら大歓迎よ。戦力としても申し分無いしね。後は実戦経験でも積みませればいいかしら。どう？」

急に話を振られ、おろおろする火織。英語だから何を言ったのか分かって無い。

「聖人だから大歓迎だって。後は実戦経験でも積みませればいい？  
って聞いている」

「あ、ありがとう。え、っと、大丈夫です。後、出来れば英語も教えて欲しいのですが……」

火織が話す事を英語に訳す。フィアンマはそう言えば英語話せなかったな。と呟いてる。ローラさんは頷きながら私の方を見る。

「慣れて無いでしょうし、言葉の方は日本語が話せる人と暫く行動して貰う事になるから、後で紹介するわ」

それを火織にそのまま伝える。火織はほっとした様子で胸を撫で下ろし、私にお礼を言ってきた。

「ありがとう、助かりました……でも、アスナって私と同年じゃ……」

「昔ちよつと呪いをかけられて、肉体が成長して無かったの」

アキラに聞こえない様子を付けながら話す。フィアンマはローラさんとまだ話してるみたいだし、聞かれては無いと思う。

話がついたのか、こっちを見ながら日本語で話出した。

「火織のサポートには土御門っていう日本人がつく。しばらく英語を教えて貰いながら仕事をするようにな」

「分かりました。ありがとうございます」

「礼は良いさ。しっかり学んで立派な魔術師になれ」

フィアンマの言う立派な魔術師というのは、一流という意味だ。魔法使いのアレとは意味合いが全然違う。

そのまま近くのフィッシュアンドチップスで軽めの昼食をとりながら休憩し、これからの事を話す。

「んー。意外とあっさり片付いたからな。ロンドンの観光とかをしてもいいかも知れん」

「アキラは初めてだから、丁度いいんじゃない？」

ルーシーはアキラを見ながらそう言う。私達も最近はまだロンドンには来ない。学校があるし、特に用事も無いから。

「でも、フィアンマさんの用事があるんでしょ？」

「気にしなくてもいいんだがな。まあ、そう言っても気にするだろうし、先に片付けて観光でもしようか」

「ちょっと嫌な予感もするしな、と呟いたのを、私は聞き逃さなかった。」

大抵フィアンマの嫌な予感は当たる。前にも似た様な事があったのを思い出す。

「ロンドンからはちよつと遠いかな。具体的な場所は森の中だし、あそこじゃ転移系統の魔術も魔法も使えん」

そう言いながら地図で場所を確認するフィアンマ。土地開発なんかで地形や道が変わっている事もあって、フィアンマの記憶と違う所が出たりするらしい。

「ま、大丈夫だ。直ぐに着く」

笑いながら言うフィアンマの後に、一抹の不安を抱えながら続く。

ザッザッザッ。草を踏みしめ、歩く音が森の中に響く。

「こんな所に人が住んでるの？」

「まあな。住むのに不便は無い筈だろう。会うのは数年振りか。ここ数年会って無かったからなあ」

まだ生きてると良いが、あのババア。と呟きつつ、フィアンマは先を歩く。

私達が危なくない様に突き出た枝を折ってくれたり、足元が大丈夫なように草を踏んで道を作ってくれたり、地味に気にかけてくれる。

そうやって進む事十数分。一軒の小屋を見つけた。

小さい家だ。森の中に立つ一軒の家。雰囲気がある。

「元気にしていると良いがな、ラフレンツェの奴。もしかすると次世代に移ったかも知れん」

そして、フィアンマは扉に手をかけた

## 第十八話 約束（しごと）（後書き）

はい、ここで終わりです。次回詳しくやっていく予定。

神裂ネセサリウスに入るの回。土御門は原作でもこの頃既に居た様なので抜擢。

後は地味にウィリアムさんとか。ローラは未だ普通の口調。

名前、洗礼名はwikiとかいろいろ駆使して書きました。  
情報提供：インフルさん、Spencerさん。ありがとうございました。

今回はネギまで言う六年前の事件。アレは冬ですが、こっちは夏。別の面倒事。

元ネタはサンホラより『エルの絵本（魔女とラフレンツェ）』です。聞いた事がある方はストーリーが予測できるかもしれませんが。ある程度オリジナルな設定とか作ってますが。

次回、オールドローズ隻眼魔女

感想お待ちしています。



## 第十九話 隻眼魔女（オールドローズ）

昔の話だ。

昔、とある国を追われた魔女が居た。

魔女は一人の子供を拾い、育てる事にした。名前はラフレンツェ。銀の髪と緋色の瞳、時が経つほどに美しく育った女の子だった。

だがある時、とある魔術師が一つの魔術を発動させる。

その術式は死者を冥界よりこの世に呼び出そうと言うモノ。当然、それを阻止するために動く者達が居た。

だが、その殆どはやられ、残った者が国へとその情報を伝えた。

魔女はラフレンツェを生贄に、とある術式を作りだす。それは呪い。身体的特徴を持ち出し、後世まで呪いを引き継がせる必要のある魔術。

冥界より死者を呼びだそうとした魔術師は、とある一人の魔術師によって殺された。

その魔術師は、圧倒的な力で溢れ出した亡者たちを沈め、冥界への扉を閉める事に成功した。

そして、その扉の鍵の役割を果たすのが、『ラフレンツェ』。

魔術師を倒した男の名を、ラト・ディストロ・フィアンマと言った

ラフレンツエの呪いをかけた魔女の名を、クリムゾンの深紅の魔女と謳われた  
オールドローズと言った。

聖なる右を持つ魔術師と、隻眼の魔女という名で高名な魔術師。  
二人はこれをきっかけに出会い、そして後世へと呪いを残す事を決めた。

これは、フィアンマに呪いを残す事が出来なかったという事もある。或いは聖なる右で何とか出来たのかもしれないが、如何せん、完全に扱えていない頃だった。

空中分解こそ起こさなかったが、その特異なる能力を完全に扱うには、練度も年期も足りなかった。

世界へと影響を与えたその魔術を封じ、鍵の役目となってその土地に縛られている『ラフレンツエ』という女。その、呪いをかけられた末裔。

その呪いが、未だに受け継がれている。

日は既に昇り終わって沈み始め、もう直ぐ夕方だと知らせる時間

帯。

キィ、と軽く軋む戸を開け、フィアンマは中を見る。

中には、銀色の髪と緋色の瞳。十五、六と言った年頃の少女がいた。少女はフィアンマの姿を見て警戒したが、何かに抑え込まれた様に警戒心は薄れる。

「え、つと、誰ですか？」

「……ふむ。先代は死んだか。流石に歳だったようだしな」

少女の容姿でそれを判断した。死の淵に呪いは受け継がれる。受け継がれていると言う事はつまり、先代は死んだと言う事。

「おばあちゃんの知り合いですか？」

「ああ、フィアンマという。話は聞いているか？」

「あ、フィアンマさん。聞いた事があります。私が拾われたのは五年くらい前ですから、あなたの話はよく聞いています」

「そうか。それならいい」

玄関口でそんな会話を続ける二人。アスナ達は後ろでその会話を聞いていた。

「ほれ、三人とも。挨拶して入れ」

フィアンマが促し、三人がそれぞれ挨拶して入る。中は綺麗に掃

除されていて、清潔感がある。

先代とは大違いだな。と心の中で呟きつつ、適当に椅子へと座った。

「飲み物は紅茶で良いですか？」

「ああ、何でも構わない」

アスナ達も特に要望は無く、五人分の紅茶をポットに入れて用意する。

「最近は来れ無くて悪かったな。いろいろ忙しかったんだ」

「いえ、大丈夫ですよ。一人じゃないですから」

その言葉に、眉を顰めた。

この辺りにはフィアンマの張った強力無比な結界があり、人が入る事はほぼ不可能。フィアンマ自身なら結界を破壊して入る事も可能ではあるが、それが出来る魔術師は世に数人いるかいないと言うレベル。

詰まる所、この場所に来る事の出来る人間など、殆どいないのだ。

「一人じゃ無い、か」

それが小動物 猫や小鳥辺りならいいのだが。

「それは、誰だ？」

「名前はオルフェウスって言うんですけど」

頬を紅く染めつつ、ラフレンツェはそう答える。フィアンマは、最悪の事態を予期した。

その姿は、恋する乙女そのものという感じだ。だが、それは本来ありえない。

ラフレンツェは、呪いが受け継がれた時点で恋心などを抱く事など無い。何故なら、呪いが心まで侵しているからだ。

鍵である少女の純潔。それを守り通すと言う事の為に、恋など以外の外。ばかばかしいと思うかもしれないが、実際にやれば世界が滅んでもおかしくは無かった魔術を封じているのだ。

大地に刻まれた戦術魔法陣。タクティカル・サークル 龍脈を利用したある意味での魔道書の『オリジン 原典』。フィアンマでさえ破壊する事の出来ない様なモノが、ここにはある。

ラフレンツェも、祖母が死んで口を閉ざし、誰も来ない、誰もいないこの場所でずっと暮らして来たのだろう。

呪いが薄まった？ 否、フィアンマならばそれ位は見抜ける。呪いが薄まったなら、同時に身体にも特徴が現れる筈だ。

（違うな、これは ）

誰かの、仕業だ。

フィアンマさえ、一目では見抜けぬほど巧みな術式。だが、不可能では無い。

観察眼がいくら優れているといっても、どれだけ大量の知識を有しているといっても、見るだけで魔術の全てが分かると言う訳ではないのだ。

「……それで、その……人に話すのは凄く恥ずかしいんですが……昨日の夜、彼と一つになれました……」

真っ赤にした顔をみて、これが普通の女の子ならば、この恋は応援してやりたくなる物だろう。

だが、フィアンマの取った行動は、ラフレンツェの首を絞める事だった。

左手で首を掴んで拘束し、右手でワイヤーを操って瞬く間に術式を構成していく。

「……な、何を……」

「最悪だよ。全く。最悪の事態だ。俺様は常に幸運な方だと思ってたんだがな」

聖人であり、聖なる右を持つフィアンマは幸運だ。聖人であるだけで、特に魔術を使用せずとも何らかの加護が存在し、聖なる右は多くの十字教的超常現象を自在に行使できる為、常に何かしらの加護が働く。

聖なる右を使えば、呪い自体を解く事は簡単だ。だが、解く訳に

はいかない。それをやってしまったえば、世界が終わる。

だから、一旦この場所を世界から『隔離』する。

閉ざされた場所。結界で外界との接触を断たれた世界で、呪いを復元させるのだ。

呪いは完全に体に定着している。この状態の魔術が、何者かによって外部から『書き換えられて』いる。

数年間姿を現さなかったツケだろう。もっと短いサイクルで周期的に来ていれば、ここまでの事態になる事は無かった筈だ。

恐らく、長い時間をかけて書き換えられたであろう術式を、強引に、短時間で、『書き直す』。

激痛が伴うだろう。もしかすると人格が崩壊する可能性もある。肉体的なもの、精神的なもの、痛みは想像を絶する筈だ。

それでも、誰かがやらなければならない。

「悪いが、さっさと終わらせ」

バチン！！ と、左手が弾かれた。その光景に目を見開く。

赤黒い何かが、ラフレンツェの体を覆う。気味の悪い何か。この世のものとは違う、何か別の存在。

見ているだけで吐き気がする様な、嫌悪感を誘う色。その色彩だけで平衡感覚を失いそうな、妙な感覚に陥る。

「まさか　っ！」

外を見る。夕暮れ時、日が沈むころ。

最悪だ。

ついて無い。全く持っついてついて無い。と、小さく呟く。

「アスナ、この時間帯。教えただろう？」

アスナはフィアンマの行動に驚きつつも、その行動を見ていた。そして、フィアンマに問いかけられ、外を見る。

そして、答えは、

「おつまがとき逢魔時……？」

おつまがとき逢魔時、おおまがとき大禍時とも呼ばれる、昼と夜の移り変わる時刻。

たそがれどき黄昏時のことで、古くは「暮れ六つ」や「酉の刻」ともいい、現在の18時頃のこと。

逢魔時とは、古くから言い伝えられていた時分。昼と夜、即ち現世《この世》と常世《あの世》の交わる時間帯。

「そう、逢魔時だ。ラフレンツェという呪いが封じていたのはな、これなんだよ」

軽い説明ならした。本当に軽いもので、大した事は教えていない。



ラフレンツェという呪いが封じていた物。それは、『道』だ。

あの世とこの世を繋げる、ふざけた魔術。あり得ない、ありえてはならない魔術を、発動させた奴がいた。

「いつの時代にも、死んだ者を求めるバカはいる。それを本気でやるうとした奴が、作り出した魔術だ」

古代エジプトにおいては、靈魂は不滅とされ、死者は復活するとされていた。オシリスが死と再生を司る神として尊崇される。

それ以外にも、日本では黄泉の国、インドでは死者の国などともいわれ、死とは宗教に置いて何かしらの仮説がなされているモノだ。

それらをいくつか組み合わせた、かなり分かり辛く、把握し辛い魔術。これを作った魔術師は相当な腕なのだろう。魔術師としての技量はフィアンマにさえ匹敵する。

死者を冥界から呼び戻す、生死の狭間を超える為の、あつてはならない魔術。

これを使えば、本来一方通行であるこの世からあの世への道が、相互通行になってしまふ。そうなれば、世界には死者が溢れ、混沌に陥る事になるだろう。

そもそも、オルフェウスという名を聞いた時から嫌な予感を感じていた。

オルフェウスとは、古代ヘレネス（ギリシャ）神話の英雄的芸術

家の名だ。

演奏を教わり、その音楽の魅力には敵することができないほどで、人間ばかりか、野の獣まで聴きほれ恍惚するほどだった。さらには樹木や岩までが影響され、樹はさし寄り、岩の冷酷さが和らいだという。

オルフェウスは妻エウリディケーを冥界に取り戻しに行くという伝説・物語で知られている。

つまり、その男は、冥界にいる誰かを連れ戻そうと、このふざけた魔術を復活させたのだ。

「一旦外へ出るぞ。ここは危ない」

早口にそう言い、壁をブチ抜いて外へと出る。

空は茜色に染まり、太陽が沈む方向と逆方向には夜空が見えた。

大地には幾何学的な文様が浮かび上がり、龍脈から力を得て、その魔術が発動しようとしている。

地面を見れば、所々が黒く滲んでいる。これは恐らく大地が『何か』に浸食されているのだろう。

それを見て、フィアンマは影の倉庫から神楽鈴を取り出し、鳴らす。

「ことよさしまつりき、かくよさしまつりし、くぬちにあらぶるか  
みたちをばかむとはしにとはしたまひ、かむはらひにはらひたまひ

てこととひし、いはねきねたちくさのかきはをもこおやめて」

『大袂』の祝詞。神道の魔術による楔みそぎの結界。

りいいいん　と、鳴る音色。その場所だけが、空気が変わる。

神秘的な音が重なり、より強く、より強靱に結界を構成していく。

祝詞を唱え終え、結界の強度を保たせるために更に更に地面に術式を描く。そして、周りには火を。

火とは元々『浄化』の意味を併せ持つ。『死と破壊』とも取れるし、『再生と浄化』の意とも取れるモノだ。死霊達に対して、強力な意味を持つだろう。

「……ふむ、まあこれ位やっておけばいいか」

ワイヤーを使って地面に描いた術式を見て、そう呟く。

「ここまでやるの?」

「というか、何が起こってるの?　これ」

「これ位やらなきゃ駄目なんだよ。後、出来ればこの後の事は見ない方がいいだろう」

ルーシーとアスナの問いにそう答える。聖なる右を発動させ、先ほどまでいた家を見据えた。

そこは、既に黒い何かに覆われており、気味の悪い何かが這いず

っている様にも見える。

これが、あの魔術の結果、なれの果てとも言えるだろう。

歪な形でこの世とあの世が混じり合い、中途半端に顕現した死霊。それらがこちら側の存在を喰らって実体を得ようと這いずり寄る。気味が悪くて仕方がない。

これより、夜が深まる度にこの『死霊』達は力を増していく。さつさと始末を付けなければ、不味い事になるのは自明の理だ。

「アスナ、連絡用の霊装は持つてるな？」

「うん。誰に連絡するの？」

「ローマ教皇。後はワシリーサだ」

ワシリーサと聞き、アスナは苦虫を潰した様な顔をする。そこま  
で嫌か、と問いかけたくなる表情だ。

「そついやな顔をするな。死霊や悪魔退治は『殲滅白書』<sup>あいつら</sup>の方が専門だ」

黒の教団の一派閥であるロシア成教。心霊現象の解析と解決を目的としている。

よって、他の十字教にない特長は『オカルトの検閲と削除』であり、「在らざるモノ」である幽霊・亡霊・悪霊といった分野を専門とする、所謂ゴーストバスターズ。

「生前を語るのは悲しみにつけいる偽物か天国にも地獄にも行けない罪人である」という判断から、「生前を語る存在はすべて殲滅対象」という方針の下に活動する

「後はアックアだ。戦力として使えるだろう」

実際、テッラはともかくヴェントは死霊に対しての手段は持ち合わせていない。テッラにしても、実体を持たない相手に『光の処刑』は効くか分からない。

フィアンマは聖なる右を、アックアには聖母の慈悲を利用した聖杯の水を扱う事で対処が可能だ。

死霊は直ぐそこまで迫っている。辺りは暗く染まり、夜空にきらめく星は明かりとしては心許無い。

「お前等はここで待て。結界から出ようなどと思うなよ。後はこの梓弓を鳴らし続ける。対策は十全にしているも足りない。最悪、喰われるぞ」

そう言って、結界から一歩出る。

途端に襲い掛かってくる『何か』。黒いソレは嫌悪感と不快感を嫌が応にも感じさせる。

フィアンマはそれを相手に、唯一度、聖なる右を振るうのみ。

莫大な閃光が迸る。爆音とともに死霊達は消し飛ばされ、冥界へと送り返される。

たすけてくれ……助けてくれ……

死者達の怨嗟の声が聞こえる。二度と戻る事の出来ない場所を求め、死者達は生者を探してさまようだけ。

ここから出してくれ……

頭が痛くなる。気分が悪くなる。

本来聞こえない声、聞こえてはいけない声。冥界から生者を求める声。

空は黒く覆われ、星が見えない。だが、手元にあるルーンのカードで火の魔術を使う事で、ある程度の明るさは保てる。

「対悪霊には十字架を、ってか」

影から取り出すのは十字剣。被<sup>エクソシズム</sup>魔式の為の剣だ。聖なる右を発動している以上、武器等何の意味も無い。

だが、これは戦闘の為の物では無い。

剣が壊れない程度に『右手』の力を込め、地面へと突き刺す。それだけで、地面を覆う気味の悪い黒い何かが薄れていく。

結界からそう遠くは無い。この辺り一帯に二重の結界を張る必要がある。幾重にも張り巡らせて置かなければ、抜けられる可能性がある。

要所の点<sup>ポイント</sup>に突き刺し、ワイヤーを使って円を描き、より詳しく陣

を描く。これで神道とは別の結界の出来上がりだ。

本来なら他にも歩方を使った魔術などで結界を張りたいが、如何せん、時間が無い。

これ以上は時間を無駄にできない。そう思い、死者達を『右手』を使って送り返しつつこの術の中心点へと向かう。

かくして、楽園への扉は開かれた。

## 第十九話 隻眼魔女（オルドローズ）（後書き）

神道等の魔術はレンタルマジカを参考にさせていただきました。夕グにレンタルマジカって書いた方がいいですかね？

次回は事件収拾まで行くと思います……多分。  
感想お待ちしています。



## 第二十話 樂園喪失（パラダイスロスト）（前書き）

投稿遅れました。Fateとか境ホラとかまあいろいろ興味を持って読んでたらこの始末。

な、何が起こったのか（ry

## 第二十話 樂園喪失（パラダイスロスト）

バチカン、イギリス、ロシア。黒の教団の中でも最高レベルの派閥が、一堂にそろって会談を設けていた。とはいえ、魔術を使った遠隔での会話だが。

イギリス清教“アークピショップ最大主教”、ローラ・スチュアート。

ロシア成教“殲滅白書”、ワシリーサ。

ローマ正教、ローマ教皇。

議題は先ほど連絡のあった『イギリスで起きている怪現象』について。霊装による探知は何かに妨害されているらしく、詳しい事は分からない。

「『必要悪の教会』も動かしてはいるけど、未だ具体的な場所は把握できないわ」

ローラが、いつもと違って神妙な顔で告げる。

「こちらも駄目だな。場所の探知が出来ない。イギリス国内と言う事までしか分からない」

「こっちも同じよ。どーしたもんかしらねえ」

教皇が重々しく告げるのに対し、ワシリーサも口調こそいつも通

りだが、雰囲気が違う。

皆、それだけ事態を重く受け止めていると言う事だ。

「居場所が探知出来ない理由は？」

「おそらく、あの辺りの空間が歪んでいるのでしょう。『天使の力』テレスマとも違う、また別の何かです」

「『殲滅白書』の観点から言わせて貰うと、アレは冥界に繋がっているんじゃないかって思うのよね」

ワシリーサの言葉に、皆一斉に顔を向けた。

教皇はそのまま続きを促し、話し始める。

「あの現象、空間が歪むとか言う辺りは分からないけど、『必要悪の教会』の調査とウチの過去の文献、後は魔導書の文献なんかも探ってる訳だけど」

分かったのは一つ、とワシリーサは続ける。

「イギリスの中で有数の龍脈が通っているにも拘らず、昔からイギリス自身が保有せず、私有地として強大な防壁が敷かれた一帯があった筈よ。あの男が自分の私有地で防護用のモノを用意していると言っていたから、恐らくはそれだと思っていた訳だけど……」。

それにしても、奇妙なのよね。アレは人を立ち入らせないモノでもあるけど、出ていかせないモノでもある。それに、龍脈だけに限って私有地としているにはあまりに範囲が広すぎる。一帯……それこそ、巨大な森一つを私有地にしてる筈よ。そこで、何かの大

魔術が発動した可能性も否めないわ。

現に、結界で分かり辛いけど亡者が徘徊してるみたいだし、伝承で一度国一つ滅びたつて言うのもある位だもの。可能性はあると思うわよ」

フィアンマが何かをしだした可能性がある。それを、三人が悟った。

あの男が、まさか世界に対して牙をむいた？ そう考えるが、他に答えが出てこない以上、答えはそれしか無い。

「もしくは、何かを封じている。と言う可能性もあるにはあるのよね。一回問いただした事があるけど、『あの場所には近づくな』の一点張りで何も教えてくれないし。フィアンマの工房として扱っているなら、あそこはレベルが低過ぎるわ」

フィアンマの為の魔術の実験室などとしては、聖ピエトロ大聖堂の一室が与えられている。それにプラスし自分の私有地である島も存在するが、こちらは未だ世界に露見していない。

普段は其処に籠って魔術の研究をしており、出てくることは滅多にない…… 筈なのだが、最近は戻ってくる事さえ殆ど無い。

昔はよく引き籠って研究をしていたと言うし、何かしらの理由があるのだろうと判断付ける。可能性としては、あの娘と言っていた少女たちが原因だろうか、と考える。

それにしあって、ルーシーとか言う女の子はかなり昔から一緒にいた筈だ。具体的には、アスナという子が来てから、とローラは考える。

何かをし始めた。その可能性が否めない。

だが、果たして彼に勝てる人間が存在するのだろうか？ 大天使さえ真正面から叩き潰すとさえ豪語し、それを可能にする知識と実力を兼ね備えている。

出来れば、敵対などしたくないものだ。

そんな風に考えている時、会議室の扉が開かれた。

「……何をしている、アックア。今は会議中だ。出ていけ」

教皇が威厳をもつてそう言うが、アックアはどこ吹く風と言った様子でずかずかと踏み入る。

「アスナから連絡があったわ。フィアンマの傍にいる筈のあの子から、ね」

それを聞き、教皇は黙らざるを得なくなった。確かにアックアは頼れる実力者だ。フィアンマに有事の際、頼る可能性は低くない。

……最も、それはフィアンマに何かあったと言う事だが、それはありえないだろうと教皇は頭を横に振る。

「それによると、イギリスの一角とある大魔術が発動したらしいわ。詳しい事はフィアンマが知ってるそうだけど、肝心のフィアンマは結界張ってその中心点を目指してるって言ってたわね」

「なら、あの男が動いていると言う事？ 私達の出番は無いじゃない

い」

「ところがどっこい、そうでも無いわ。フィアンマ曰く、“冥界の門が開かれた”らしい。肉体を求める死者や怨霊があのに増え始めているから、『殲滅白書』に伝える様にとも言われているわ」

視線でワシリーサに促すと、彼女は一旦霊装での通信を切る。恐らく、動き始めているのだろう。

「私も出る。被魔に関しては私ほど精通した者はいないハズよね？」

「ワシリーサも相当なレベルだが、お前と比べるとやはりお前が一步抜きんでているだろうからな」

とはいえ、実力差はそう無い。ギリギリ勝てるか勝てないか。アツクアとワシリーサの実力はそれほど伯仲している。

「既に用意は済ませているわ……あの子達に手を出したら、怨霊と言えど、タダじゃ置かない」

ゾツとする様な声色で呟き、教皇は冷や汗が出る。

「……他の神の右席は、出るのか？」

「今回は出ないそうよ。そもそも、ヴェントに至っては死者相手じゃ分が悪いしね」

天罰術式は限定的に空気が必要とする相手にこそ真価が発揮される。そもそも死んでいて呼吸を必要としない死者や霊体相手では分が悪いのだ。

それ以外にも方法がない事も無いのだが、使う気は無いらしい。

「……一応『殲滅白書』を動かして置いたわ。ローラ、そっちでの扱いは頼むわね」

「了解よ。こっちも動いてるし、専門部署に任せた方が手早くすむでしょうしね」

「ワシリーサ、お前は出ないのか？」

「出てもいいけど、指揮系統を」

「アスナが助けを求めてたぞ」

ブチッ、と通信が切れ、数分。沈黙を破ったのは、通信が繋がった音だった。

「用意できたわ。直ぐに出発するわね」

言いたい事は山ほどあるが、取りあえずこの事態を収拾させる事が先だと考え、教皇は何も話さない。

この二人の行動に軽く頭を抱えながら、小さくため息をつき、

「全く。フィアンマは、何を考えているのだろうか」

ポツリと呟く教皇。答えるものは、いない。

イギリス某所。

フィアンマは変わらず、歩き続けていた。歩き続けているが、周りは暗く、闇に覆われて視界が殆ど埋まっている。

（……明らかに距離がおかしい。空間がねじ曲がっているな、これは）

既に中心点であるラフレンツェの家についてもおかしくない筈だが、それが無い。距離感が狂っている訳でも無いだろう。

恐らく、この辺りに仕掛けられた結界が変質している。外からの干渉を防ぎ、内側からの衝撃を緩和する。そう言う結界が変質し、内部が迷路の様になっているのだ。

万が一の事を考えていなかったフィアンマでは無い。可能性の一つとして用意し、それに対する策として、ここから出さない為の結界を用意していた。

幾重にも張り巡らされた強靱な結界は、唯の亡者どもに破れるほど脆弱な作りはしていない。

とはいえ、流石にこれでは堂々巡りだ。幾ら行っても空間がねじ曲がっているのではどうしようもない。



その為、少し強硬手段を取る事にした。

結界は壊せない。壊せば恐らく外へと亡者たちが溢れ出すだろう。それは防がねばならない。

ならばどうするか。手っ取り早く考えついたのは一つ。

聖なる右を、一度振るうだけ。それだけでいい。

元々聖なる右には多数の十字教的超常現象を起こす力が備わっている。これがあるおかげでフィアンマの周りは亡者たちの瘴気で気を狂わされる事も無いし、余計な干渉を受ける事も無い。

闇を振りはらう様な、眩いばかりの閃光が炸裂した。

一瞬後で霧が張れるように闇が霧散し、空が見えた。星が見えることから推測するに、夜空だ。

「夜、か。面倒だな」

霊と言う類の存在は夜に力を増す。伝承や逸話などでもそうだが、人々は闇と夜を恐れる。

人に害を成す存在は闇夜に紛れて行動し、人に在らざる存在は聖なるものの象徴である光を恐れ、太陽の光を浴びれば力が減ずると言われる。

魔術的な観点から見れば、霊と言う存在は星の状態で力の上がり方が変わり、日が昇れば星が見えなくなる為、力が上がる事がない。

故に夜にのみ行動するのだ。

闇の霧は一時的に晴れただけで、また直ぐに霧で見えなくなるだろう。これを止めるには、早く中心点まで行って封印し直すしかない。

霧が晴れている間に中心点を探す。これ自体は別に難しい問題では無い。結界があるから外から探知がしにくいだけで、内側に入ればここまで分かりやすい異常の塊などそうは無い。

簡易的な探查魔術。方向は四時の方向。どうにも完全に見当違いの方向に向かっていたらしい。

「方向が分かれば、距離など問題では無い」

なにせ、十字的超常現象の一つには距離など関係無く移動できる力があるのだから。

アスナとアキラは、結界の中でおとなしくしていた。

アキラは怯えているのか、アスナに捕まっただままで、ルーシーは結界の外の様子をつがっている様だった。

「アックアに連絡は取れたのよね？」

「うん。直ぐに準備して来るって行つてたけど」

手持無沙汰な状態でも、連絡位は出来る。それゆえアックアに連絡してから一時間近くが経つ訳だが……。

「……お父様が、一時間もかかるなんて思えないけど」

「フィアンマは強いけど、何でもかんでも力でどうにか出来るって訳じゃないって、自分で言つてた」

「それなら余計にお父様が時間がかかる訳無いと思うけど」

フィアンマの持つ知識は膨大だ。十万三千冊の魔道書の知識、加えて、魔法の知識もあるし魔道書以外の知識もある。

力で解決できなくても、知識で解決できる。これほどの知識を持つものなどそうはいない。というか、存在しない。

そんな事を考えている時、結界が揺れた。

否、正確に言えば結界が張つてある大地が。大きく揺れた。

外側を見れば、何かが結界に攻撃してきているのが分かる。巨大な蛇の様な、気味の悪い何か。

「アレは……ヒュドラ!？」

九つの頭を持ち、地獄で見張りをしているとされる龍。化け物の中でも最高峰に脅威度としては高いだろう。

その吐息は毒が含まれ、矢にヒュドラの血を塗って放てば、毒矢として扱われたと言う。

幾らフィアンマが強靱な結界を張っていたとはいえ、あんな化け物がいては破壊されてしまう。ルーシーやアスナはそう考えた。

「だ、大丈夫なの？ あんな大きい龍が攻撃してるけど、この結界は、大丈夫なの？」

アキラが問う。ヒュドラが相手なのだ。この心配も仕方がない。

だが、恐らくアスナやルーシーでは相手にならない。昔一度やった天使を召喚するという方法も、偶像を持たない為に出来ない。

手詰まり。結界が破壊されるのを、待つしかない。そう考えた時。

「

！！！」

ヒュドラが、大きく鳴いた。

原因は分かり切っている。誰かが、ヒュドラの首を一つ落としたのだ。

「あんな可愛い女の子に手を出そうなんて、地獄の化け物も落ちたもの……」というか、地獄のモノだからこんなものよね」

現れたのは、アックア。周りには多量の水銀が渦巻き、アックア

の影から未だ溢れ出ている。

銀と言う物質は退魔性に優れる。しかも、魔術的な処理を施したもののなら尚更だ。

「斬ッ！！」

そう叫ぶと同時、水銀が形を変えて刃と成す。鞭のようにしなつて振りまわされるそれは、当たる寸前に厚さ数ミクロンまで圧縮されて、鋭利な刃と化していた。

水銀とは常温で液状を呈する最も重い物質であり、これを高圧、高速で振りまわした際の運動エネルギーは凄まじい。

アックア自身は、これを『月霊髓液』と呼んでいる。

水に関して言えば、『神<sup>ガブリエル</sup>の力』を司るアックアは最高峰の術師だ。流体操作もお手の物で、実力は真正面からの戦闘に関して言えば神の右席の中で二番目にあたる。

「自動防御。『水<sup>オ</sup>よ』」

水銀に与える命令と、水のルーン。

足元の土から水がしみ出し、空中に浮かんでアックアの上空に留まる。止まる事無く水が溢れ出していき、上空の水はどんどん嵩<sup>かさ</sup>を増し、膨大な量の水がアックアの意のままに動く。

そして、刻まれる文字はl a g u z<sup>ラグズ</sup>。

水とは、容易に堆積を変えられる物質で、上手く使えば爆弾にさえなる。

水はヒュドラに絡みつき、体積を増やして膨張し、ヒュドラの体を締め上げる。強度は大したものではないが、流体故に何度壊されても作り直す事が可能だ。

「斬ッ!!」

そして、水銀による攻撃。ヒュドラだけでは無く、周りの亡者達の相手もせねばならない。

聖杯の贋作を使った伝説。大釜の魔力には死者を蘇らせるもの、魔女ケーリッド・ウエンの使う3滴の靈感を準備するためのもの等があるという。

ある意味で、この事態を好転させ得るもの。

この伝承は、逆の意味で言えば蘇らせる事がない、と言う事だ。魔術では珍しいが、こういった逆転の意味を持たせる事も可能ではある。

最も、神話から外れてしまう事で予期せぬ力の発動と言う事もあり得る。その為、こういった行為をやる者は本当に一握りしかない。

手っ取り早くすませるには魔術的な意味を持った音で『鎮魂歌』レクイエムでも歌えばいいのだろうが、生憎と、アックアにはそれをやる暇も無い。

アスナ達にしても、その魔術は知らないのだ。

水の塊がハンマーの様にヒュドラにぶつかり、ヒュドラもまた、不死であるが故に怪我など気にせず捕縛を解いて殺そうとする。

持久戦は出来ない。ヒュドラの吐息には毒があると言われている。むやみに長引かせれば、体に何かしらの変調が起こる可能性もまた否めない。

「変形、攻撃開始」

小さく呟き、水銀と水がそれぞれ形を変える。

大きな槍。圧縮された水銀と水はダイヤモンドさえ切断するウォーターカッターの様なものだ。

それが、放たれる。

「

！！！」

強力な対魔性を持った水銀。アックアは元は『殲滅白書』の所属だ。故に、こういった類の相手は慣れている。

ヒュドラは大きく叫びながら槍をどうにかしようともがくが、見る見るうちに弱っていく。

魔術的处理を施したからこそその強力な攻撃。唯の水銀を操作しただけでは、こうはならない。

数百トンもの水を操作する事は、アックアにとって造作も無い。

それが水銀だろうと、だ。

「私を殺したいのなら、悪魔の王でも連れてくるのね」

小さく呟き、水銀はさらに変形した。無数の槍となって突き刺さり、ヒュドラはついに倒れ伏した。

「……取りあえず、無事ね。フィアンマの奴、この子たちを放っておいて何やってるのかしら……」

アスナ達の方を見ながらそう言い、何処かへ行つた同僚を思い浮かべた。



## 第二十話 楽園喪失（パラダイスロスト）（後書き）

はい。ケイネスです。水銀です。意外と強そうだったので出しました。

今後はアキラの武器にでもしようかなあ……と思ったりしてます。てか、この話意外と長くなった。

次回、次々回辺りでこの話は終わって舞台は麻帆良に移る予定。感想等あれば頂けると嬉しいです。

## 第二十一話 到来野（エリュシオン）（前書き）

到来の野。<sup>エリュシオン</sup> ひらがなあるとアレかな、と思ったものでタイトルでは消しました。

更新が遅れました。テストって滅ばいいと思う。

## 第二十一話 到来野（エリュシオン）

足元の草を踏みしめる音がする。周りは暗い。夜と言う事だけが原因では無く、辺り一帯にある霧も原因だ。

その中で一際異質な存在がいた。髪は黒く、瞳は赤い。体は大きく、数メートルと言う巨大さを誇っている。

服装は豪奢でありながらも汚れており、一昔前の貴族という風体を感じられる。雰囲気もまた、唯の人間でない事が一目瞭然だ。

一歩歩く度にその存在は異質さと強靱さを増し、存在感を増しながら、周りの悪魔を従え亡者を従属させ死者を隷属させて歩み続けていく。

異質の中心点。そこに、フィアンマはいた。

空間が歪み、辺りの木が曲線を描いているように見えて気持ち悪い。

そんな事を気にせず、中心点であり特異点であるその場所の前で足を止める。

「……ここか」

特異点であり、中心点である為か、異質さが肌で感じられる。その異常さは人間にとつては毒だろう。並の人間ならば、近づくだけで発狂してもおかしくは無い。

特に何かある訳ではない。何かがいる訳でも無い。強いて言うなら、ラフレンツェの亡骸がそこに横たわっているだけ。

だが、其処が扉だ。境界線は、既に破られている。

扉は見えない。だが、一步踏み出せばそこは景色が一変し、冥界となるのだろう。

死者が踏み出してはならぬ一步。生者の存在するこの世界に対して、一步踏み出す事は、本来ならば出来ない。

しかし、それを可能にするのがこの魔術。境界線をあいまいにし、死者を呼び寄せる滅びの魔術。

(……本来なら、こんな魔術は発動しない筈なんだがな)

フィアンマはそう思考しつつも、杭を一本一本地面に打ち込み、螺旋を描く。

本来一方通行であるべき、あの世とこの世の関係性を覆す。その魔術を打ち消す、と言うよりも封印する為の魔術だ。

基礎的な理論はギリシャ神話。オルフェウスの名を騙った辺りか

らも、その神話を使用した事が分かる。

音が聞こえる。豎琴だ。

オルフェウスは豎琴の名手であり、その音楽の魅力には敵するところがないほどで、人間ばかりか、野の獣まで聴きほれ恍惚するほど。さらには樹木や岩までが影響され、樹はさし寄り、岩の冷酷さが和らいだといわれている。

この音が冥界からこの世への道しるべになっているのだろうか。否、それは違う。

神話の通りにしたいのなら、この音は死の国で冥王ハデスに音楽を聞かせている筈だ。存在するかどうかは別の話として。

豎琴が止んだ。足音が聞こえ始める。

段々と大きくなってくる足音。近づいてくるのが分かる。

この神話の最後を知っているのなら、振り返る愚は犯さないだろう。振り返った所為で、神話では最愛の妻を取り戻す事が出来なかったのだから。

パン！ と手を叩く。

音は杭に伝わって振動し、魔術を用いることでその音は反響し大きくなっていく。

敵意に気付いたのか、男は豎琴を鳴らす。タネが割れているのなら、この程度の魔術は何の脅威にもならない。

豎琴の音は杭の音と響き合い、変質し、打ち消した。

「地獄に堕ちろ。クソ野郎」

ここまでやっておいて、助かるなどとは思っていないだろうな。

フィアンマの眼がそう語っている。助ける気などない。折角冥府まで道が直通で繋がっているのだ。そのまま堕ちてしまえ。

右肩に現れる歪な第三の腕。『聖なる右』は、莫大な光を放ち、扉の先にいる二人を容赦なく消し飛ばした。

どんな邪法だろうが悪法だろうが、問答無用で叩き潰し、悪魔の王を地獄の底へ縛り付け、1000年の安息を保障した右方の力。

莫大な閃光は魔術的な意味を持ち、扉を強制的に閉める。

歪みを正す。それがこの右腕の力だ。

唯存在するだけで瘴気は浄化される。聖なるものの象徴。

辺りにいた亡者や死者はこの右腕の近くによるだけで存在が薄れ、消されていく。冥界へと帰っていく。

「……終わった、か」

後始末もする必要があるが、それは後で良い。一先ず封印を強固なものにしなければならぬ。十万三千冊の魔道書の知識を持って、この冥府の扉をこの地に祭封印する。

しかし、これで全てが終わった訳ではない。この魔術は、どう考えてもあの程度の男が自力で何とかできるレベルでは無い。

相対すれば相手の力は大体計れる。だが、あの男は計るまでも無く三流の魔術師だ。

あの程度の魔術では、フィアンマはおろか正式な魔術結社に属している魔術師でも勝てる。そう思えるほどの実力だった。

裏がある。もしくは、バックがいる。

だが、それを調べるのは一先ず後回しだ。後始末はローラにでも任せ、さっさとここから立ち去るとしよう。と思考し、アスナ達の事を思う。

「ハア、ハア、ハア……」

「どうした？ この程度かね、君の実力は？」

「アックア！」

血塗れでありながらも、アックアは立っている。その前に立つのは一人の人物。口調や声からは男の様だと思えるが、絶対にそう

だとは言いい切れない。

黒服、メートルで計るべき大柄の体躯。後ろには亡者、死者の群れ。

辺りに飛び散るのは水だけでは無く、血、水銀もある。

「ハア、ハア……斬ッ！」

「見飽きたよ、それは」

だが、避けようとしめない。超高压の刃となった水銀を、肌で受け止める。

いや、受け止めたと言うよりは刃が自分から避けた、と言った方が近いかもしれない。

「一体、どうなってるの……？」

アキラが疑問を浮かべる。

あの水銀は先ほどまでヒュドラを圧倒し、叩き潰した霊装だ。使用者の事も考えれば、一級品の物だと判断できる。

だが、あの男はここに来てから一步も動いていない。攻撃は全て直に受けているにも拘らず、傷さえ無く、疲労さえ無い様に思える。

「そもそも人間程度が我と争う事が、まず間違いなのだよ。幾ら魔術が使えても、脆弱な人間であることには変わりないだろう？」



溜息でも突くかのように肩をすくめ、そう言う。

だが、

「そこが良い。君達のこの世界は楽しいよ。移りゆく歴史と言い、争い、娯楽、あらゆるものが存在する……ああ、羨ましいね、本当に」

「羨ましい……？」

悪魔が、人間を羨む？

アスナが疑問を浮かべたのは其処だ。悪魔とは往々にして人間を見下す。だが、この悪魔はそれらとは違う。存在感も、力も、そこらの悪魔どころか爵位級さえ圧倒する力を持っている。

格が違うのだ。『神の右席』の実力者として、この存在に勝てる者がいるのか。

そう考えた時だ。

「少々、助太刀させて貰うのである」

派手な音が響き、巨大なメイスが振るわれた。

ゴルフウェアのような服を着た、筋肉質で巨大な男。水の魔術を使っているのか、その動きに音が無く、滑らかだ。

衝撃は殺しきれなかったのか、大きく後退する悪魔。

突然現れた男に驚くアックアとアスナ達。男の手には巨大な金属の塊、撲殺用の金属棍棒<sup>メイス</sup>。

騎士が馬上で使う槍にも似ているが、違う。五メートルを超す大きさのそれは、まるで鉄骨を使って作られたかのようなオブジェ。

追撃するのは辺りに散らばっていた大量の水。槍や鎚へと形を変え、悪魔へと殺到する。

そのすきに男はアックアの元へ行き、治癒魔術を施す。

「あなた、は……？」

「私の名はウィリアム＝オルウェル。唯の傭兵である。いや、今はこう名乗ろう『Flere210』と」

アスナ達に背を向け、ウィリアムはメイスを構えた。魔法名を名乗ったと言う事は、戦闘の意思があると言う事。

激戦が、始まる。

ウィリアムがここに来たのは、イギリスにいらながらも異質さを感じ取った所為だ。

聖人である為、イギリス清教が動くよりも早くここへ来る事が出来た。無論、最低限の準備をして。

内部では空間が歪んで場所が分かり辛く、道に迷っていた所で、アックアとアスナ達を発見、助力する事にした。

相手は明らかに人間では無い。なら、人間に手助けをするのはある意味で当然の事だろう。

「おや、新手か。まあ、どうでもいいがね」

まるで何も無かったかのように、悪魔は立ち上がって服をはたく顔を良く見ると、魔力の流れと共に鱗の様な物が見える。

「先ほどの攻撃で程度は知れた。それに、得意な魔術もね。君では私の足元にも及ばないよ」

一瞬だ。一步で距離を詰めた悪魔は、その大木のような腕を高速で振りまわし、ウィリアムへと肉薄する。

対するウィリアムは聖人。身体能力は常人と比べれば途方も無いが、最上位の悪魔と比べればそれは見劣りするだろう。

振るわれた腕を、メイスでいなす。風が頬を打ち、威力の大きさを物語らせる。腕を振りまわすだけでこの風圧。直に当たればどうなるかなど、想像に難くない。

接近戦は危険だと判断し、水の魔術で距離を取る。

だが、それだけでアックアがあそこまでボロボロにやられた理由

が説明できない。ウィリアムから見ても、アックアは相当な腕の魔術師だ。聖人ほどで無いにしろ、身体能力は高い。

体つき、体の動かし方を少し見る事でそう判断したが、絶対とは言えない。油断したからあそこまでダメージを喰らったのかもしれないし、何か一瞬のすきをつかれたのかもしれない。可能性なら幾らでもある。

ウィリアムはメイスを振りまわす。高速で振りまわされるそれは、大木ですら一撃で薙ぎ倒す一撃だ。

それを、片手で、ものともせずに受け止める。

「……ふむ。聖人か。なるほど、先ほどの言は訂正しよう。君は多少我の力に喰らいつく事は可能だ」

言葉の続きを聞く気は無い。水が空中に浮かび、先ほどと同じ様に、ウィリアムが攻撃を仕掛けたのだ。

だが、意味がない。水は悪魔を避けた。

「？」

疑問が頭をよぎる。水による攻撃が効かない。相手は悪魔で、水による攻撃が効かない。その上、元になる実力も半端では無いと来れば、特定は容易い。

「……リヴァイアサンよ」

ウィリアムが検討を付け始めた時、アックアが隣でそう言った。

傷はまだ残っており、動く事もままならない。

リヴァイアサン。海の大悪魔とも呼ばれ、ルシファアの側近のひとりで、“嫉妬”をつかさどり、海軍の大提督を務めると言われている。

身体は非常に巨大で、伝承では五キロメートルから十キロメートルほどの体を持っていたと伝えられる。

神に作られた史上最強の生物。大海の其処に眠り、ひとたび起きるとは大嵐を起こして甚大なる被害を与えと言う、天災と呼ぶべき生物。

『もつとも深い地獄にそびえ、天のアーチに達する二本の柱』のひとつであり、驕りのすべてを司るつかさどともされている存在。

地獄の第三位。地獄の海軍提督と言われ、実力は悪魔の中でも上位に位置する。

なるほど、水の時獣とされるリヴァイアサンならば、水に対する操作の優先権が存在してもおかしくない。

天使が中途半端に具現した時は、水の魔術が使えなくなる。同様に、悪魔が具現した為に水の魔術が中途半端にしか使えなくなっているのだろう。

悪魔学の魔術ならいざ知らず、基本的に神を信じる宗教の魔術を扱う以上、悪魔が操作できるのが一定範囲と言うのも頷けることだ。ならば、魔術に頼らず戦えば良い。

「いくぞ、悪魔」

動く。聖人の圧倒的な速度による近接戦闘。遠距離からの魔術攻撃が出来ない以上、方法は近接戦による攻撃しか無い。

だが、

「甘い。甘いなあ、人間。甘過ぎて反吐が出るな」

速い。余りにも速い動きで、悪魔はウィリアムの速度を上回った。

史上最強の生物の名は伊達では無い。その能力差は、RPGにおける異常なまでのレベル差とも言えるだろう。その差は、正に圧倒的としか比喻のしようがない。

「そもそも、人間が我ら悪魔を超えようとすること自体が間違いだと分かんかな」

大天使と真正面から戦闘さえ出来る。悪魔の大幹部の力は、それほどまでに圧倒的だ。

大木のような腕を振りまわし、ウィリアムを弾き飛ばす。咄嗟にメイスで庇ったおかげでダメージは比較的軽い方だが、それでもダメージである事に変わりはない。

近くにいたアックアが水の魔術を行使して攻撃をかける。目くらましにでもなれば、と思つての事だ。

だが、今度はそれを避けた。速度で圧倒する悪魔は、アックアの

体軀をモノともせず弾き飛ばし、数メートルをノーバウンドで飛ぶ。力無く地面に倒れ込み、起き上がる事は無い。

死んだか、気絶したか。どちらにしても体は動かないだろう。あれほどの衝撃を直に受けて、体が未だ残っていると言うのも驚きのだから。

悪魔との相性が悪過ぎる。得意とする水の魔術は封じられ、近接戦闘では上回れない。これでどう勝てと言っただ。

だが、無理でもやらねばならない。そう考え、立ち上がって敵を見据えた時

「<sup>Kenn</sup>えん

ウィリアムにとって一番の予想外が起きた。

「<sup>ee</sup>エメット

アスナとルーシーが、結界から出てきたのだ。

両手に構えたルーン文字のカード。防水等を施した特別性で、惜しげも無く術を発動させる。

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ。煉獄の火、大罪を浄化する火よ。我が手に宿りて力と成せ」

爆炎が凝縮される。辺り一帯を焼き尽くさんとする炎が、圧縮され、一点に集中して悪魔を狙った。

その火を見た瞬間、悪魔は始めて防衛に移った。

水进行操作し、壁としてその火にぶつける。膨大な水と圧縮された炎はぶつかり、蒸発した。

壁としての役割を果たさせる事で炎の威力を減衰させ、ダメージを軽減させようとしたのだ。

「原書は土。神は土より形を創り、命を吹き込み、それに人とな前を付けた」

地面に文様を描いているのは、ルーシー。

「その秘法は墮天によって人に伝えられた。しかしその秘法は人の手で成せるものに在らず。墮天によって口伝出来るものに在らず」

地面に描かれていく文様は幾何学的であり、人に理解できるものではない。

「かくして人は出来そこないの命を作り出した。呼ばれるは泥の人形、命持たざる隷属のモノ……さあ、行きなさい。ゴーレム達よ」



最後に手を叩き、音を響かせる。途端に地面は動き出し、いくつもの人間大のゴーレム達が現れる。

水の壁をモノともせず、突き進むゴーレム達。悪魔にとってこれは特段強いモノでも無いと判断したのか、その大きな腕で薙ぎ掃う。

途端に土に帰り、動きを阻害するように悪魔に土が絡みつく。

「繰り返す  
Repeat」

アスナの続く一言で、悪魔は状況を悟る。

もう一度放たれた強靱な一撃。絡みついた土ごと焼き尽くさんと  
ほとばし進み、悪魔を攻撃した。

「素晴らしい。素晴らしいな、君達は」

だが、無傷。焼け焦げた服の下にある鱗を見ると、煤こそ付いているが、傷など見当たらない。

「その年でこの熟練さ。我も驚きを隠しきれんよ。将来が楽しみだ」

豪快に笑い、辺りに飛び散っている水を再度集める。

ウィリアムもまた、この状況に驚いている。まさか結界の中にいた子供たちが、ここまで魔術を使いこなすとは考えていなかったのだ。

自分も負けていられないと、メイスを構えて動こうとした時。

「動かないで」

アキラが治癒魔術を行使していた。相手に水の魔術が効かないのなら、自分の出番は無い。そう判断して、治療をする事にしたのだ。

念の為、と言う事で、フィアンマから天草式の治癒魔術を教えて貰っている。今はまだあまり出来は良くないが、多少傷を癒す程度の力はあるだろう。

「……君達は、一体……」

「気になるか、傭兵？」

突如聞こえてきた声に、身構えるウィリアム。

「フィアンマさん！」

「アキラ、遅くなって悪かったな。少し手間取った」

悠々と一步を踏み出す。視界の先には時間稼ぎの為に戦うアスナとルーシー。

実力差があつたとしても、ある程度のレベルまでは時間稼ぎ位出来る様に育てているのだ。そう簡単にやられる筈も無く。

土で足を封じられ、炎で視界と操る水を焼失させられていくリヴアイアサン。本気ならば一瞬で薙ぎ掃うことも可能なのだろう。それをしないのは、ひとえに遊んでいるから、としか言いようがない。

遊ばれている。だが、その所為でやられる。典型的な悪役のパターンだな、と小さく呟く。

どの道、フィアンマが戦うなら負けは無い。大天使と同格だろうと、それを上回るフィアンマには勝てる道理が無い。

「  
遅いよ、フィアンマお父様」

娘二人から叱責され、苦笑するフィアンマ。悪魔はフィアンマの目の前に立ち、フィアンマも悪魔の目の前に立った。

「  
……お前が、こいつ等と戦ったのか？」

アックアの方を見た。ボロボロにやられ、治療をしなければ一刻を争うような状態だ。

「そうなる。我がやった事だよ、これは。……お前は誰だ？ あの  
子たちの親、か？」

「そうなる。俺様はフィアンマだ。覚えておくんだな、地獄の海軍  
提督」

冥府と言っても、天国や地獄、宗教によっていろいろと違う。いろんな宗教の魔術を混ぜた所為で、こんな化け物まで姿を現した。

この程度の後始末なら、訳は無い。

「我の名はリヴァイアサン……いや、知っているだろうから名乗るまでも無いな。覚えておくよ、フィアンマ。お前は全力を出させてくれるか？」

「ハッ、俺様と相対しておいて、全力を出さない気か？ 失笑モノだぞ、それは」

「ほう、言っじゃないか。ならばやってやろうではないか」

瞬間、視界から悪魔が消えた。聖人でさえ反応しきれない、圧倒的な速度。

それを

「甘いな。俺様相手に速度など意味があると思っているのか？」

殴り飛ばした。否、正確に言えば吹き飛ばした。

聖なる右の力で、避ける事も出来ずに数百メートルと言う距離をノーバウンドで吹き飛ばす。間の木々を薙ぎ倒しながら、だ。

実力など関係無い。破壊力・速度・硬度・知能・筋力・間合い・人数・得物等、全く持って意味がない。

ただ、振れば終わる。それだけだ。

歪な右腕を現しつつ、恐らくは還ったであろう悪魔を見据える。手応えからしても、やった筈だ。

しかし、妙な感覚だ。とフィアンマは思う。何か引っかかりを覚えると言えばそれまでだが、ともかく今はアックアの回収と自体の収集をしなければならない。

「……さて、所でお前は誰だ？」

「私の名はウィリアム・オルウェルである。聖人だ」

「なるほど、聖人が……」

アックアは恐らく、もう復帰は出来ないだろう。見ただけで分かる。アレは内臓や筋肉がズタズタにやられている。戦闘はもう出来る体じゃ無い。

戦闘が出来るかできないかで決まる訳ではないが、少なくともアイツはもう歳だった。引退させるべきか、と考える。

取りあえず生きているようだから一先ず治療し、横にして寝せる。

そして、ウィリアムを見る。原作は今でも覚えている。記憶力がいいのは良い事だ。

「……ウィリアム・オルウェル。一先ず礼を言おう。俺様の娘達を守ってくれてたみたいだしな」

「いや、そんな事はない。……だが、彼女達の魔術師としての腕に驚いたものである。凄まじいな、あの子たちは」

「俺様の娘二人と知り合いの子だ。そこらの未熟な魔術師よりも、余程卓越した知識と技術を兼ね備えさせている」

「なるほど、それは納得できるな」

一度頷き、アスナ達の方を見る。フィアンマからすれば、ウィリ

アムの実力はまだ未知数の筈なのだが。

「よし、お前ウチの組織には入れ。異議は認めん」

「何？ 私は傭兵として世界を回っている。どこかの組織に属する気は無いのである」

「異議は認めんと言った筈だ。組織としての立場があれば動き辛くなる時もあるが、利用するのも一つの手だぞ？」

「しかし……」

「しかしでは無い。傭兵なのだろう？ なら、どこの組織にも属していない筈だ。良いから入れ」

強引に組織に入れようとするフィアンマ。ウィリアムも段々と相手をするのが面倒になってきたのか、役職を聞いた。

「俺様の属する組織は『黒の教団』の最暗部『神の右席』だ。あそこ倒れてる女も一応ウチの組織の一員なのだがな、みての通りもう歳だ。お前が跡が魔になれ。引き継ぎはさっさと済ませてやるから」

次代の後方を探すのが面倒、という理由もある。才能の有無や魔術師としてのレベル。それらが揃ってこそ『神の右席』の一員として認められる。

ウィリアムはそれを全て揃えている為、丁度いい人材なのだ。聖人でもあるし。

「……ハア、引く気は無いのであるな」

「当たり前だろう。お前ほどの人材は世界広しと言えどそうはいないのだ」

「……良いだろう。このウィリアムⅡオルウェル。『神の右席』に入らせていただく」

「許可する。お前は明日から『後方のアックア』を名乗れ……いや、待て、まだ引き継ぎが終わって無い。それ次第だな」

フィアンマは不敵に笑いながら、そう告げた。

## 第二十一話 到来野（エリュシオン）（後書き）

若干無理矢理な気がしなくても無い。でもどうせウィリアムさんは神の右席に入らせる予定でしたし、問題ねーかな、と。

次回はキンクリの予定。後は事後報告ですし、数年たった、あれはくという流れで良いかな、と。

感想があればお待ちします。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4821u/>

---

とある右方の異世界目録

2011年11月26日16時53分発行